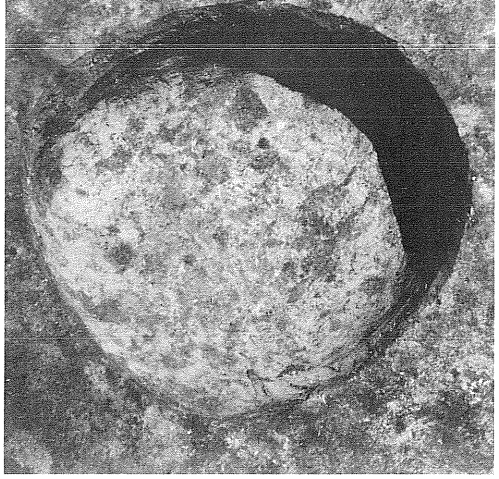
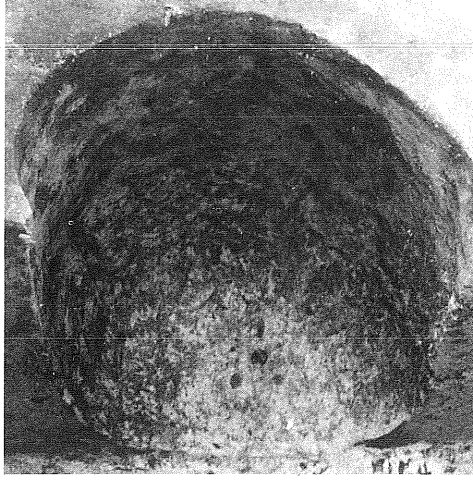
5号住居跡（南→）

6号住居跡（南→）

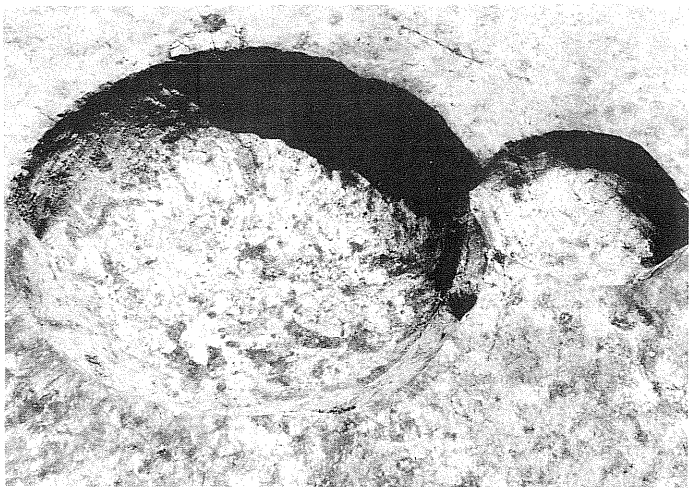
図版 4



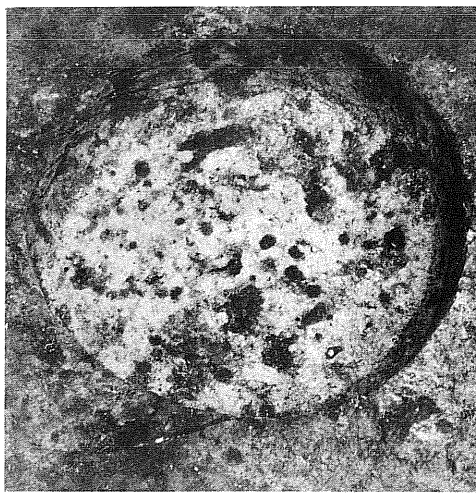
1 号土坑（西→）



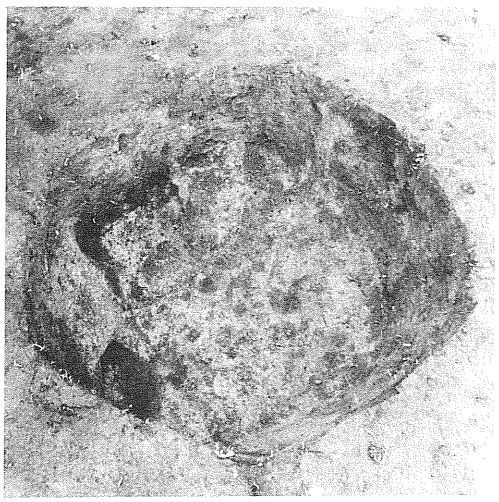
4 号土坑（南→）



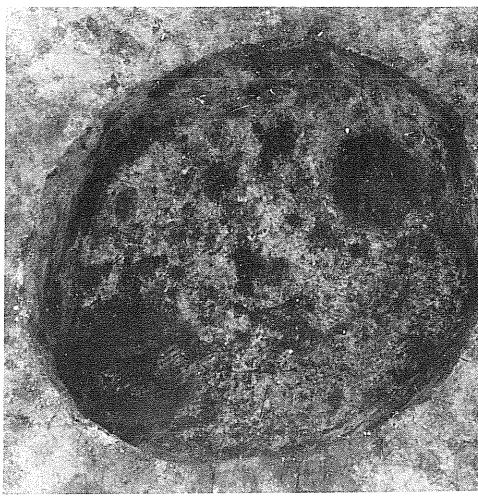
7 号土坑（北→）



8 号土坑（南→）



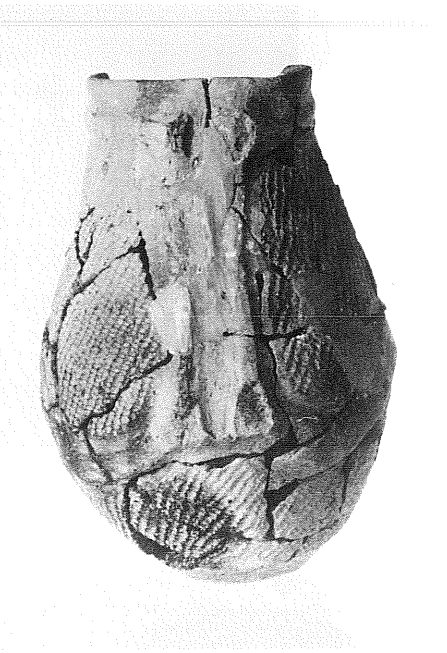
10号土坑（南→）



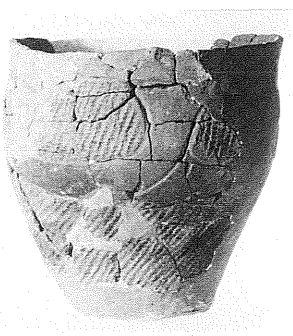
13号土坑（東→）

図版 5

1 号住居跡出土



6 号住居跡出土

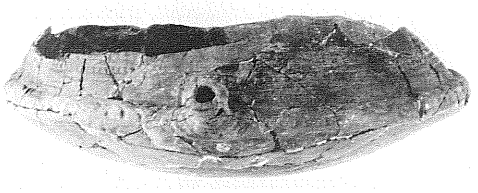


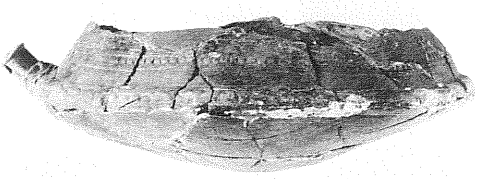
4 号住居跡出土

遺構内出土土器

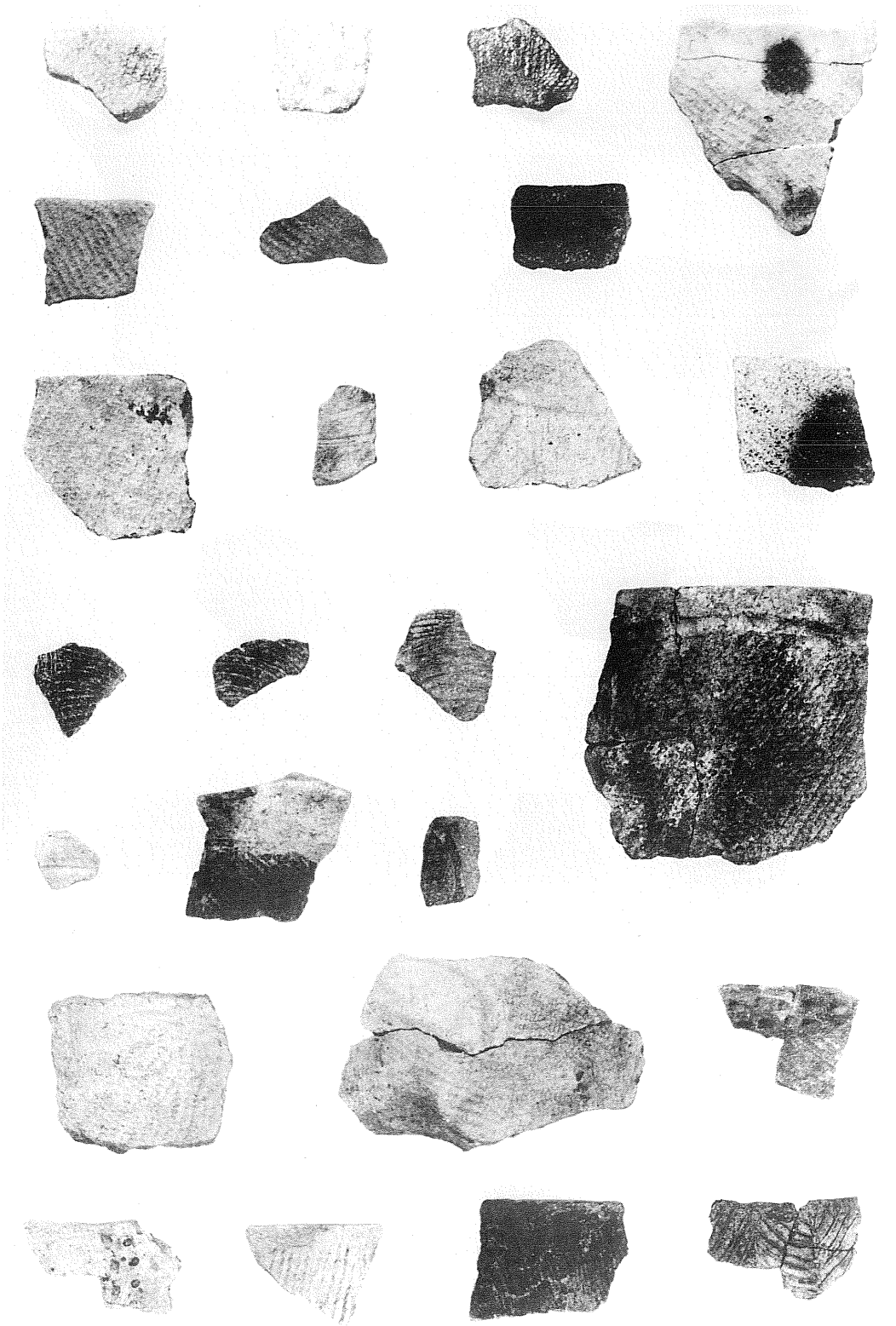
遺構外出土土器

図版 6

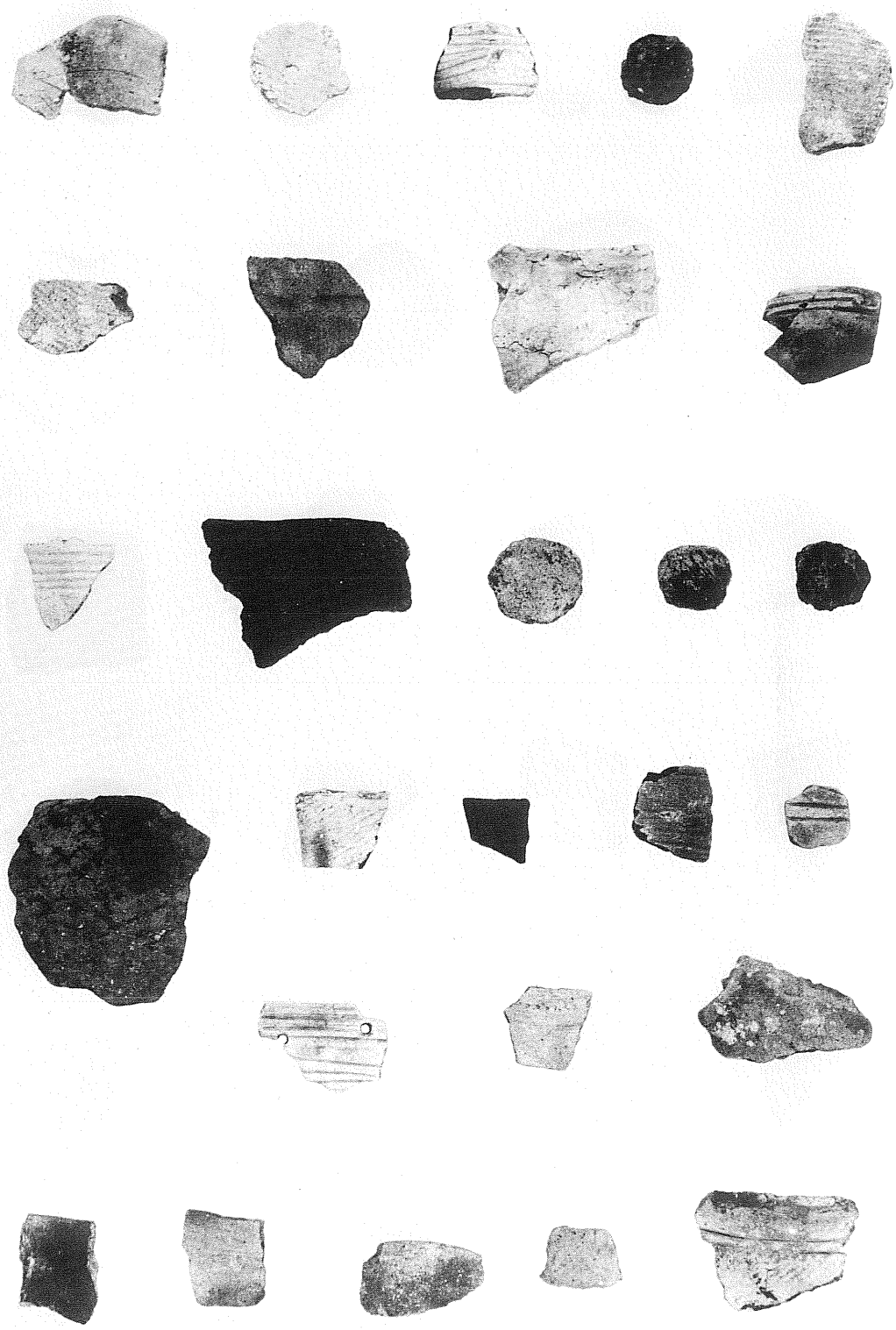




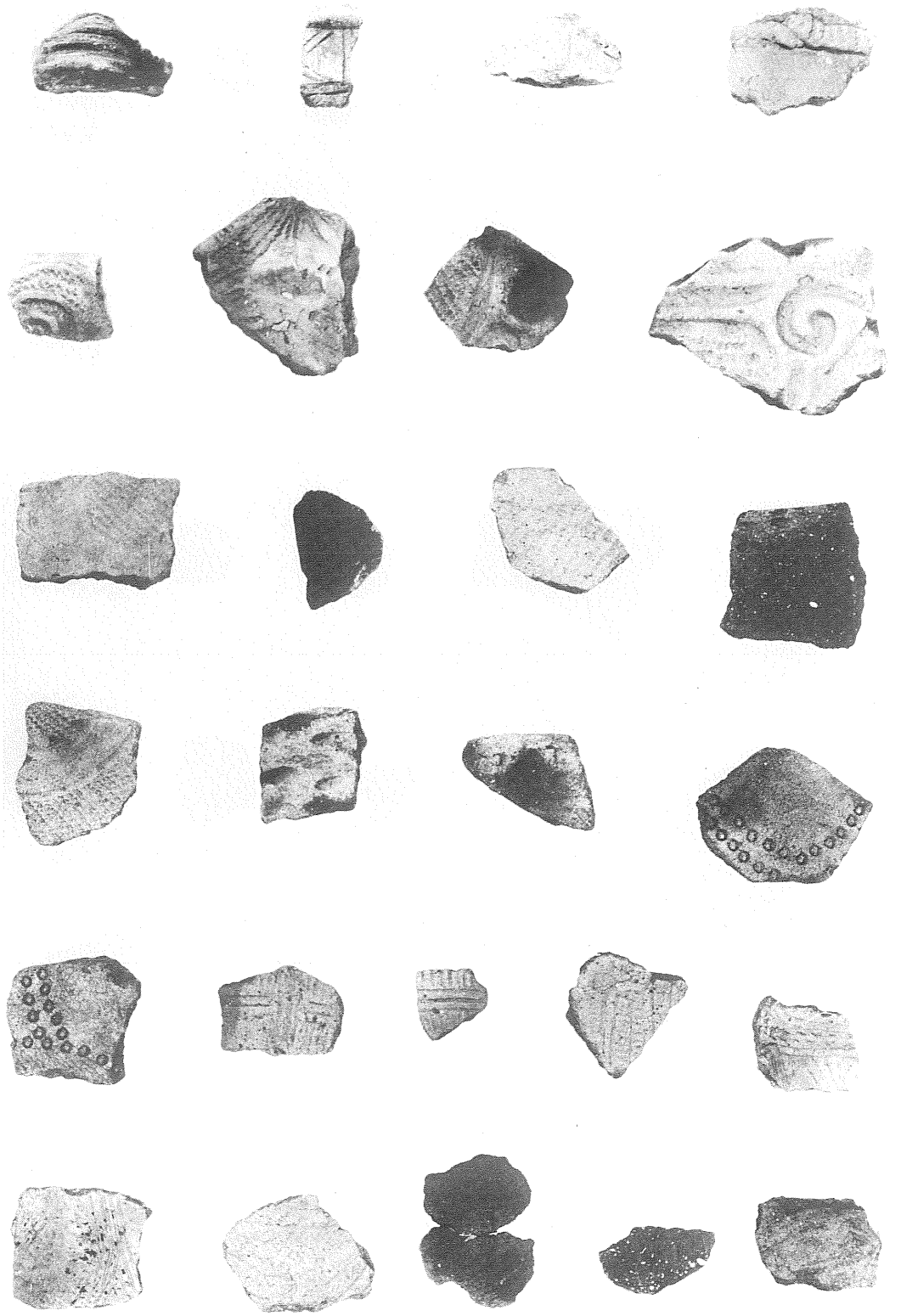
図版 7　遺構外出土土器



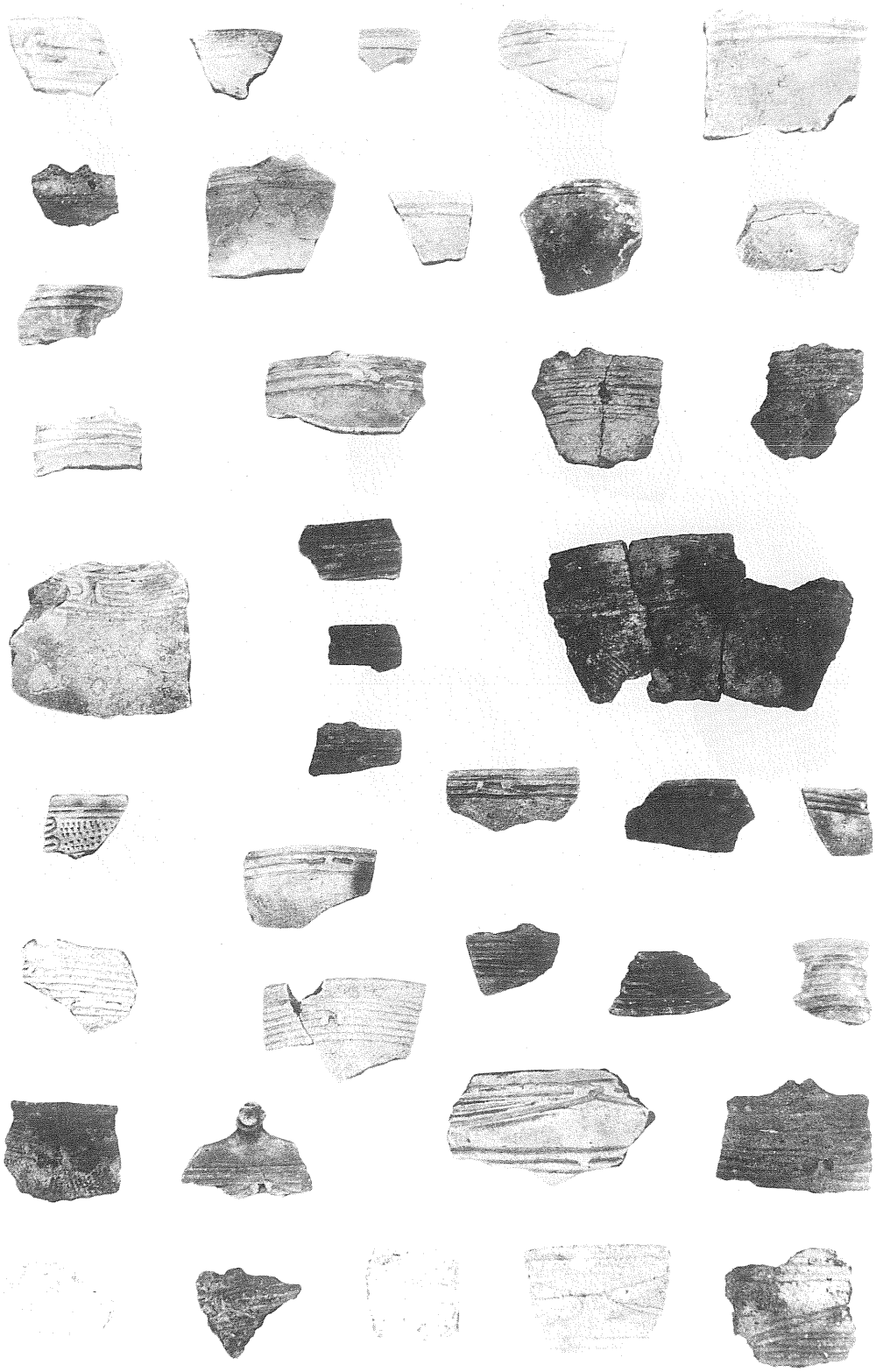
図版 8　遺構内出土土器



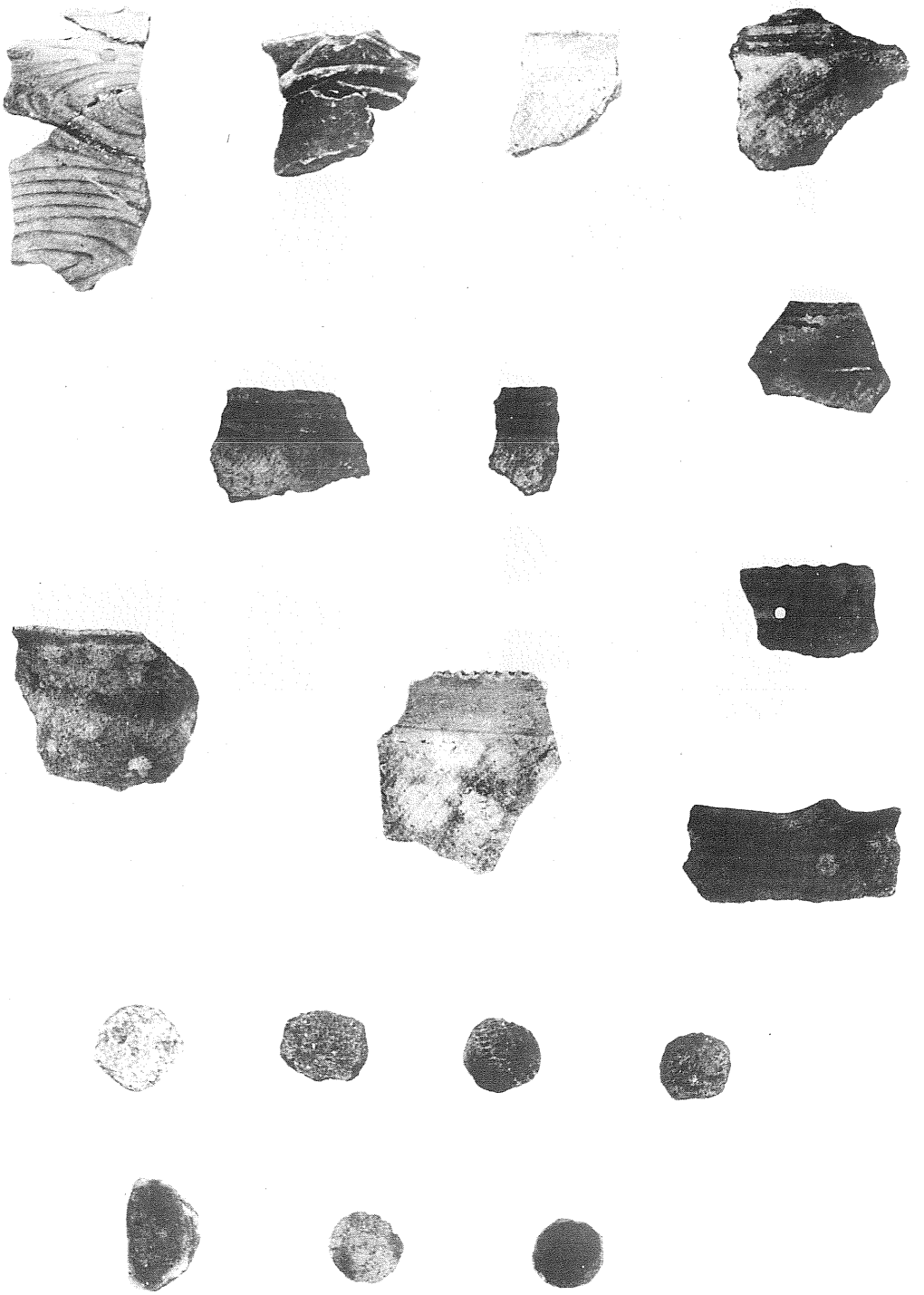
図版 9　遺構内出土土器



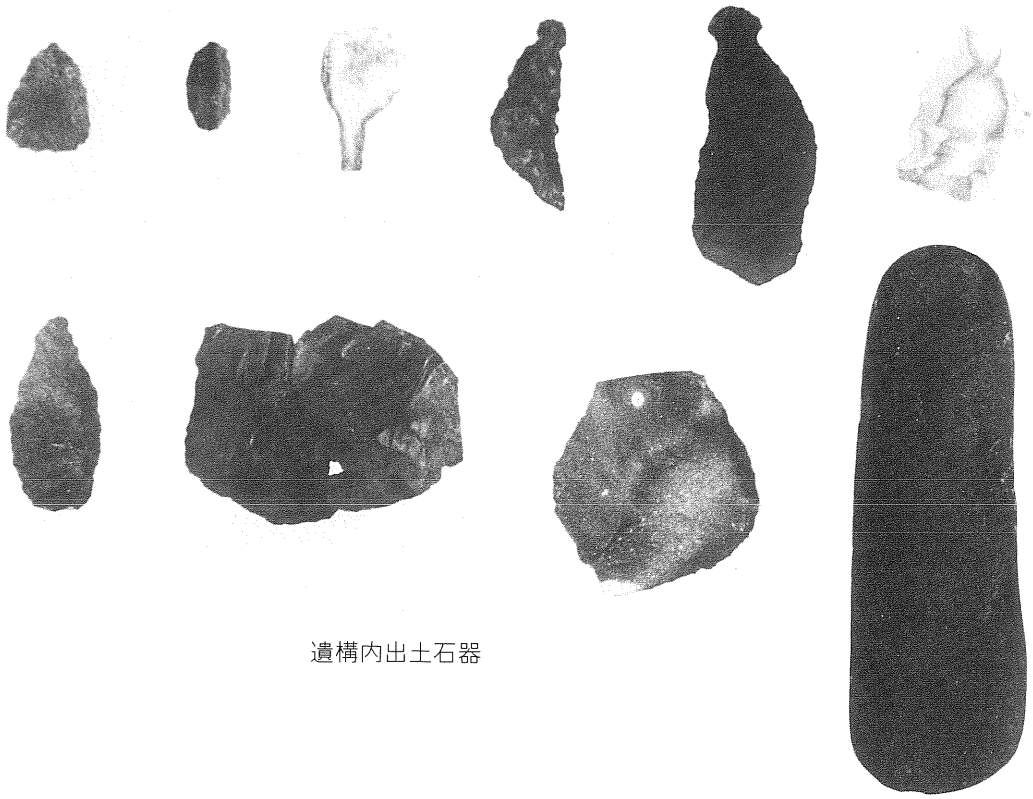
図版10　遺構外出土土器



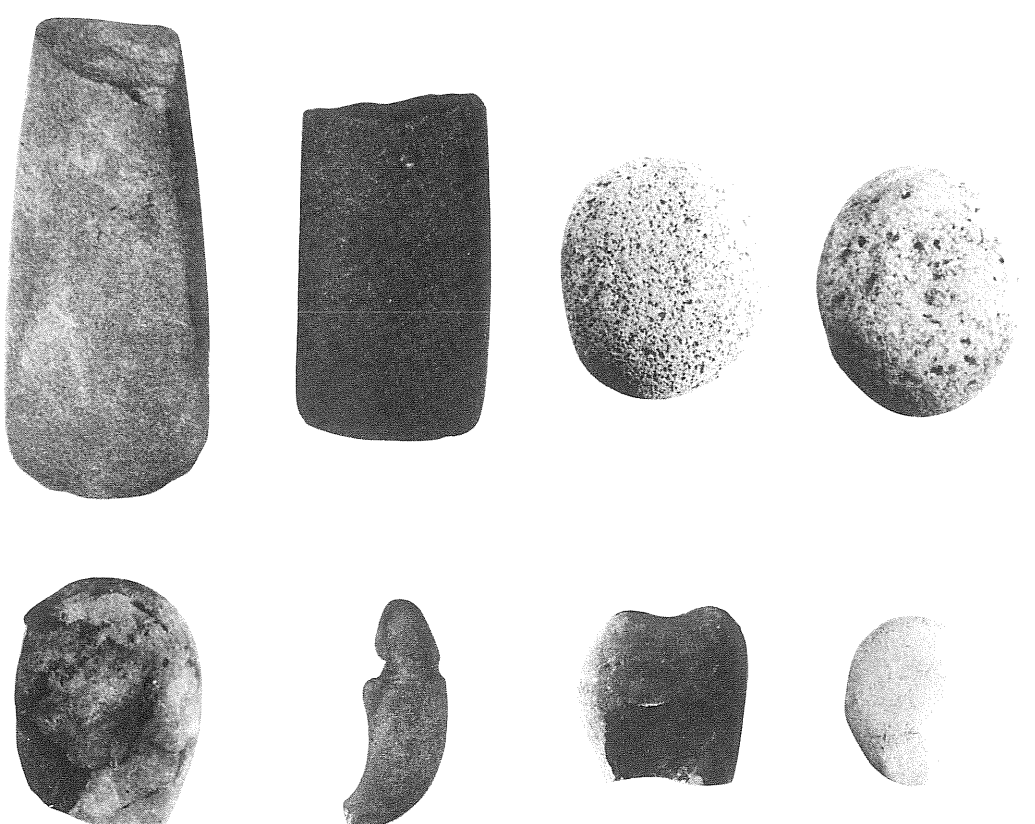
図版11　遺構外出土土器



図版12　遺構外出土土器

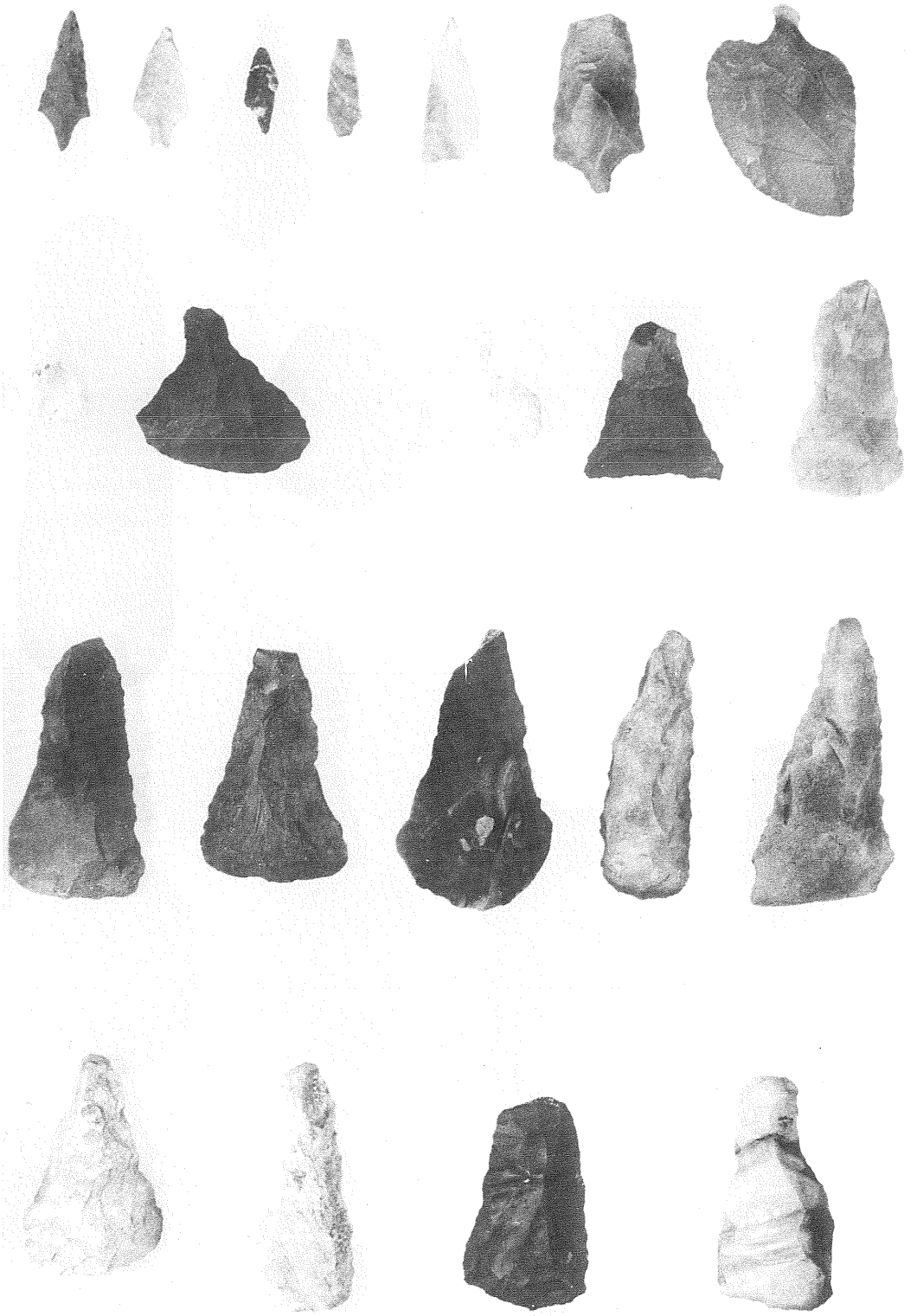


遺構内出土石器



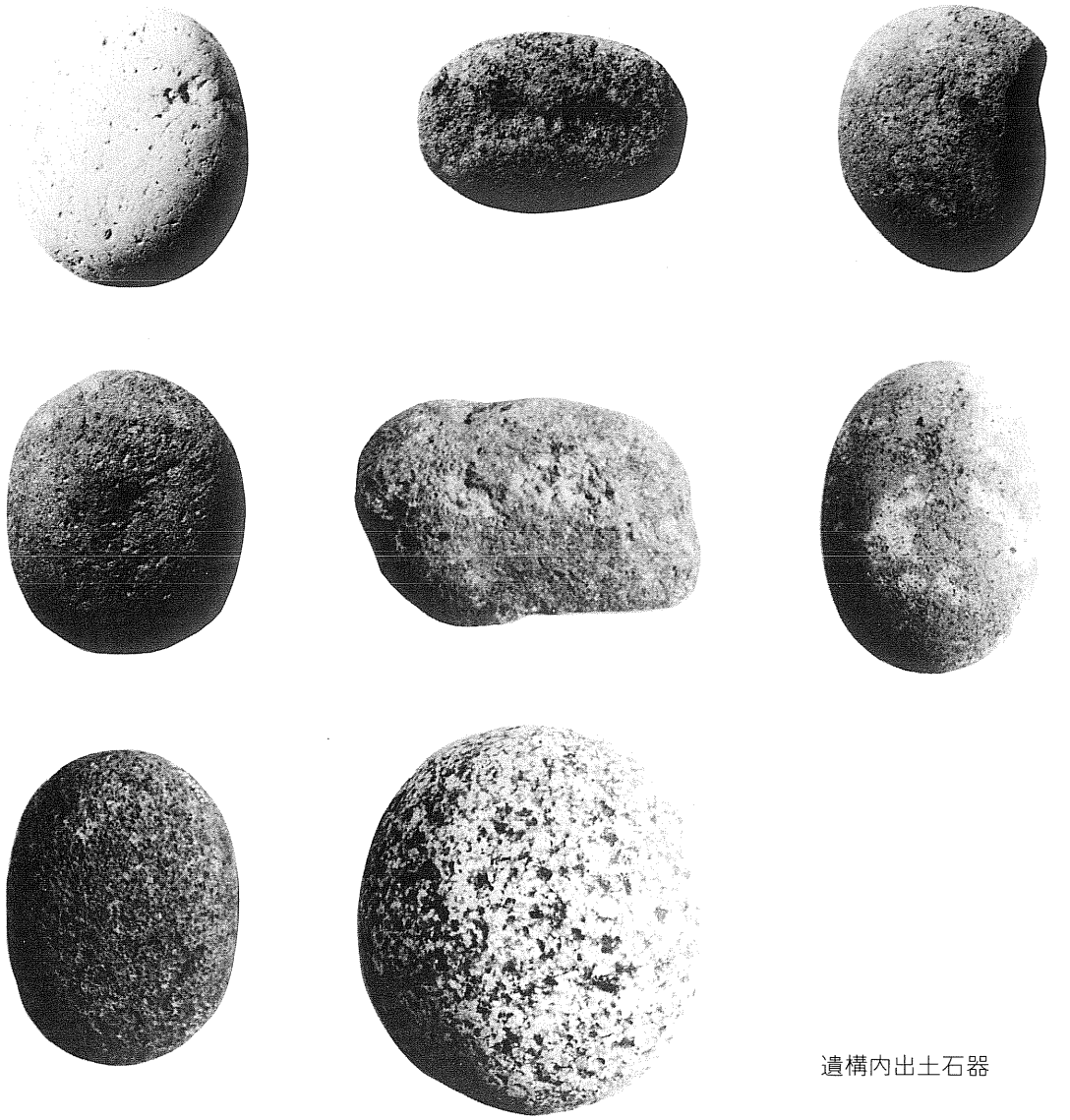
遺構外出土石器

図版13

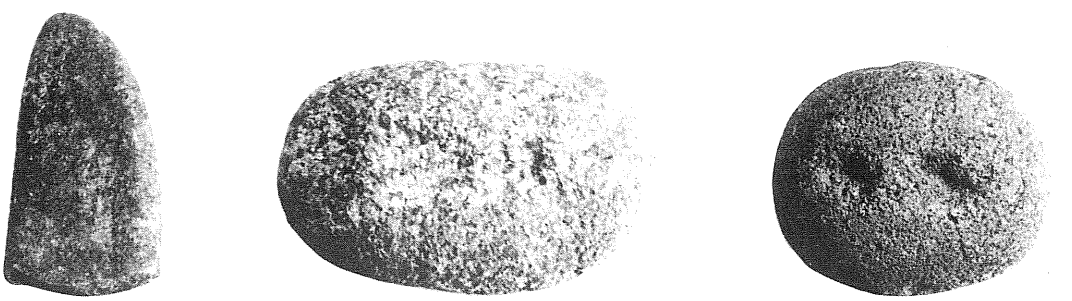


図版14　遺構外出土石器

図版15　遺構外出土石器



遺構内出土石器



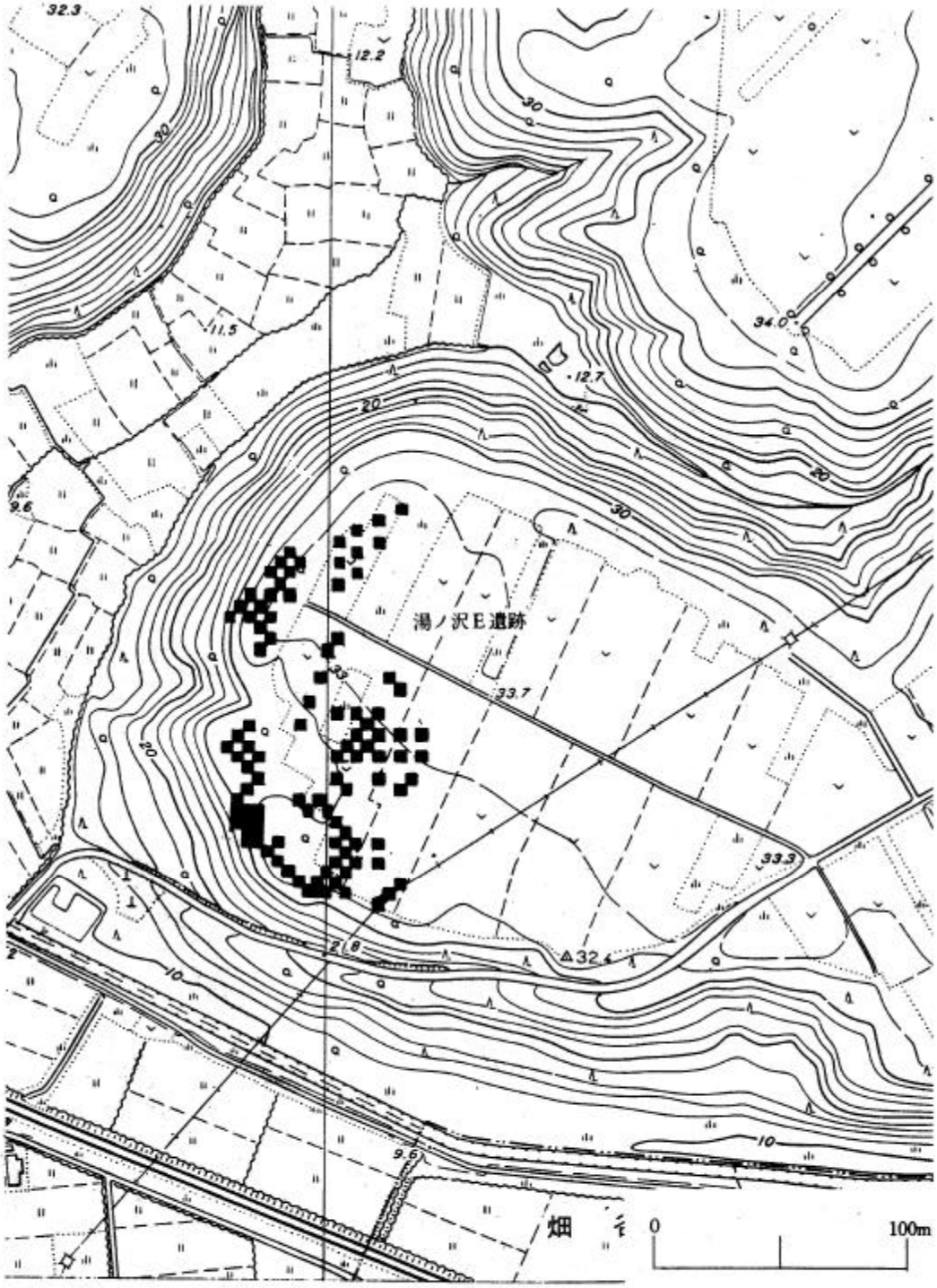
遺構外出土石器

図版16

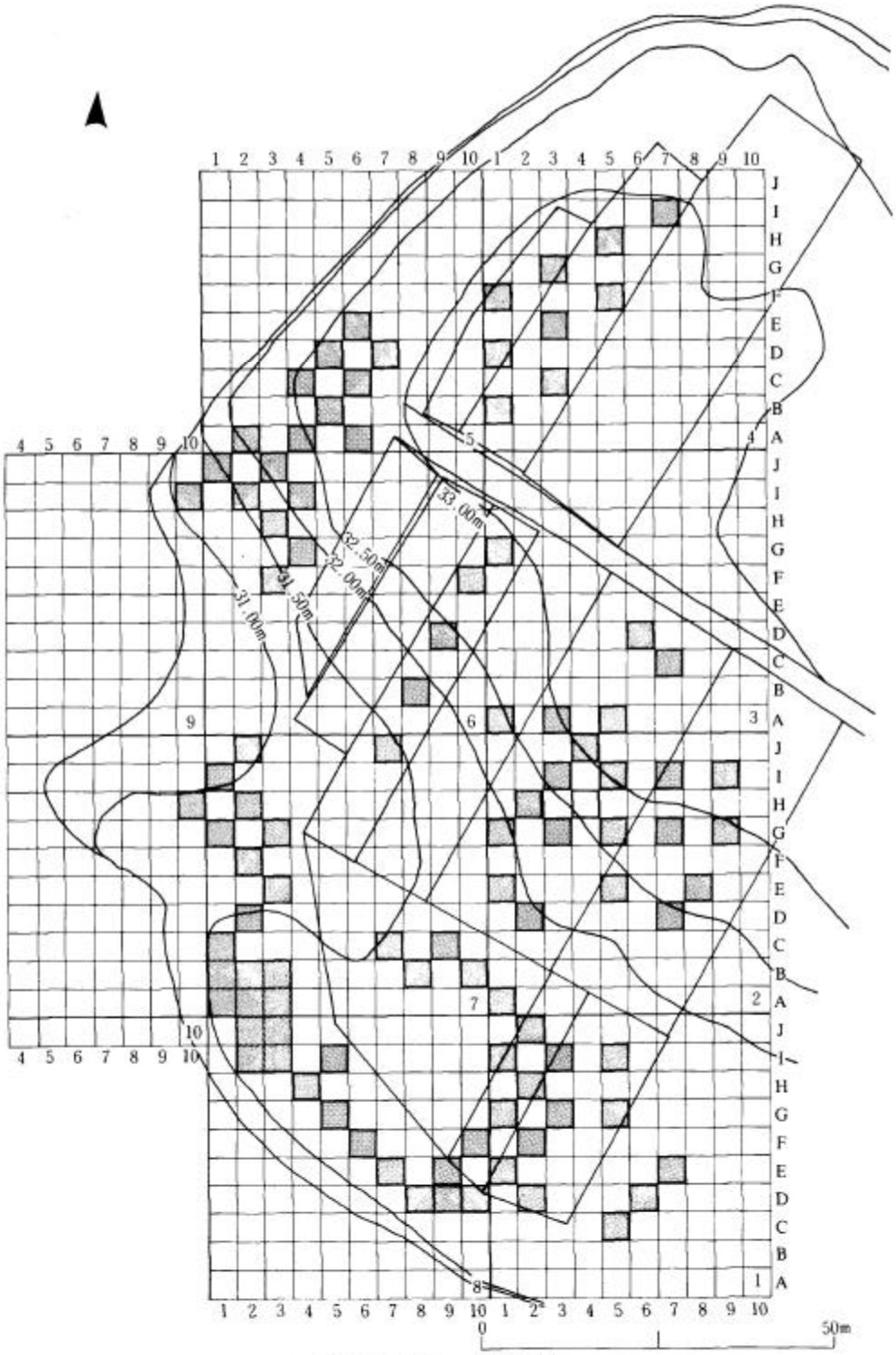
遺構外出土石器

図版17

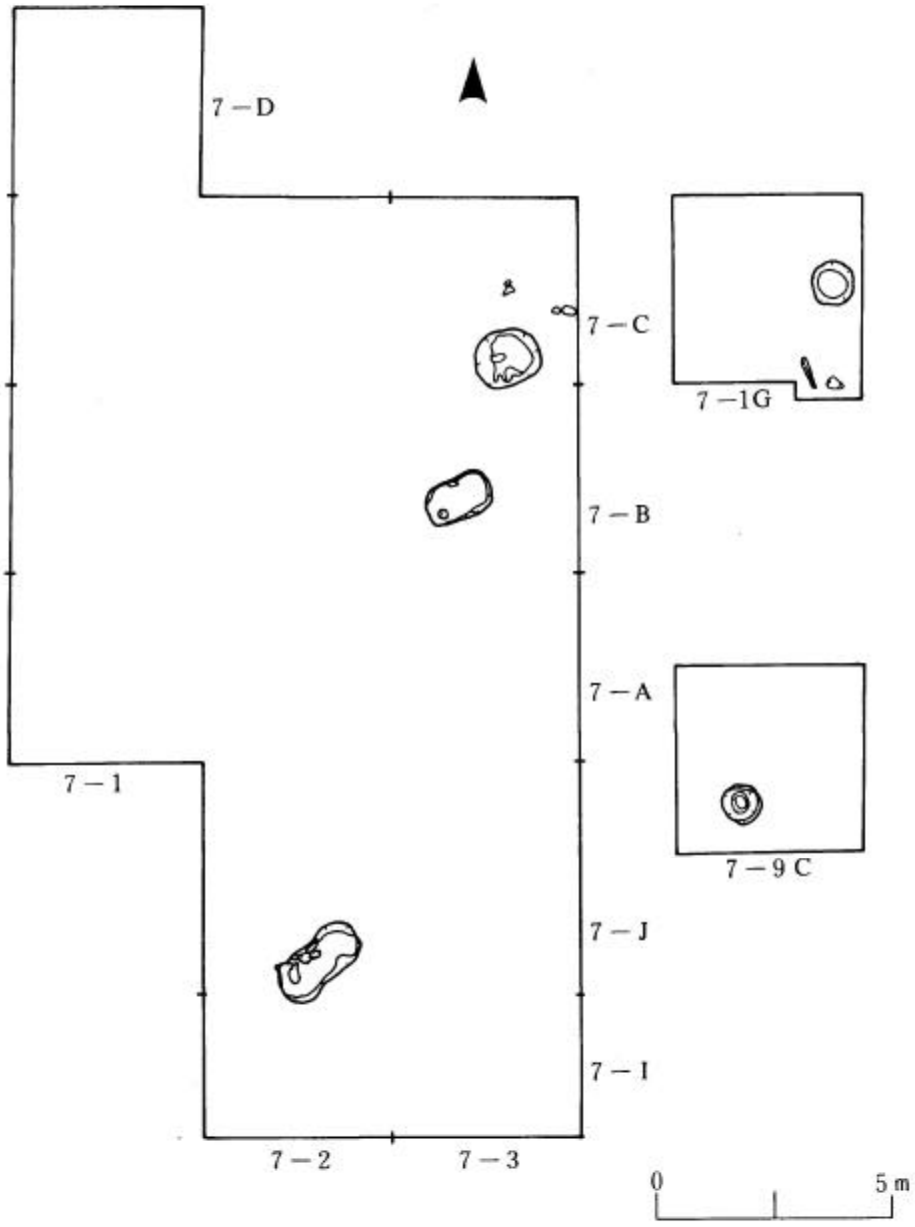
湯ノ沢Ｅ遺跡



第１図　遺跡周辺の地形



第2図　グリッド配置図



第3図　遺構配置図

遺跡の概観

末戸松本から東方約400m の標高31～33m の西方に突き出す舌状台地上に位置する。

発掘調査は、昭和57年度に実施した、範囲確認調査の結果に基づいて４m グリッドを千鳥に発掘し、遺構の確認と共に拡張することにして、120グリッドを調査した。結果、出土遺物も非常に少なく、明確な遺構の検出もなかった。わずかに土坑、石組遺構一ヶ所を確認したにすぎない。

遺構と遺物

土坑（第３図）

７－１Ｃ・Ｇグリッドで径約0.9m 、深さ約0.7m の土坑を検出した。また、７－２・３～Ｉ・Ｊ・Ａ～Ｃグリッドでは、径約1.3m 、深さ0.3m の円形の土坑１基、長径1.5～2m の長円形を呈する土坑２基を検出した。いずれも出土遺物はなく時期については不明である。

石組遺構（第３、４図）

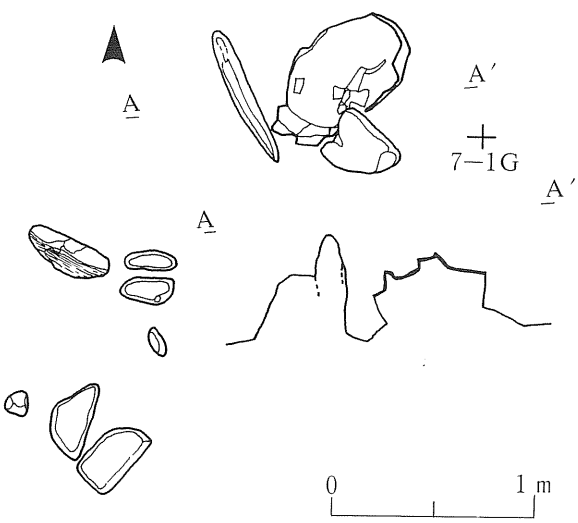
７－１Ｇグリッドで検出した。扁平な礫を組み、土器を横置している。

出土土器（第５図）

底径14cm、現存高34cmの深鉢形土器である。地文は撚糸文であるが、原体は非常に弛緩している。中央部から上方に細い沈線で文様を描いている。網代底である。

遺構外出土土器（第６、７図）

１・２は沈線で区画した無文帯の部分に左方向から刺突文を施している。地文はＲＬの単節斜縄文である。３～６は沈線を主体に文様を描く。縄文後期初頭の土器である。７・８は晩期の土器片である。



第４図　石組遺構

遺構外出土石器（第８、９図）

石匙（１～５）１・２は縦型石匙、３～５は横型石匙である。打面はツマミ部の上にあり、快りの部分は両側から剝離が施される。すべて頁岩である。

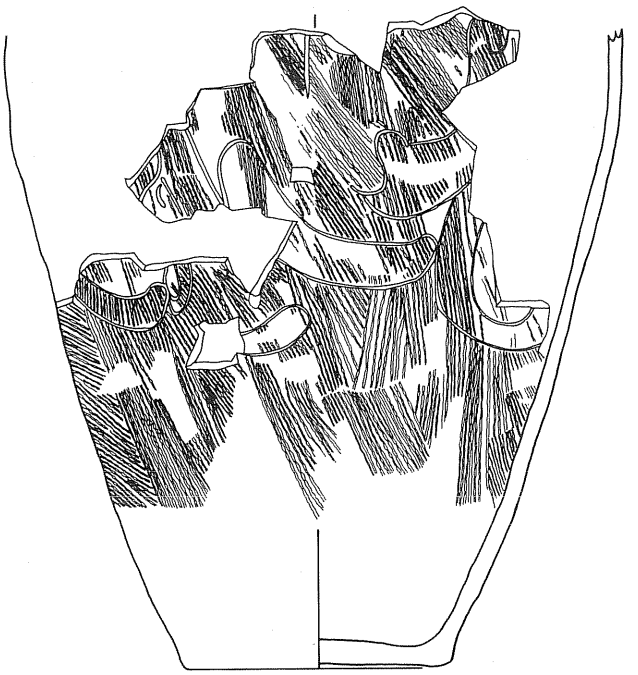
削器（６）打面は上面にある。側縁に細かい剝離を施している。頁岩である。

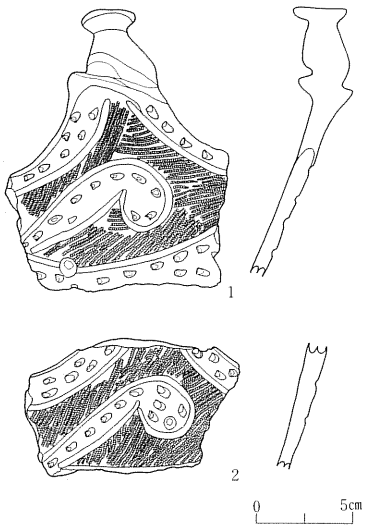
掻器（７～９）８は両側縁と下部、９は両側縁に細かい剝離を施し刃部を作出している。

くぼみ石（10）長い礫にくぼみ２個を加工している。

石錘（11）礫の両端を打ち欠いて作っている。安山岩である。

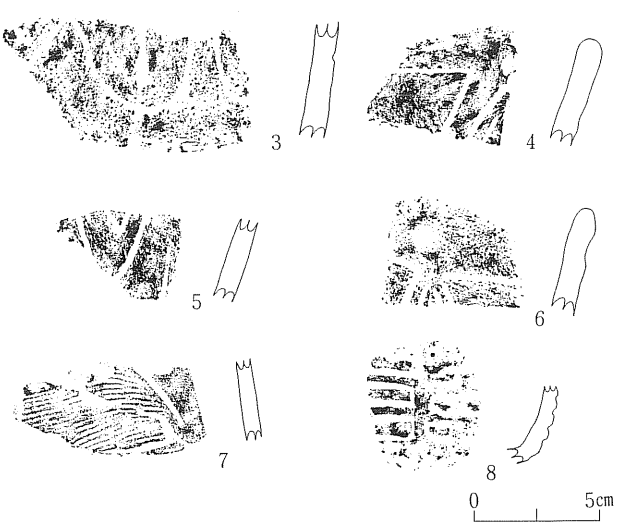
磨石（12）中央がきれいに磨かれている。



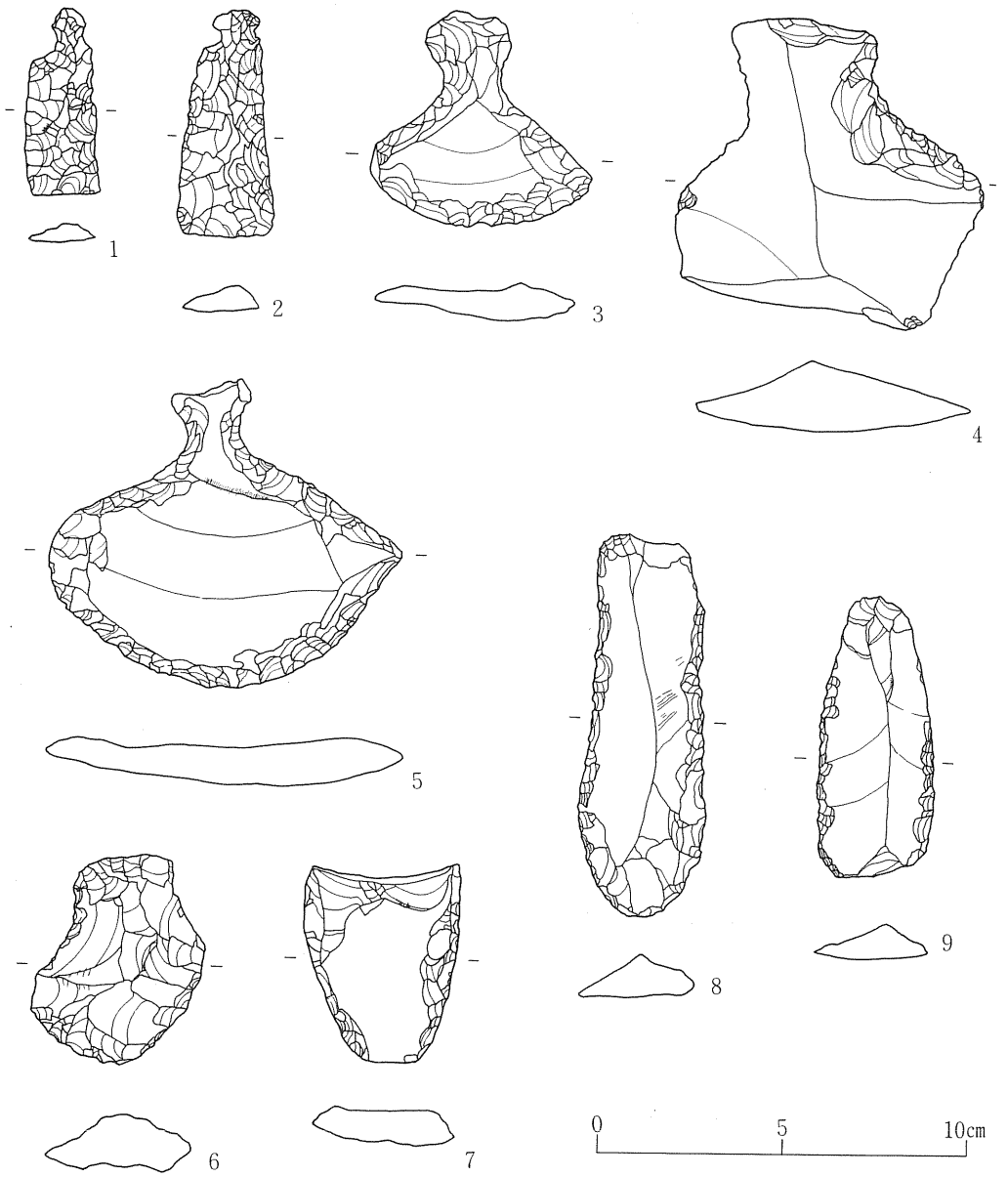


第６図　遺構外出土土器

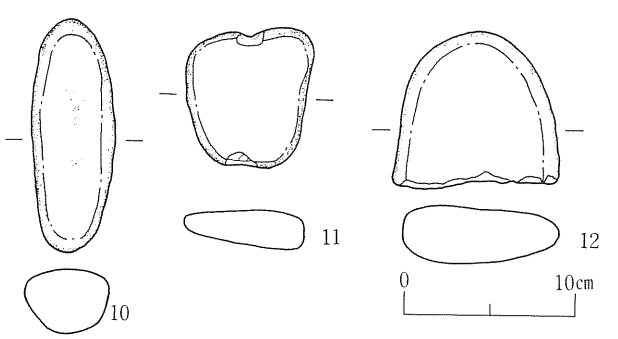
第５図　出土土器



第７図　遺構外出土土器



第８図　遺構外出土石器



第９図　遺構外出土石器

まとめ

湯ノ沢Ｅ遺跡では、結果的に良好な遺構の広がりは検出できなかった。しかし、このことは範囲確認調査の資料に基づくとある程度予測しえたことでもある。

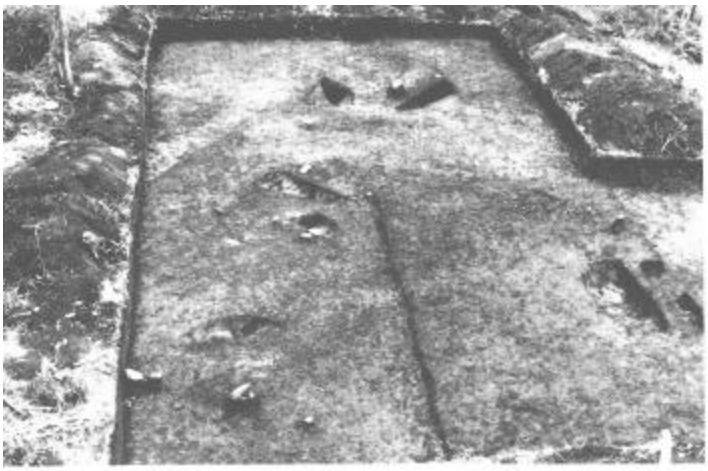
昭和57年度に本台地の先端、両側縁部にトレンチを設定し調査を実施した結果、少量の遺物採集しかできず、遺構は検出できたとしても非常に少ないであろうと考えていた。

簡単に述べることはできないが、本遺跡は範囲確認調査結果と遺跡規模がある程度一致した良好な例であり、今後遺跡規模を推測する目途となるであろう。

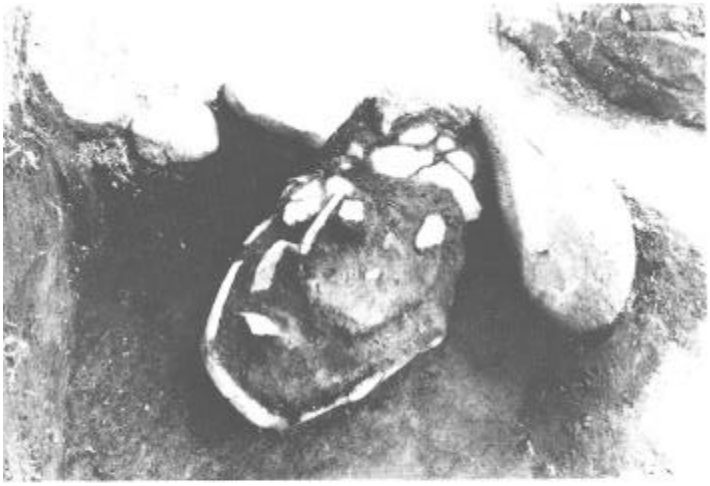
遺跡全景（西→）

調査グリッド（北→）

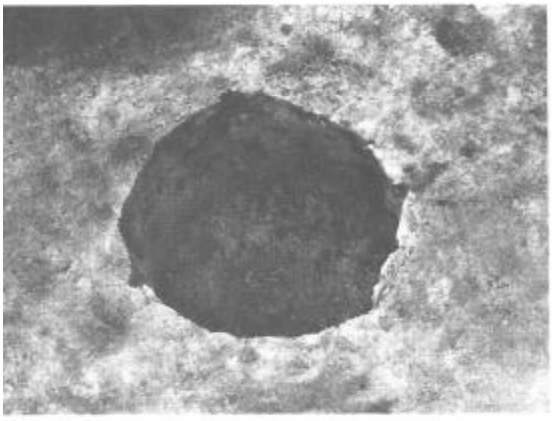
図版 1



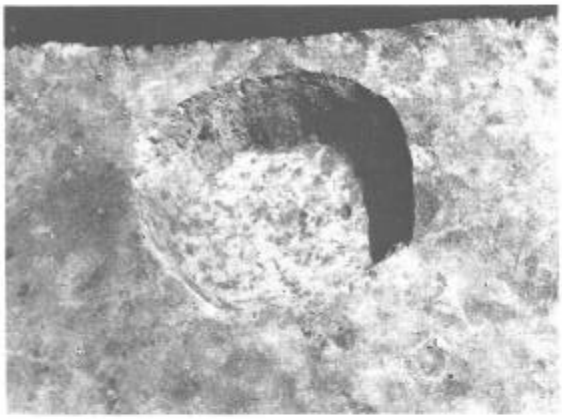
土　　坑（東→）



石組遺構（東→）



土　　坑（北→）

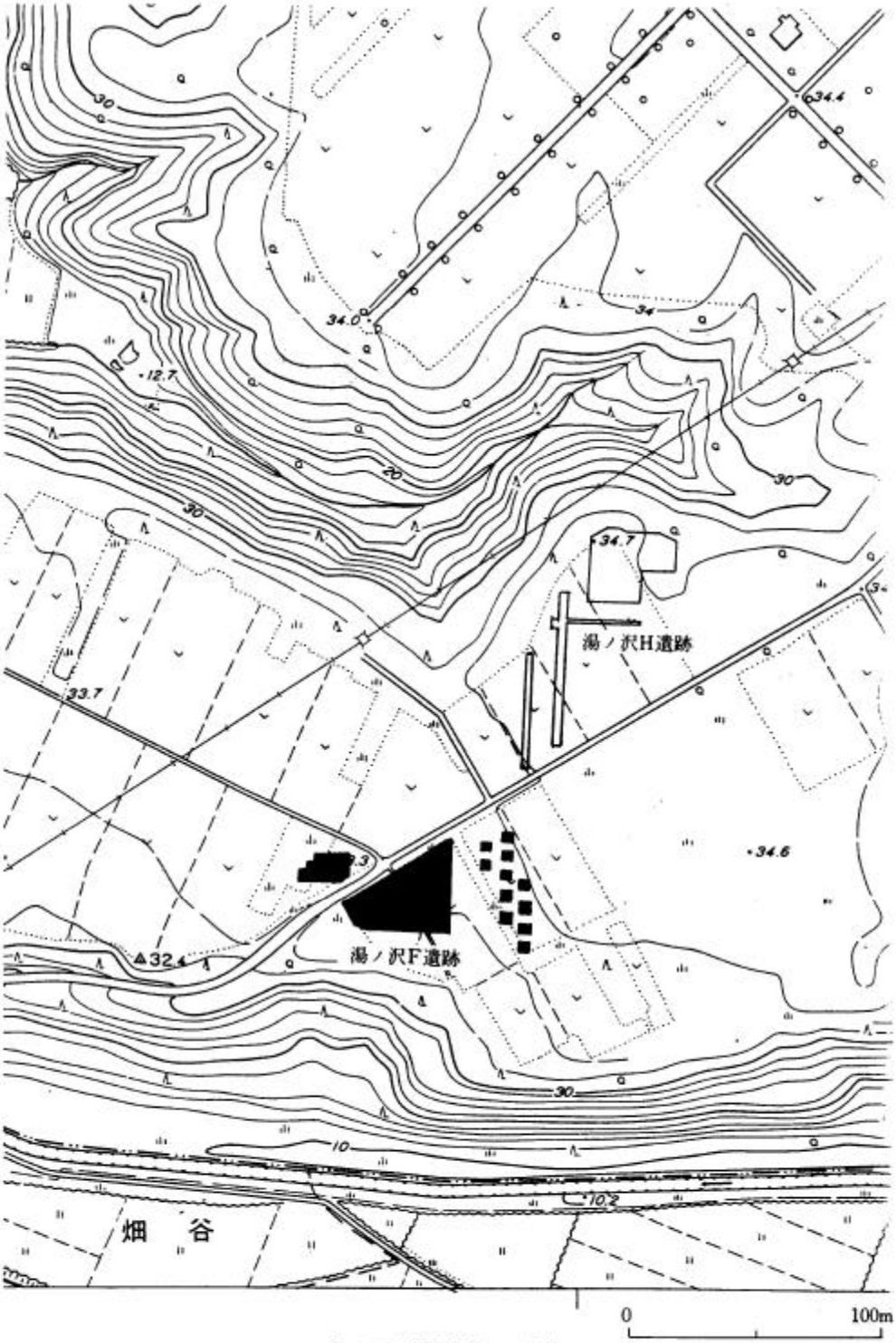


土　　坑（北→）

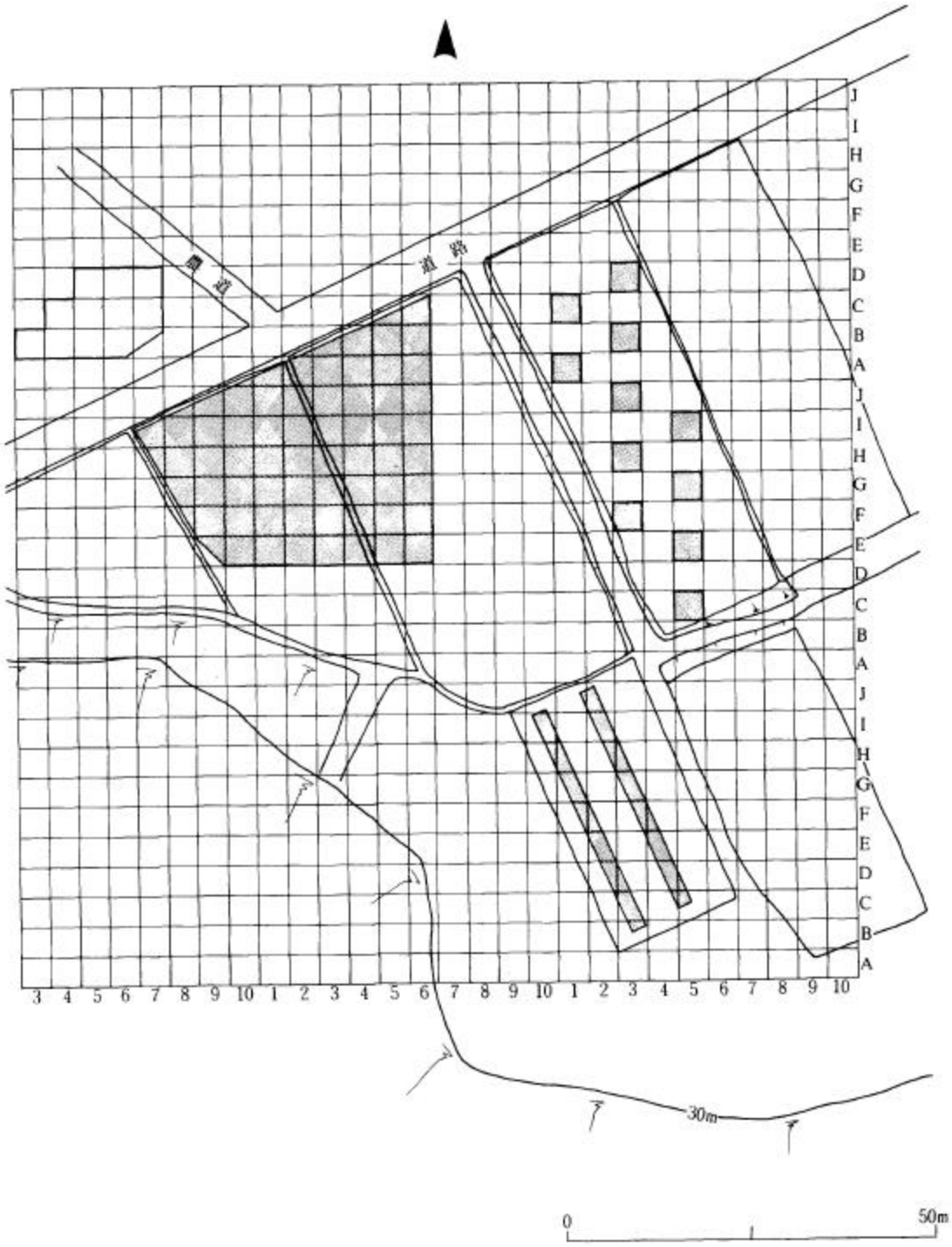
図版 2

図版 3　遺構外出土遺物

湯ノ沢Ｆ遺跡



第１図　遺跡周辺の地形



第2図　グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落から東に約400mの標高32mほど西に張り出す舌状台地の付根部分に位置する。遺跡は、昭和57年度に実施した範囲確認調査で赤褐色土器片、鉄刀が出土しており、その範囲を中心にグリッドを設定して調査を行った。結果、溝状土坑１基、平安時代の土坑墓21基、遺物は土坑墓の副葬品である須恵器、赤褐色土器、鉄製品、銅製品が出土した。

遺構と遺物

土坑墓

土坑墓は今回の調査で21基を検出した。いずれも表土下の第二層褐色土からの掘り込みである。数基は畑の畝、溝により攪乱を受けている。以下表にしてまとめた。

出土遺物

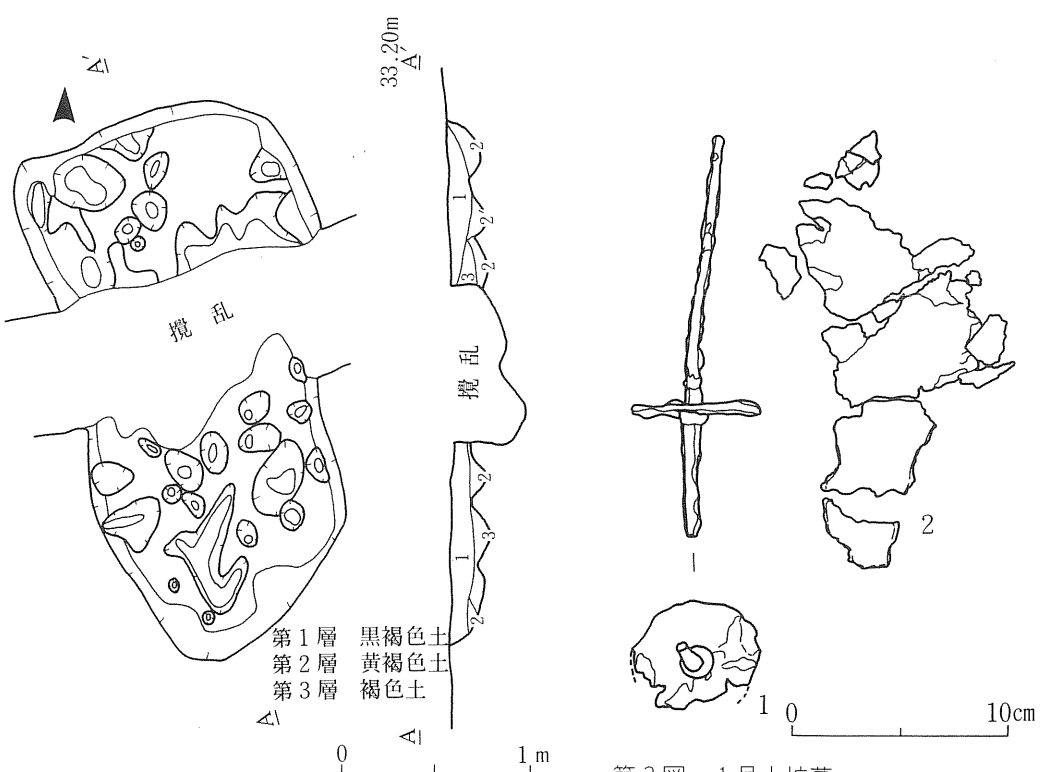
１号土坑墓出土遺物（第３図）

鉄製品　**紡錘車**は紡輪径5.9cm、紡茎長18.7cmを計るが、端部は一部欠損する。全体に銹化が著るしい。

漆器　２は漆皮である。動物の皮（牛・鹿？）に布を貼り、漆で塗りかためたものである。布目の荒い断片が出土した。

２号土坑墓出土遺物（第５図）

土器　１は底部切り離しが静止糸切りの須恵器坏である。再調整はない。



第３図　１号土坑墓

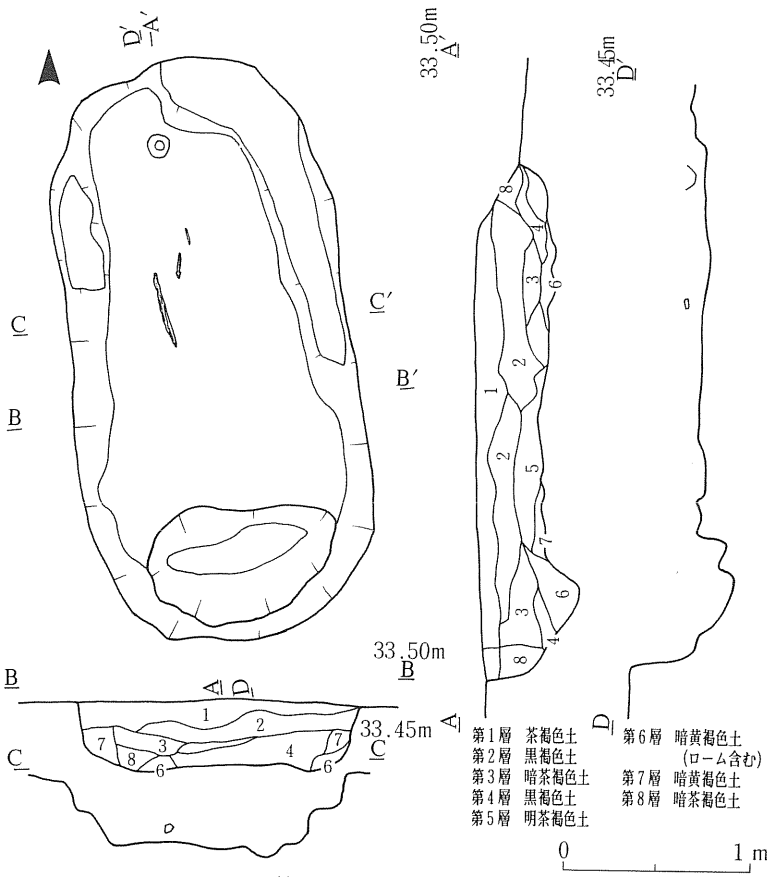
土　坑　墓　一　覧　表

項目 / 土坑番号	規模（m）（長軸×短軸）	深さ（m）	長軸方向	形状	骨	副葬品	備考
1号土坑墓	2.74×1.24	0.20	N 11° W	隅丸長方形		漆皮、紡錘車	中央部、溝により攪乱
2号土坑墓	3.1 ×1.44	0.34	N 8° W	長円形		須恵器、鉄刀、刀子	
3号土坑墓	3.56×1.26	0.44	N	隅丸長方形		赤褐色土器、鉄刀、鉄鏃、馬具	木棺の痕跡あり、幅70cm、長さ2.7m
4号土坑墓	2.98×1.23	0.32	N 32° W	隅丸長方形		赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子2、鉄鏃1	木棺の痕跡あり、幅68cm、長さ不明
5号土坑墓	3.08×1.42	0.28	N 15° W	隅丸長方形		刀子1、鉄鏃9点以上	北側攪乱
6号土坑墓	2.76×1.12	0.26	N 19° W	隅丸長方形		漆皮箱、馬具	
7号土坑墓	3.0 ×1.2	0.32	N 16° W	隅丸長方形	骨片	内黒土師器、鉄鏃、鉄刀1、不明鉄製品	鉄刀に骨片付着
8号土坑墓	3.1 ×1.4	0.18	N 13° W	隅丸長方形		赤褐色土器坏、鉄刀1、刀子	北部攪乱
9号土坑墓	2.2 ×1.34	0.24	N 1° W	長円形		赤褐色土器片	南、北西部攪乱
10号土坑墓	2.56×1.02	0.74（最深部）	N 2° W	長円形		赤褐色土器坏	木棺の痕跡あり、幅70cm、長さ1.8m
11号土坑墓	1.46×0.94	0.30	N 26° W	長円形			
12号土坑墓	2.94×1.1	0.30	N 8° E	隅丸長方形			
13号土坑墓	2.1 ×1.94	0.40	N	隅丸長方形		刀子、紡錘車	
14号土坑墓	2.9 ×1.7	0.20	N10°30′W	隅丸長方形		赤褐色土器坏、鉄刀、刀子	北側攪乱
15号土坑墓	4.10×1.48	0.18	N 1° W	隅丸長方形		刀子	
16号土坑墓	3.64×1.06	0.14	N 24° W	隅丸長方形		内黒土師器、鉄刀、鉄鏃、鉄カマ、鋤先、不明鉄製品、帯金具、銭貨	上部削平
17号土坑墓	3.64×1.3	0.35	N 8° E	隅丸長方形		鉄鏃	上部削平
18号土坑墓	1.94×0.68	0.10	N 1° W	隅丸長方形			上部削平
19号土坑墓	2.1 ×0.66	0.10	N 18° W	長円形		鉄刀1、刀子1	上部削平
20号土坑墓	3.0 ×1.1	0.24	N 16° E	隅丸長方形		赤褐色土器、刀子	木棺の痕跡あり、幅50cm、長さ2.2m
21号土坑墓	2m以上×0,9	0.26	N	隅丸長方形		赤褐色土器、刀子、紡錘車	南側土手のため不明

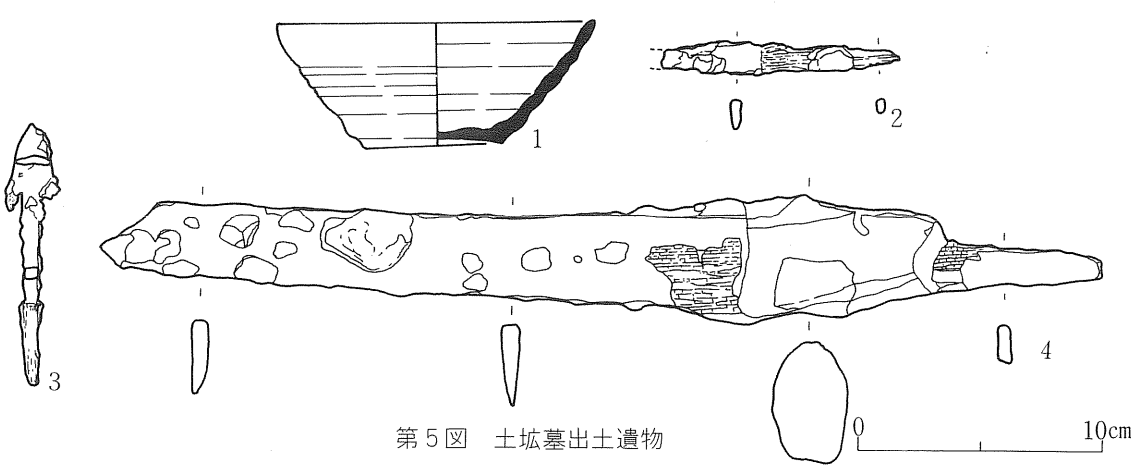
鉄製品　**鉄刀**（4）：全長40.5cm、身幅3～3.7cm、刀身約34cmを計る。区は不明である。銹化が著るしく、区の部分は大きく膨らんでいる。部分的に木質部が残っている。**刀子**（2）：長さ9.2cmを計る。切先部分は欠損する。茎には木質部が残っている。**鉄鏃**（3）：長さ11.2cmを計る。身の先端は扁平で両側に逆刺がある。有茎で、茎には木質が残っている。

3号土坑墓出土遺物（第7図）

土器　赤褐色土器（1・2）：南側から2点出土した。いずれも回転糸切り無調整である。1の底部にはヘラ描きがあるが判読できなかった。

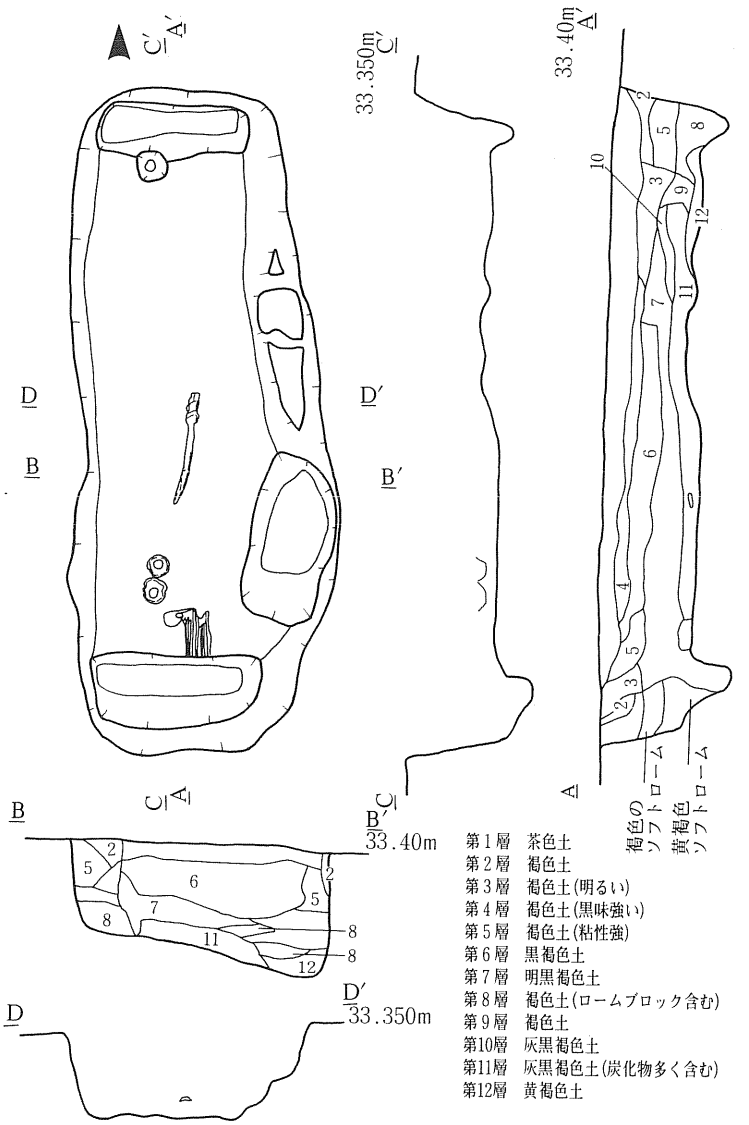


第4図　2号土坑墓



第5図　土坑墓出土遺物

鉄製品　**鉄刀**(39)：現長61.2cm、身幅3.1～4.3cm、刀身45.3cmを計る。茎は一部欠損する。脛金をもち鍔がつく。切先は「ふくらつく」である。銹化しているが遺存状態は良い。**刀子**（3）：現長15.2cmを計る。切先は「ふくらつく」である。**鉄鏃**（4～34）：南側からまとまって出土した。図示した30点の他にも出土しているが小破片が多い。すべて有茎で、最長のものは約19cmを計る。身先



第6図　3号土坑墓

端の形は二等辺三角形状に尖る細身のもので、逆刺のあるもの（7～14）、叩きつぶして扁平にしたもの（4～6・15～18）と、やや大形で三角形を呈し、逆刺のつくもの（31・32）の大きく三タイプに分けられる。茎には木質部の残るものが多くみられ、特に5・12・25～28は繊維(糸？)を巻きつけ漆状のもので塗りかためているようである。**馬具**(35～38)：馬具のうち轡(くつわ)部の銜(はみ)(35・36)と鏡板（37・38）と思われる。

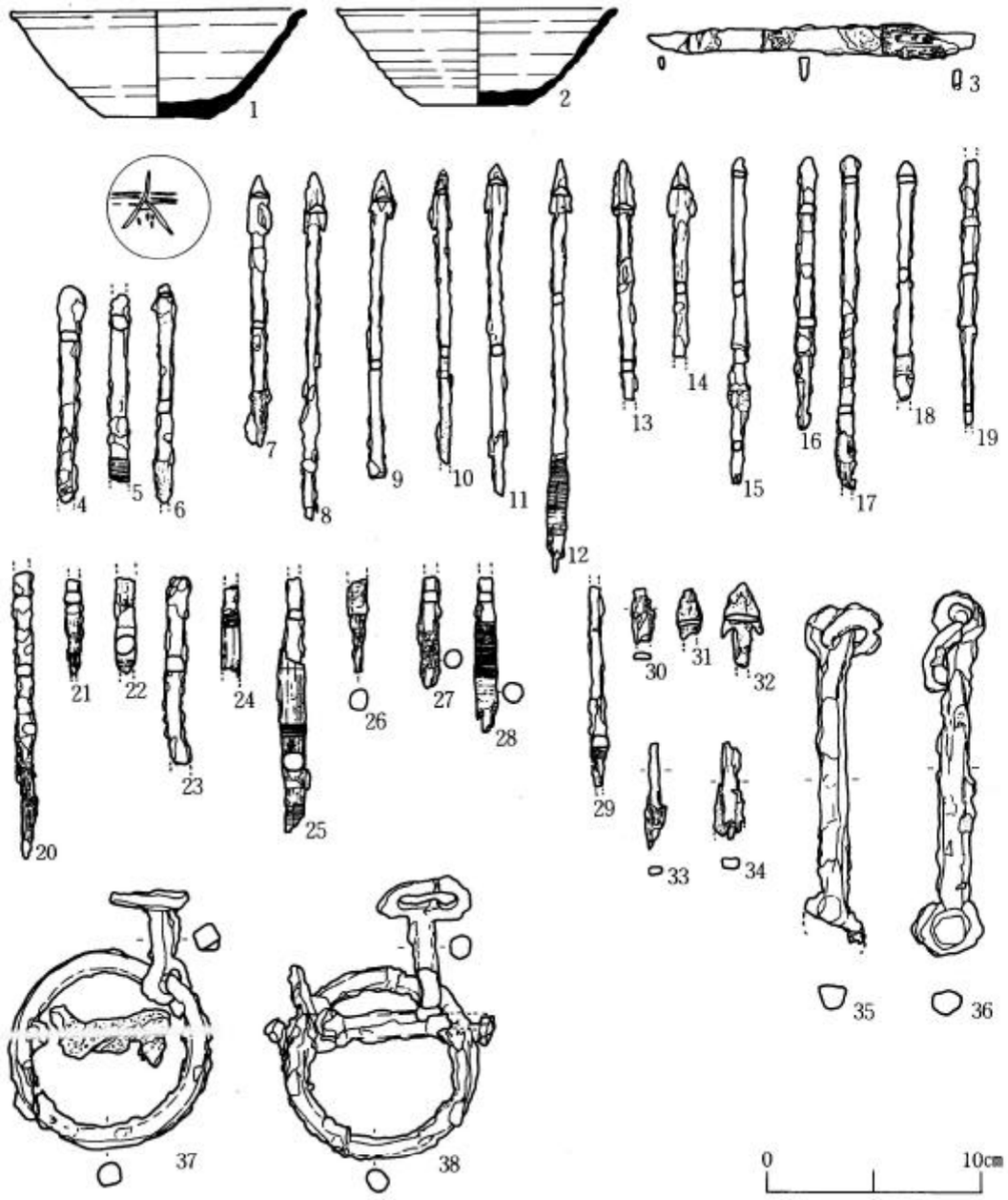
4号土坑墓出土遺物（第9図）

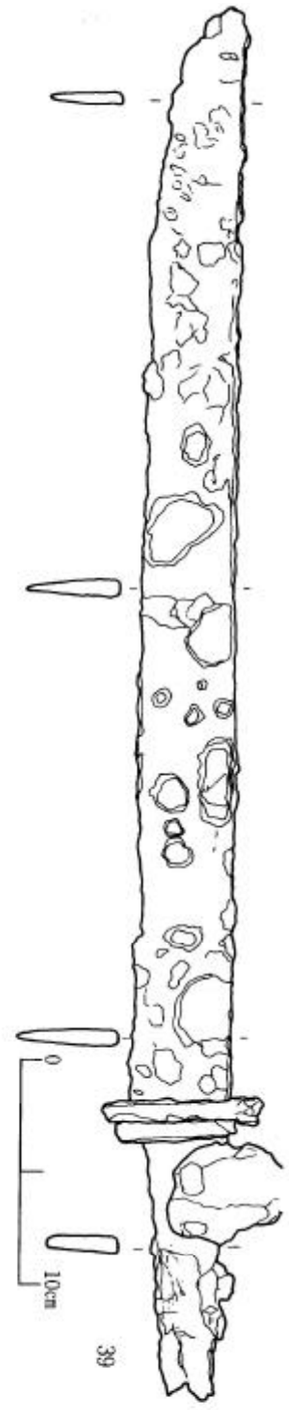
土器　赤褐色土器(1)：回転糸切り無調整の坏である。胎土はもろく肌色を呈する。

鉄製品　**鉄刀**(5)：現長34.3cm身幅3.2cm～4.2cm、刀身約31cmを計る。茎の部分は一部欠損する。区(まち)は両区のようである。切先は「ふくらつく」である。銹化が著るしいが遺存状態は良い。**刀子**（3・4）2点出土した。2は長さ12cmを計るが切先部分は欠損する。茎に木質部が残る。**鉄鏃**(2)：現長4.5cmである。茎にはきれいに繊維(糸？)が巻かれている。

5号土坑墓出土遺物（第10図）

鉄製品　**刀子**(1)：刀身12.4cmを計る。茎は欠損する。**鉄鏃**(2～10)：破損品である。2～4は身の先端部を扁平に叩き、鋭利にしている。5は茎の部分である。矢柄と思われる木質が残り、端部に繊維（糸？）をきれいに巻いている。茎に木質が残るものが多い。



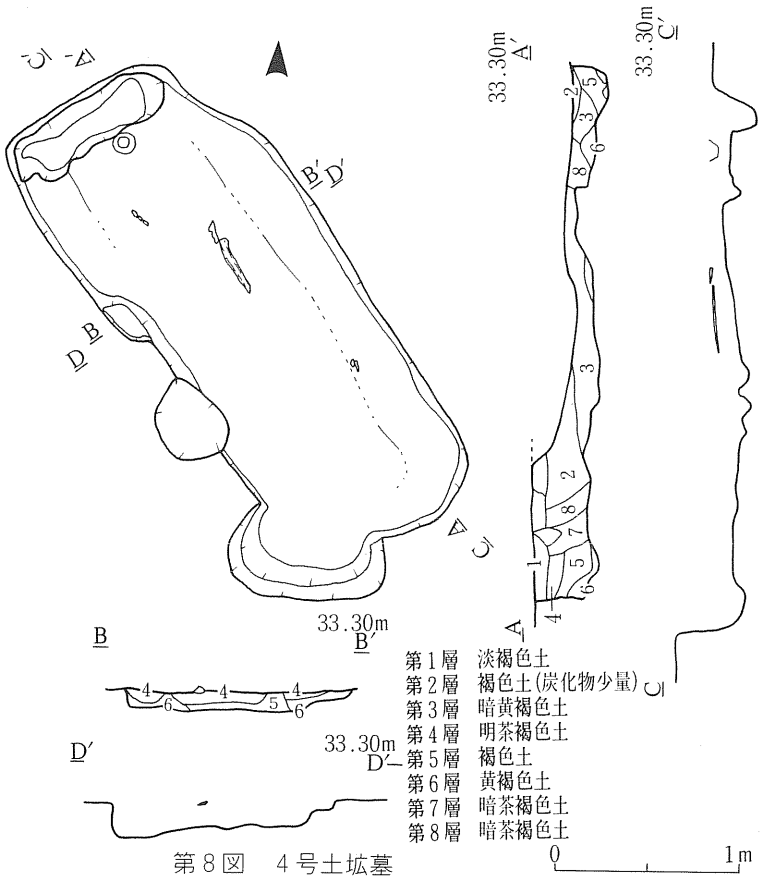


第７図　３号土坑墓出土遺物

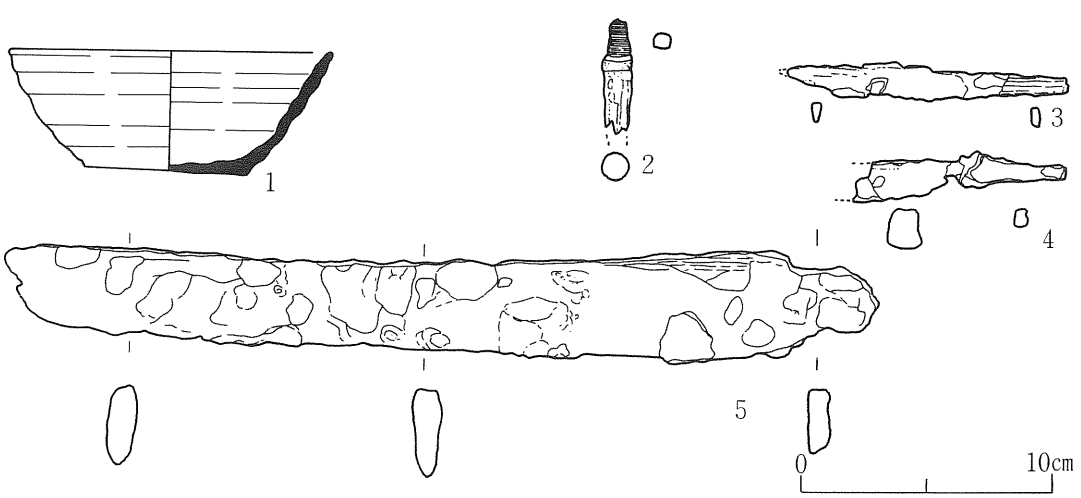
6号土坑墓出土遺物（第12図）

鉄製品　**刀子**（3）：切先の破片である。**鉄鏃**（1・2）：1は現長11.2cmを計る有茎のものである。身は扁平で鋭利で逆刺がつく。茎には木質部が残り、繊維（糸）を巻いている。**馬具**（4）：銹化が著るしく癒着して出土した。轡部の銜と鏡板と思われる。

漆器　漆皮箱（5）：一辺約14cm、器高約2.2cmの漆皮箱である。蓋はきれいに面取りしている。



第8図　4号土坑墓

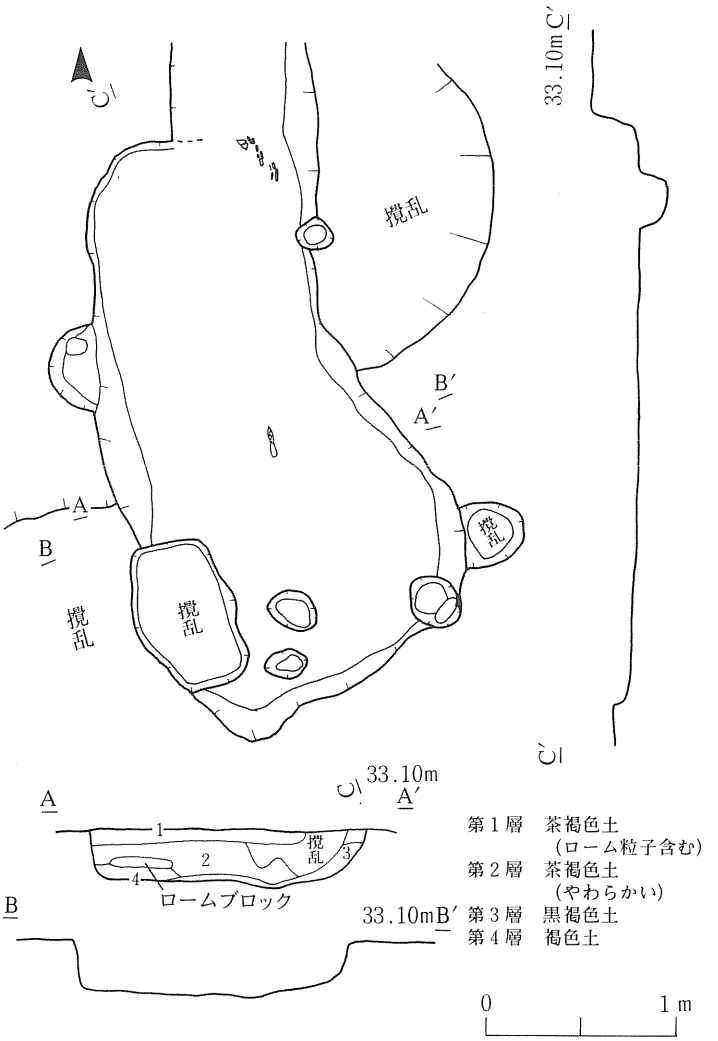


第9図　4号土坑墓出土遺物

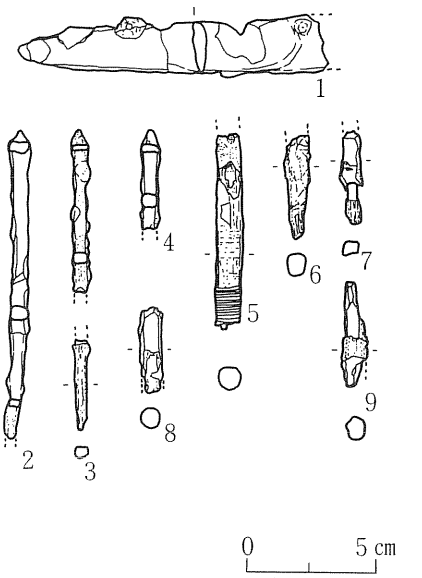
7号土坑墓出土遺物（第13図）

土器　土師器（1）：内面に黒色処理を施した台付坏である。回転糸切り後にナデを施している。外体部下方には回転ヘラケズリが行われる。内体部は横・底部は放射状にミガキを施している。

鉄製品　**鉄刀**（第13図）：全長73.3cm、身幅3.4cm、刀身61cmを計る細身の刀である。全体に鞘の木部が残っている。区は不明であるが銅製の脛金をはめ、同様の鍔がある。茎の目貫の部分には、



第10図　5号土坑墓



5号土坑墓出土遺物

小破片であるが銅製の飾り金具がみられる。また茎には人骨と思われる小破片が海綿状となり、付着しているが詳細は不明である。切先は「ふくらつく」である。

8号土坑墓出土遺物（第15図）

土器　土師器（1）：静止糸切りで再調整を施さないものである。赤橙色で焼成不良である。

鉄製品　**鉄刀**（4）：昭和57年度範囲確認調査で出土した。全長39cm、身幅3.7cm、刀身は24cmを計る。区（まち）は不明であるが脛金（はばき）がある。鞘の一部である木質が残っている。**刀子**（2・3）：2点出土したが1点は小破片である。2は現長約15.5cmを計る。切先は欠損し不明である。茎には木質が残る。

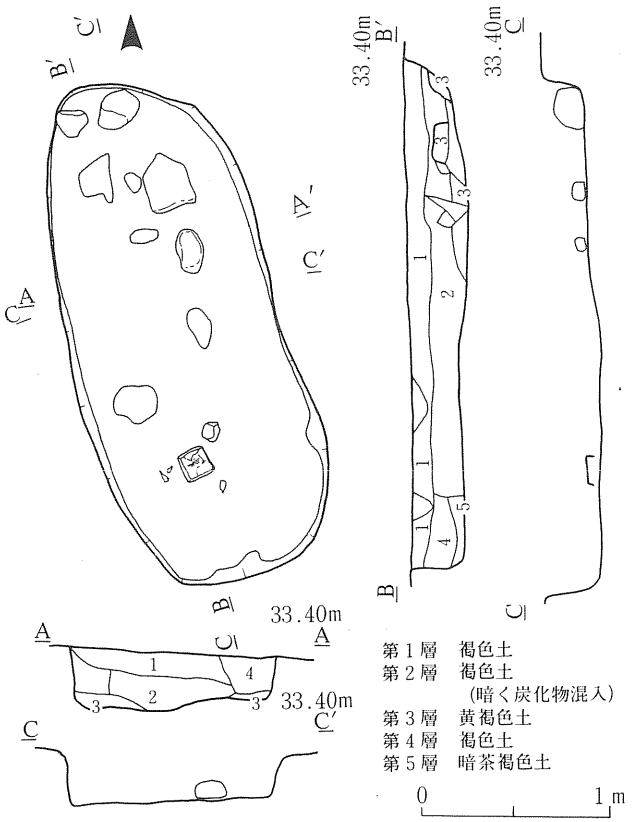
10号土坑墓出土遺物（第18図）

土器　赤褐色土器（1）：回転糸切り無調整の坏である。

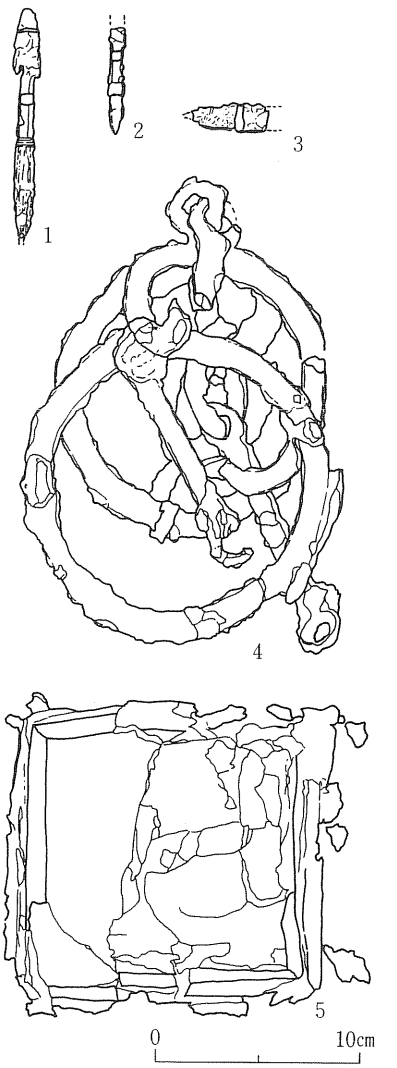
鉄製品　**鉄鏃**（2・3）：身先端部と茎部分の破片である。

13号土坑墓出土遺物（第22図）

鉄製品　**刀子**（1）：身・茎の一部が欠損する。木質部が部分的に残り、それに布と思われる繊維が付着している。**紡錘車**（2）：紡輪径6.4cm、紡茎長14.2cmを計る。紡茎の一端に欠損するが、一端にフックが付いている。全体に銹化が著しい。



第11図　6号土坑墓



第12図　6号土坑墓出土遺物

14号土坑墓出土遺物（第23図）

土器　赤褐色土器（1・2）：2点とも底部切り離しは回転糸切り無調整である。

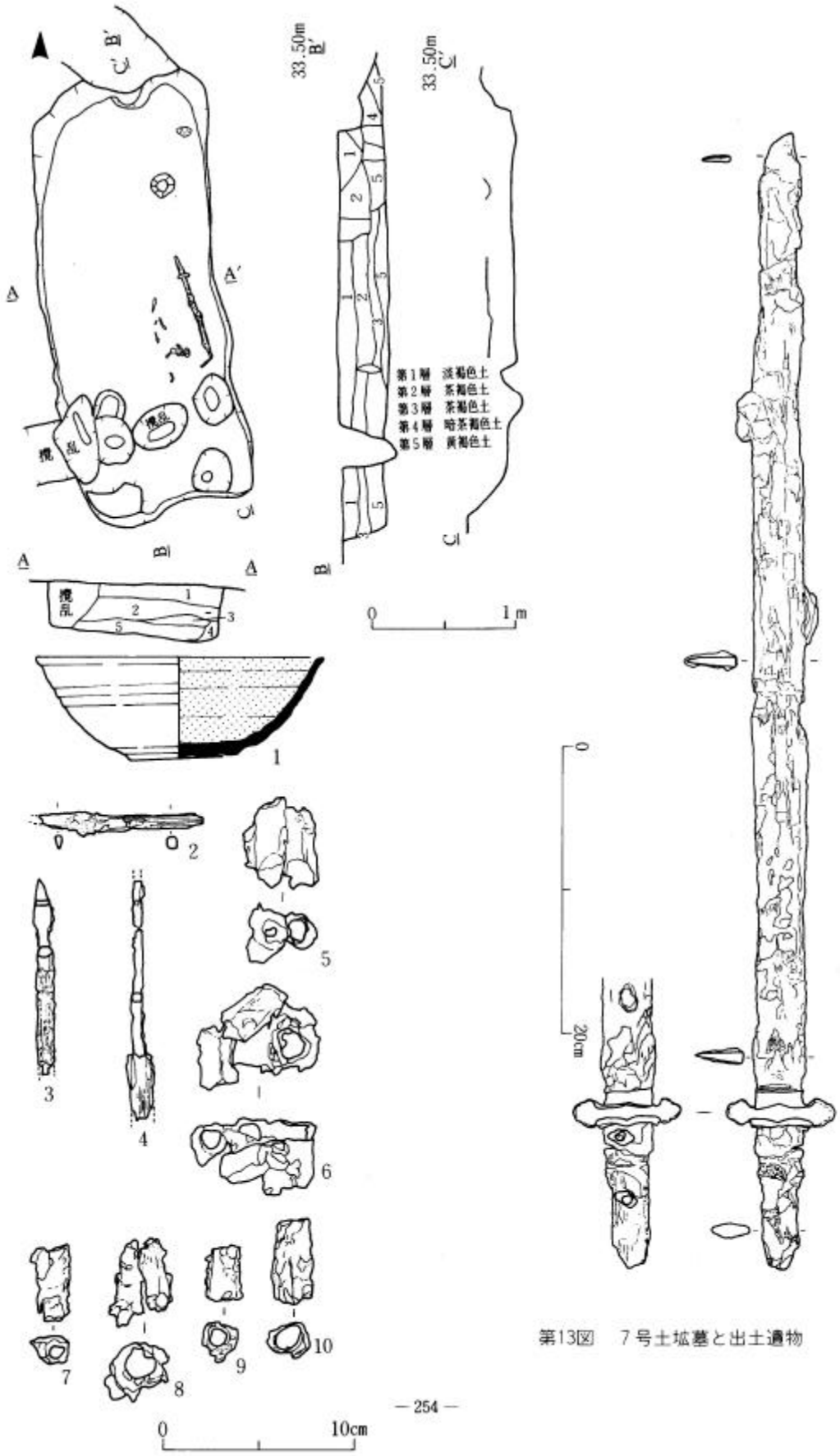
鉄製品　**鉄刀**（4）：全長38.6cm、身幅3.6cm、刀身29cmを計る。茎は一部欠損する。区は両区で、脛金がある。切先は「ふくらつく」である。木質が部分的に残っている。銹化が著しい。**刀子**（3）：現長11.5cmで切先は欠損する。

15号土坑墓出土遺物（第23図）

鉄製品　全長18.8cm、刀身11cmを計る。刀子1点が出土した。両区で、切先は「ふくらつく」である。茎には木質が少し残る。

16号土坑墓出土遺物（第23・25図1）

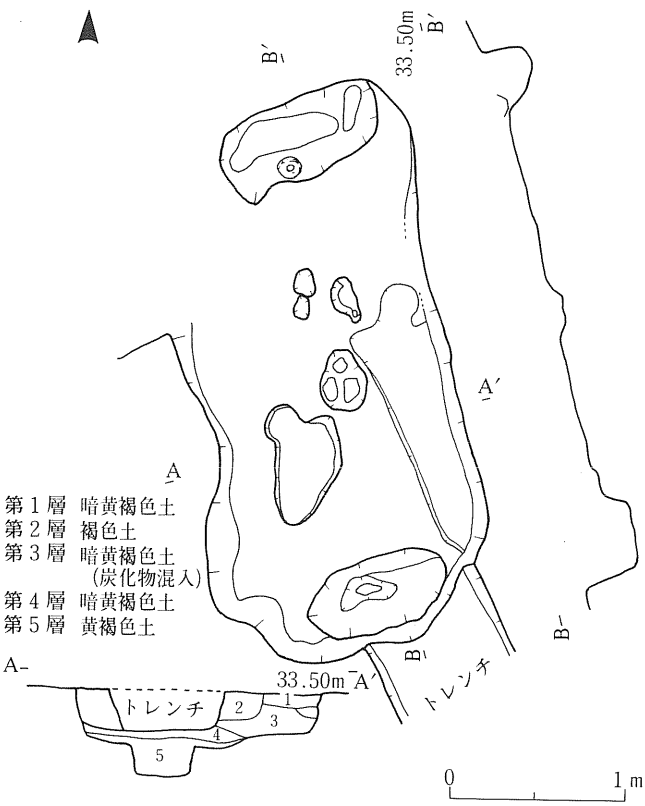
土器　土師器（6）：回転糸切り無調整の内面に黒色処理を施した坏である。内体部は横方向、底部には放射状にミガキを施している。



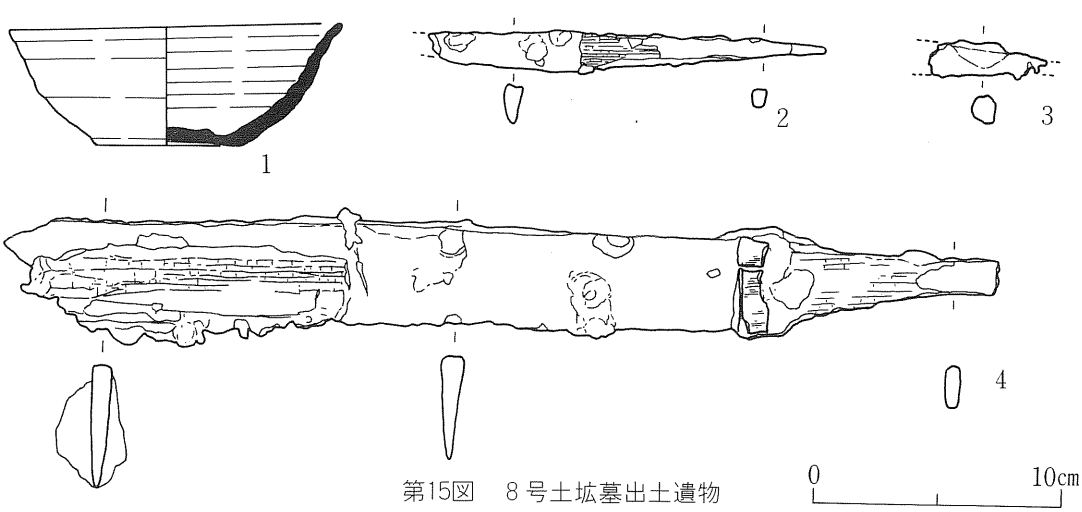
第13図　7号土坑墓と出土遺物

石製品　砥石（7）：長さ6.6㎝の上部に孔のある携帯用のものである。表面に擦痕がみられる。凝灰岩である。

鉄製品　**鉄刀**（第25図1）：全長31.3㎝、身幅3.3㎝、刀身23.2㎝を計る。茎は一部欠損する。区（まち）は両区（まち）で切先は「ふくらつく」である。銹化が著しいが遺存状態は良い。**鉄鏃**（10）：長さ12.7㎝を計り、茎には木質が残る。**鉄鎌**（8・9）：2点出土した。3は先端、4は両端が欠損する。いずれも一端をわずかに折り曲げる平鎌と思われる。**鋤先**（12）：幅15㎝、厚さ6㎝のU字状を呈する。内側は、本体に装着するためV字状になる。銹化が著しい。**不明鉄製品**（11・13）：11は現長8.3㎝、厚さ5㎜を計る。一端が直角に折れ曲がる。13は現長8㎝、巾1.5㎝である。



第14図　8号土拡墓

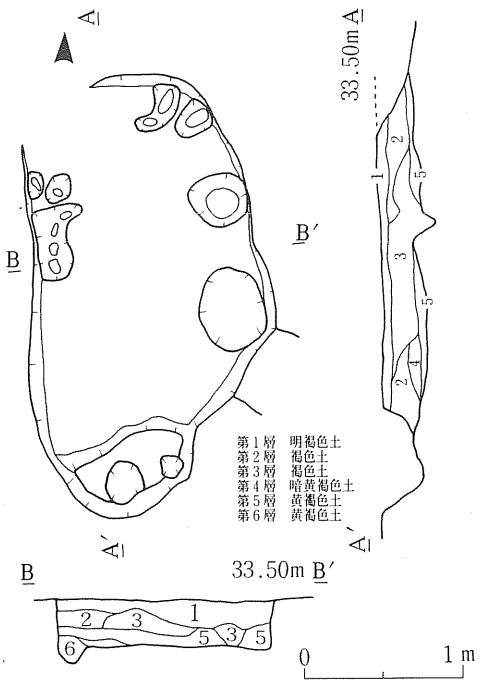


第15図　8号土拡墓出土遺物

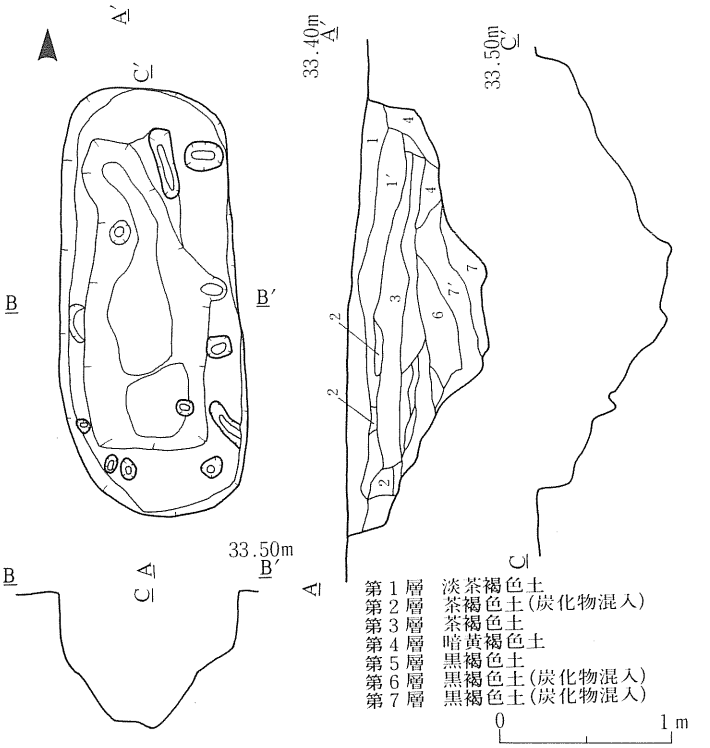
両端に小孔を穿ち、上部にはめ込んだ木柄を「紐」でとめている。下部に刃をつけている。

銅製品　**帯金具**（14～18）：丸鞆1点、巡方4点が出土した。丸鞆は長さ3.5㎝、厚さ0.15㎝で内側に3本の足がつく。巡方は2種類あり、ひとつは、一辺が3.3㎝、厚さ0.11㎝で内側の3隅に足がつくもの（12・13）と、一辺が3㎝×2.5㎝、厚さ0.09㎝で上部がわずかに湾曲する。内側には

窓を中心に３ヶ所に足のつくものである。**銭貨**(19)：皇朝12銭の１種である「隆平永宝」が１点出土した。外径は約2.4㎝、中央の方孔は一辺約0.67㎝である。字体は楷書体である。初鋳年は796年（延暦15年）11月である。**不明銅製品**(20・21)：14は上部に穿孔のある厚さ0.3㎝の金具である。21は側方に開口部があり、断面が「かまぼこ型」をなす。



第16図　９号土坑墓



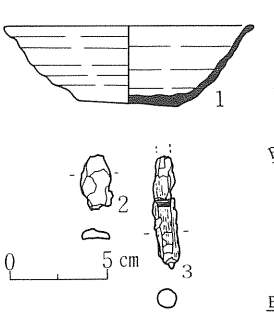
第17図　10号土坑墓

17号土坑墓出土遺物（第25図）

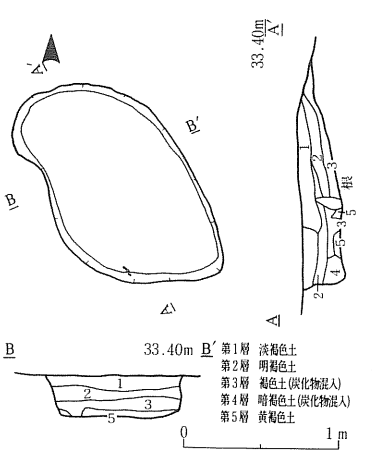
鉄製品　鉄鏃(２～７)：２・３は身先端部扁平で三角形を呈する。他は茎部分であり、木質が残る。２・４は繊維（糸？）を巻きつけている。

19号土坑基出土遺物（第25図）

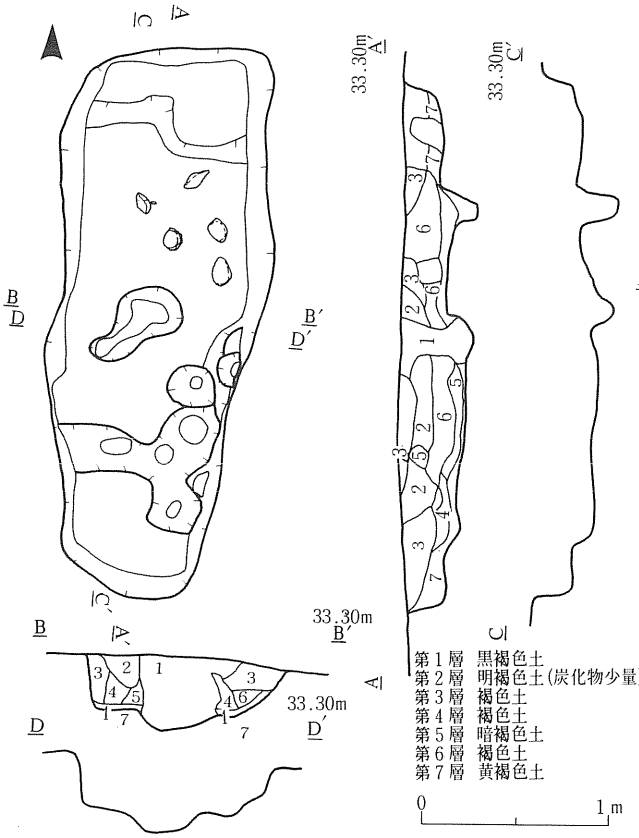
鉄製品　鉄刀(８)：現長35.6㎝、刀身23.5㎝を計る。身幅は４㎝と広く、棟巾も厚い。身・茎に木質が残り、鞘の一部と思われる。銹化が著しいが遺存状態は



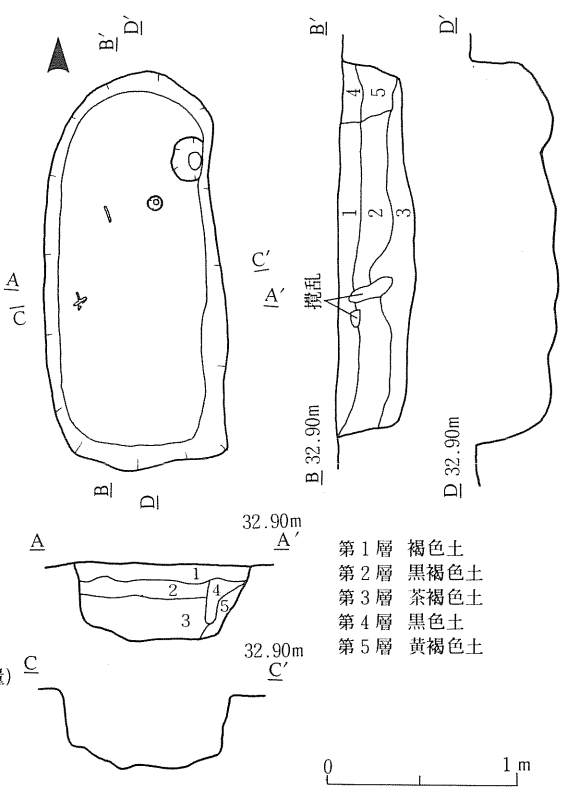
第18図
10号土坑出土遺物



第19図　11号土坑墓



第20図　12号土坑墓



第21図　13号土坑墓

良好である。**刀子**(9)：現長8.6cmを計る。刀身は4cmで細い。茎には木質が残る。

20号土坑墓出土遺物（第25図）

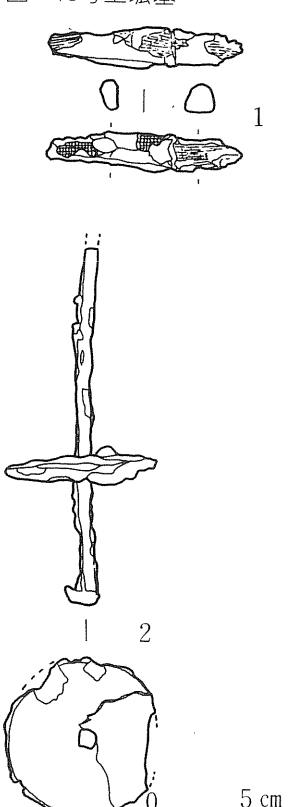
土器　赤褐色土器(10～12)：10～12すべて底部切り離しは回転糸切り無調整の坏である。

鉄製品　**刀子**(13)：9.3cmを計る。身は欠損している。茎には木質部が残る。

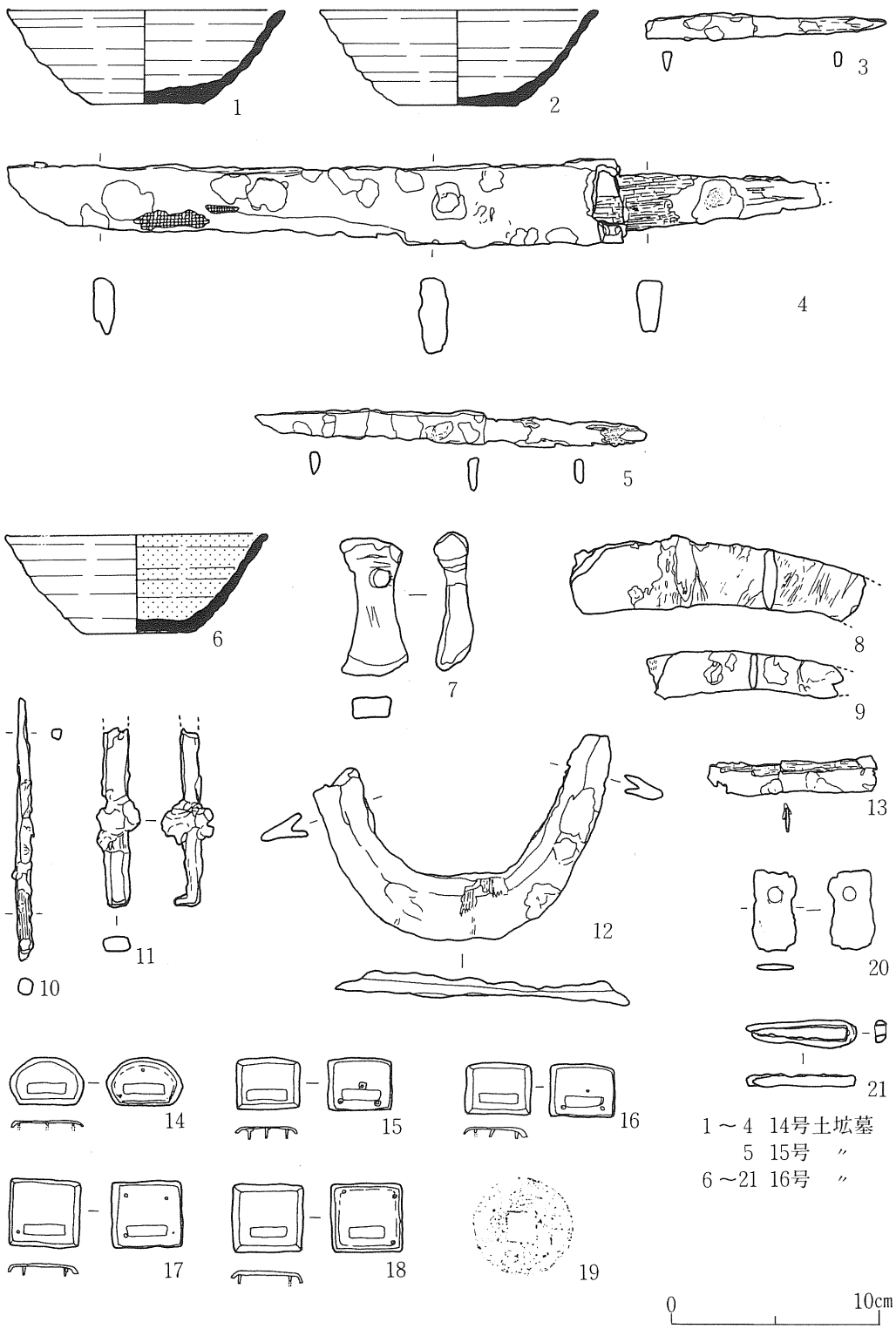
21号土坑墓出土遺物（第25図）

土器　赤褐色土器(14・15)：14・15とも回転糸切り無調整の坏である。

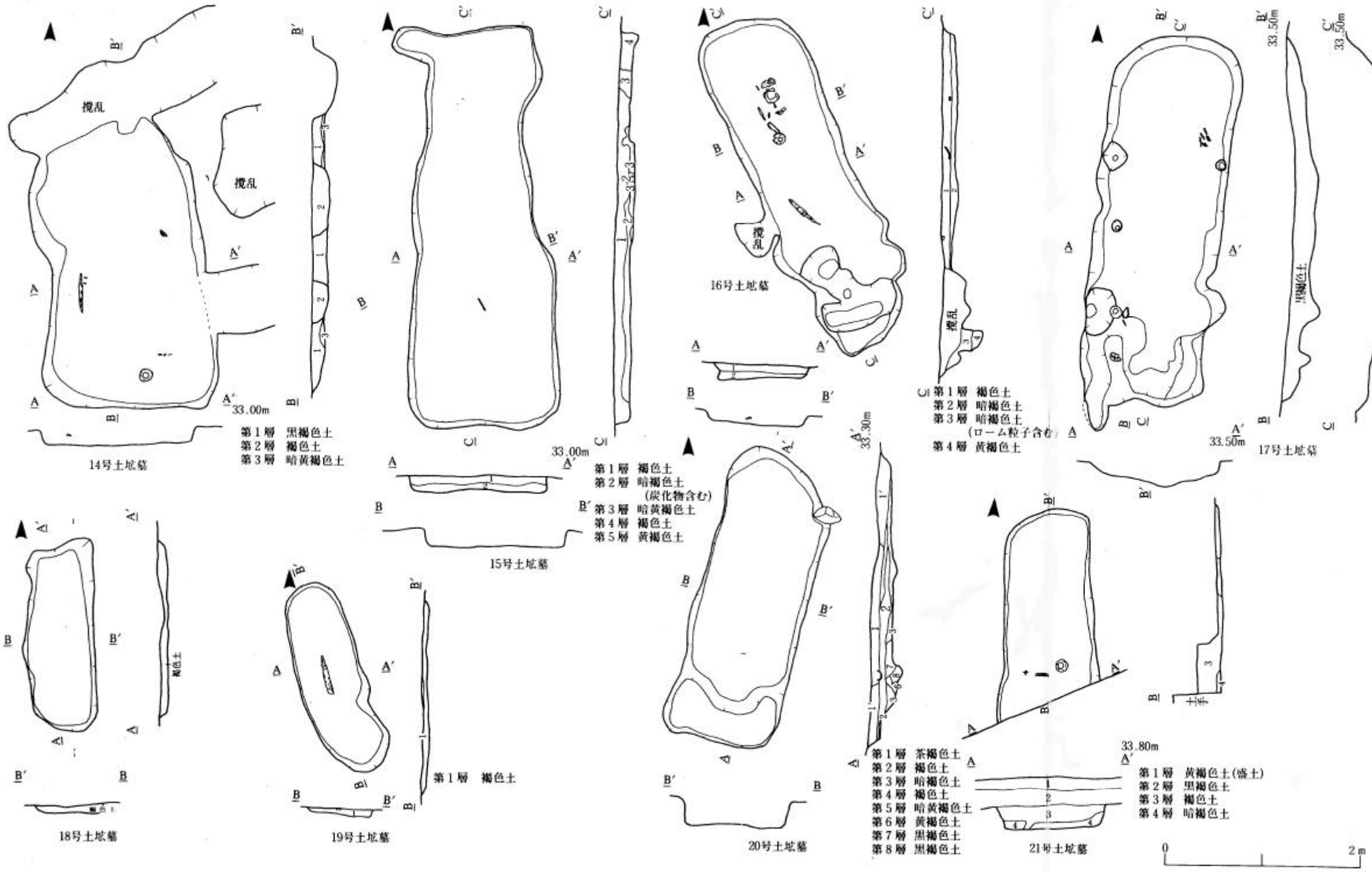
鉄製品　**刀子**(16・17)：16は全長11.5cm、刀身5.9cm、17は全長14.2cm、刀身7.4cmを計る。いずれも茎には木質が残る。**紡錘車**(18)：紡輪径5.5cm、紡茎長20.4cmを計る。紡茎の両端は欠損する。銹化が著しい。



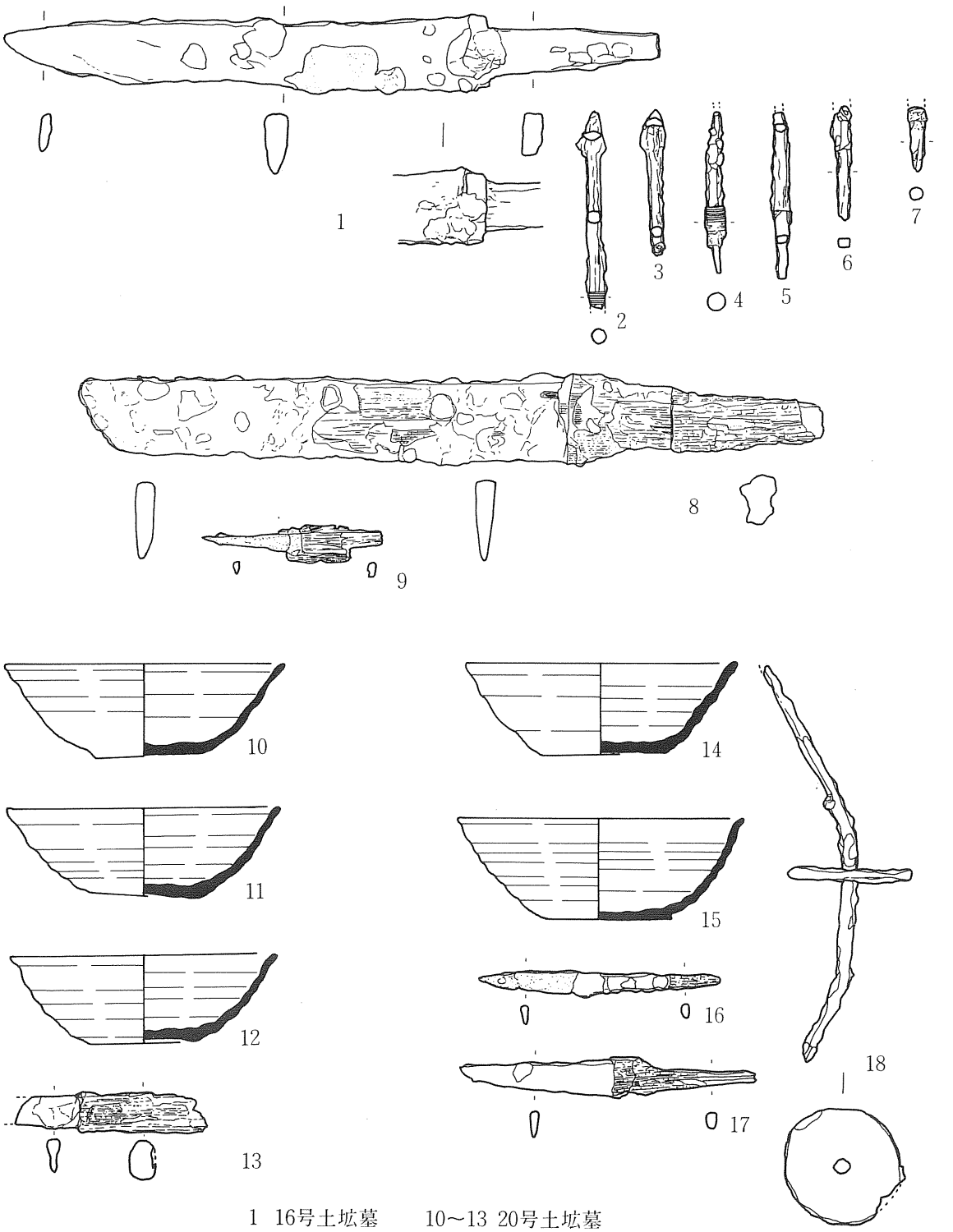
第22図　13号土坑墓出土遺物



第23図　土坑墓出土遺物


14号土坑墓
第1層 黒褐色土
第2層 褐色土
第3層 暗黄褐色土
33.00m
15号土坑墓
第1層 褐色土
第2層 暗褐色土
(炭化物含む)
第3層 暗黄褐色土
第4層 褐色土
第5層 黄褐色土
16号土坑墓
第1層 褐色土
第2層 暗褐色土
第3層 暗褐色土
(ローム粒子含む)
第4層 黄褐色土
17号土坑墓
33.50m
18号土坑墓
19号土坑墓
第1層 褐色土
20号土坑墓
第1層 茶褐色土
第2層 褐色土
第3層 暗褐色土
第4層 褐色土
第5層 暗黄褐色土
第6層 黄褐色土
第7層 黒褐色土
第8層 黒褐色土
21号土坑墓
33.80m
第1層 黄褐色土(盛土)
第2層 黒褐色土
第3層 褐色土
第4層 暗褐色土
0
2m

第24図 土 坑 墓



1　16号土坑墓　　10～13　20号土坑墓
2～7　17号　〃　　14～18　21号　〃
8　19号　〃

第25図　土坑墓出土遺物

竪穴状遺構（第26図）

調査区の東、15号土坑墓の西で検出した。

プランは長軸3.4m、短軸2.7mで若干北に開く方形を呈する。壁高約10cmで床は平担である。西側に溝状の落ち込みが確認されているが、本遺構との関係は不明である。

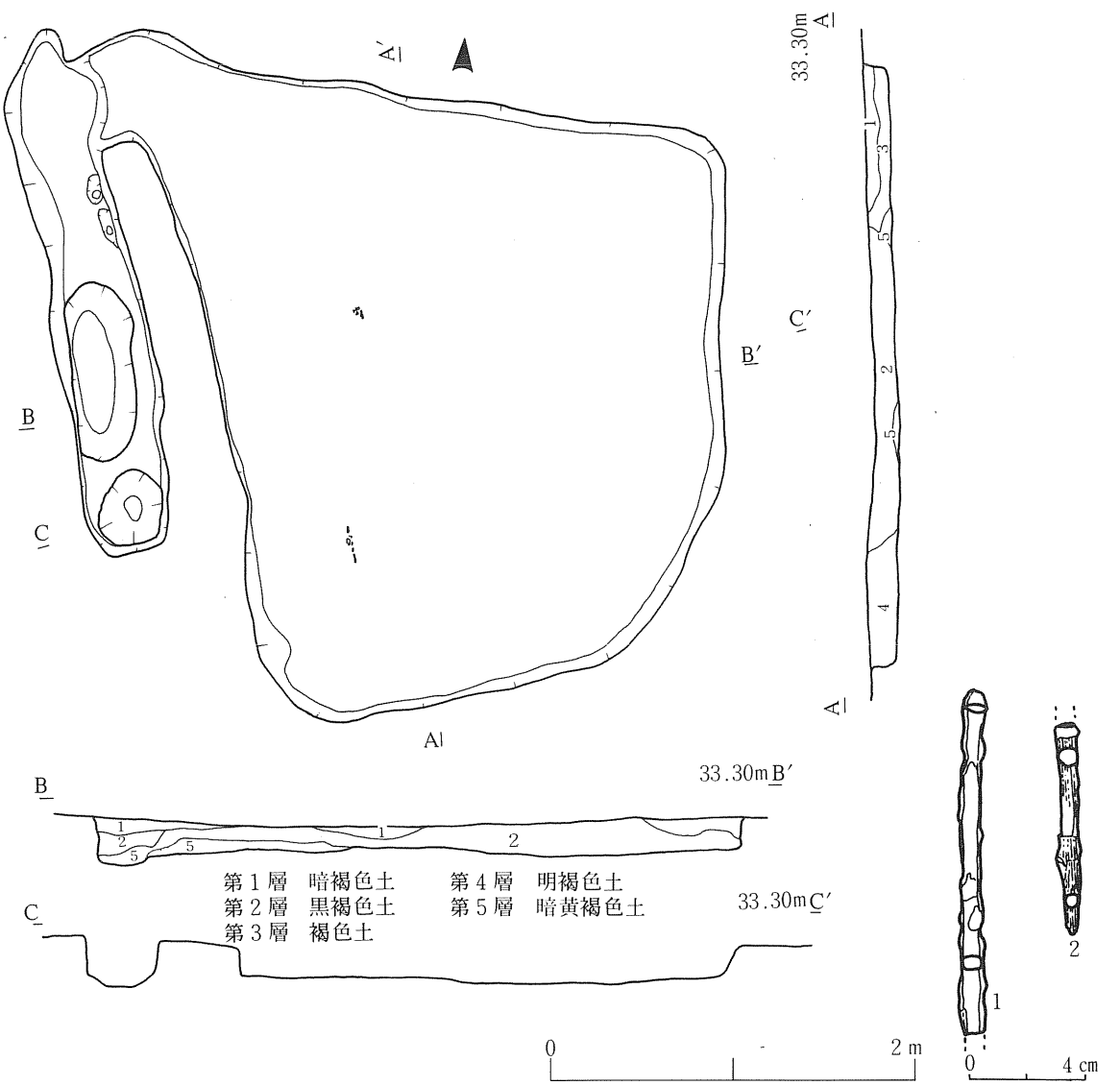
出土遺物（第26図）

鉄製品　鉄鏃（1・2）：1は身の先端を叩き扁平にしたものである。2は茎の部分である。

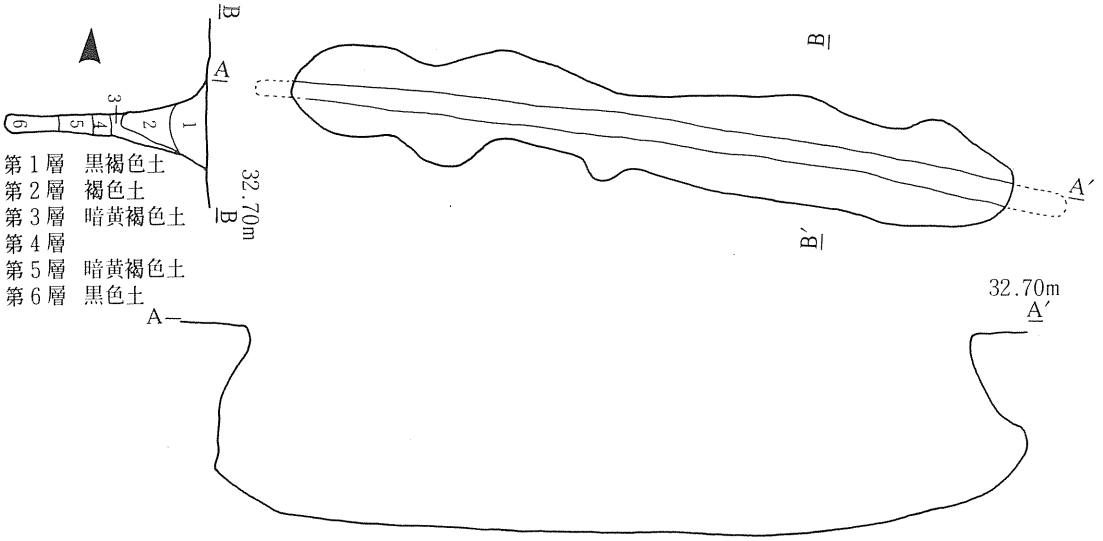
溝状土坑（第27図）

調査区の東、竪穴状遺構、15号土坑墓の下部ローム面で検出した。

プランは、細長い溝状を呈し、長軸は東西で、上部3.84×0.45m、底部は4.33×0.15mで、深さ



第26図　竪穴状遺構と出土遺物

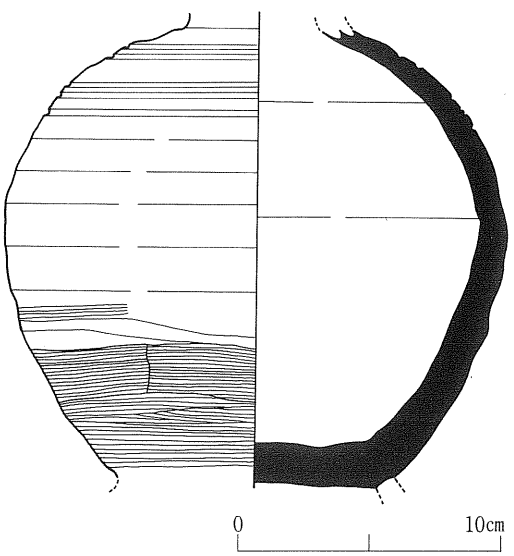


第27図　溝状土坑

は1.07mである。底部は平坦で、両端は袋状となっている。

溝状落ち込み内出土遺物（第28図）

15号土坑墓下部から検出した溝状の土坑内から出土した須恵器壺である。頸部から上は欠損している。肩部に2条、やや下方に3条の細い沈線を施している。体部下方には横方向にカキ目を施している。焼成は良好である。



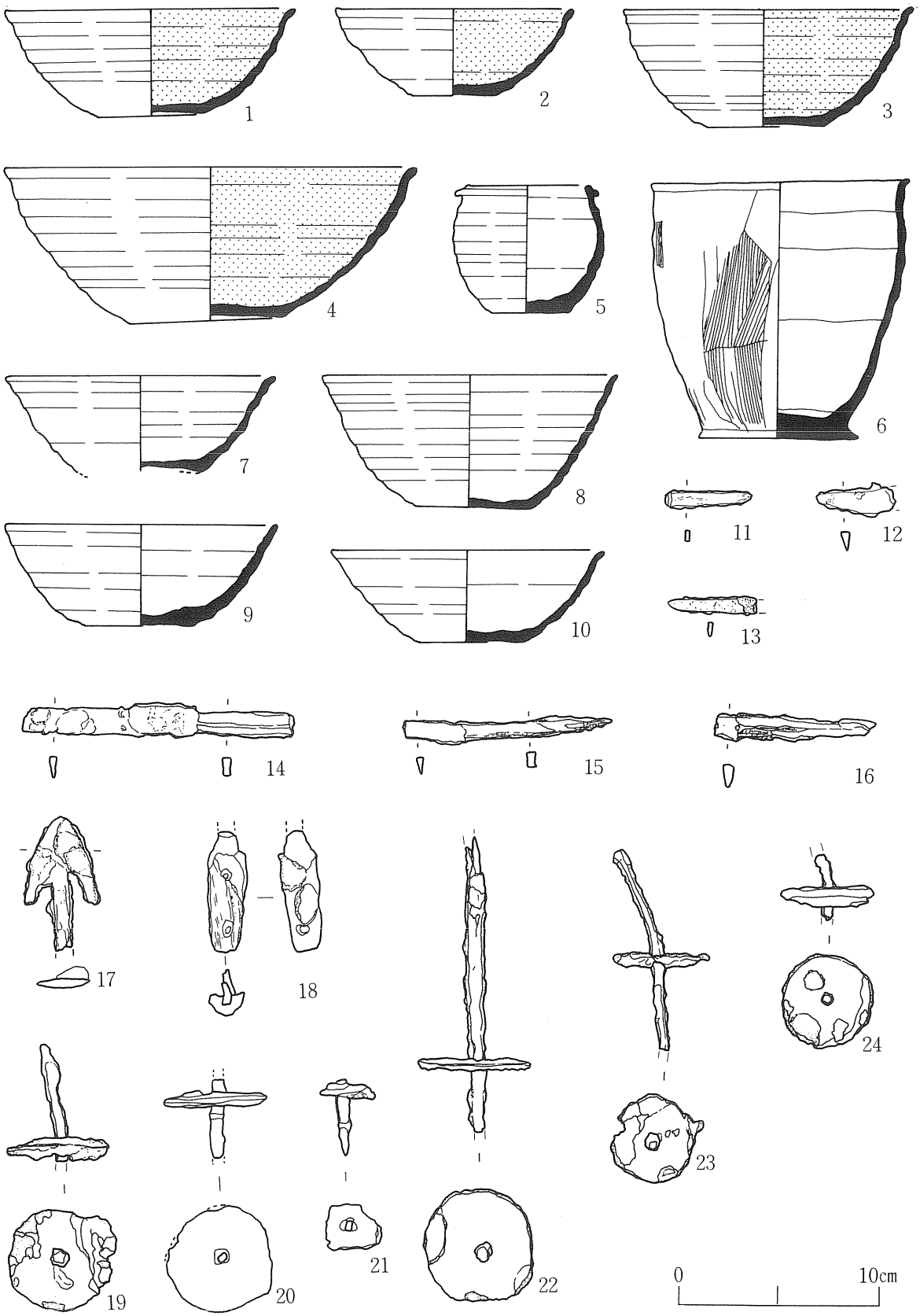
第28図　溝状落ち込み出土遺物

遺構外出土遺物（第29図）

遺構外の第2層褐色土上面から土師器、赤褐色土器、鉄製品が多く出土した。

土器　土師器（1～6）：1～4は黒色処理を施した坏である。いずれも回転糸切り無調整である。内体部は横、底部は放射状にミガキを施している。2は外面にも黒色処理が施されている。4は口径20.7cmを計る大形のものである。5・6は甕である。5は口径6cmの小形のもので回転糸切りである。6は底径8cm、口径12.9cmを計る。ゆるく内湾しながら口縁に至り、口縁はわずかに外反する。外面には縦方向に細かい刷毛目痕がある。胎土中に砂、小礫が多く含まれ、器表面はザラザラしている。巻き上げ（輪積み）痕跡が明瞭にみられる。赤褐色土器（7～10）：8・9は回転糸切り無調整である。7・10は磨滅が激しく切り離しは不明である。

鉄製品　**刀子**（11～16）：身・茎の破損品6点が出土した。15・16の茎には木質が残る。**鉄鏃**（17）：先端部の破損品である。鏃としては大形のものである。**紡錘車**（19～24）：紡輪径4～5.3cmを計るものが6点出土している。紡径はいずれも欠損している。**不明鉄製品**（18）：現長6.2cm、幅1.7cmを計る。二本の鋲（釘）が打たれ、その先に木質が付着している。



第29図　遺構外出土遺物

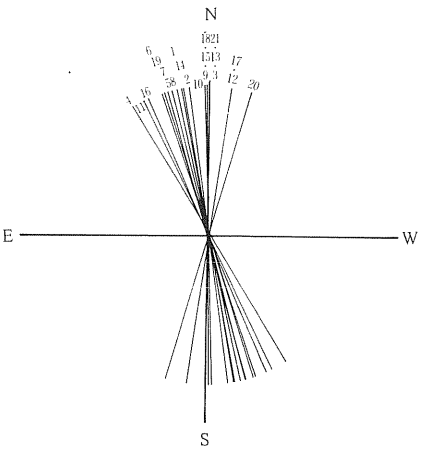
まとめ

土坑墓について

湯ノ沢Ｆ遺跡から21基の土坑墓を検出した。以下簡単にまとめてみたい。

規模：土坑墓の規模は、最大のもので長径4.1m 、巾1.48m 、最小のものは長径1.46m 、巾0.94m である。平均値は長径2.8m 、巾1.68m で深さは確認面から26.6cmである。

長軸方位：長軸方位についてみると、すべてがN32°Ｗからｎ16°Ｅの範囲に入り概略北方向である。１・２、５～９号土坑墓はほぼ同方向にあり、特に２・６～９号土坑墓はまとまっている。また、３・10・12・14・15・18・21号土坑墓、４・11・16・19号土坑墓、17・20号土坑墓がほぼ同方位にある。方位からみると４群に別けられるようである。



挿図　土坑墓長軸方向

埋葬形態：木棺が考えられる。木棺は腐蝕して土壌化しているが、その痕跡が３・４・10・20号土坑墓に明瞭に認められる。副葬品もまたその痕跡内に納められているなどの点からも木棺の可能性が大きい。しかし木棺の蓋をとめる鉄釘の出土はなかった。

埋葬頭位：人骨の出土もなく明確に判明できるものはない。ただ副葬品、特に鉄刀、土器の位置からある程度推測できる。鉄刀は16号土坑墓を除き切先をすべて南に向けて置かれている。土器については、北に置くものが２・４・７・８・10・16号土坑墓、南に置かれるのが３・14・20・21号土坑墓であり、北に置かれるものが多い。被葬者の頭部方向には鉄刀の切先を向けないものと仮定するならば頭位は北位置であろうと考えられる。

性別：土坑墓に埋葬された被葬者の性別を判明することは、人骨の出土もなくまったく不可能に近い。しかし、あえて土坑墓の規模、副葬品の相違からある程度考えてみたい。推測できる副葬品には女性の持ち物と考えられる紡錘車がある。紡錘車の検出された土坑墓は１・13・21号土坑墓で、これらには鉄刀、鉄鏃などの武器類の出土はなく、他に比らべると土坑墓の規模もきわめて小さい。これらの点から１・13・21号土坑墓には女性が埋葬された可能性も考えられる。

時期：土坑墓は最も接近するもので約30cmの間隔しかなく、隣接してはいるが重複はまったくみられない。あるいはマウンド、墓標の存在も考えられるが、いずれにしろ長期間にわたるものとは考えがたい。副葬品として出土した土器は復恵器杯、土師器杯、赤褐色土器がある。ほとんどは赤褐色土器である。赤褐色土器は、すべて回転糸切り後の再調整はまったくみられないものである。秋田城跡、払田柵跡からは底部および周縁に回転ヘラケズリのある赤褐色土器が出土しており、払田柵跡では嘉祥２年（849年）の紀年名のある木簡と伴出していることから、これらケズリのあ

る土器群は9世紀中半頃に位置づけられる。それよりも技法的に新しい本遺跡出土の土器には10世紀以降の年代が考えられる。

以上簡単にまとめてみた。立派な副葬品をもつ被葬者の解明、この地域を墓域とした人々の集落の発見等々まだまだ問題点が多い。土坑墓はさらに北西方向に広がる相様を呈していることから今後詳細に調査を実施して、10世紀以降の歴史的背景もふまえ今後の課題とし、新たに報告する機会を持ちたい。

参　考　文　献

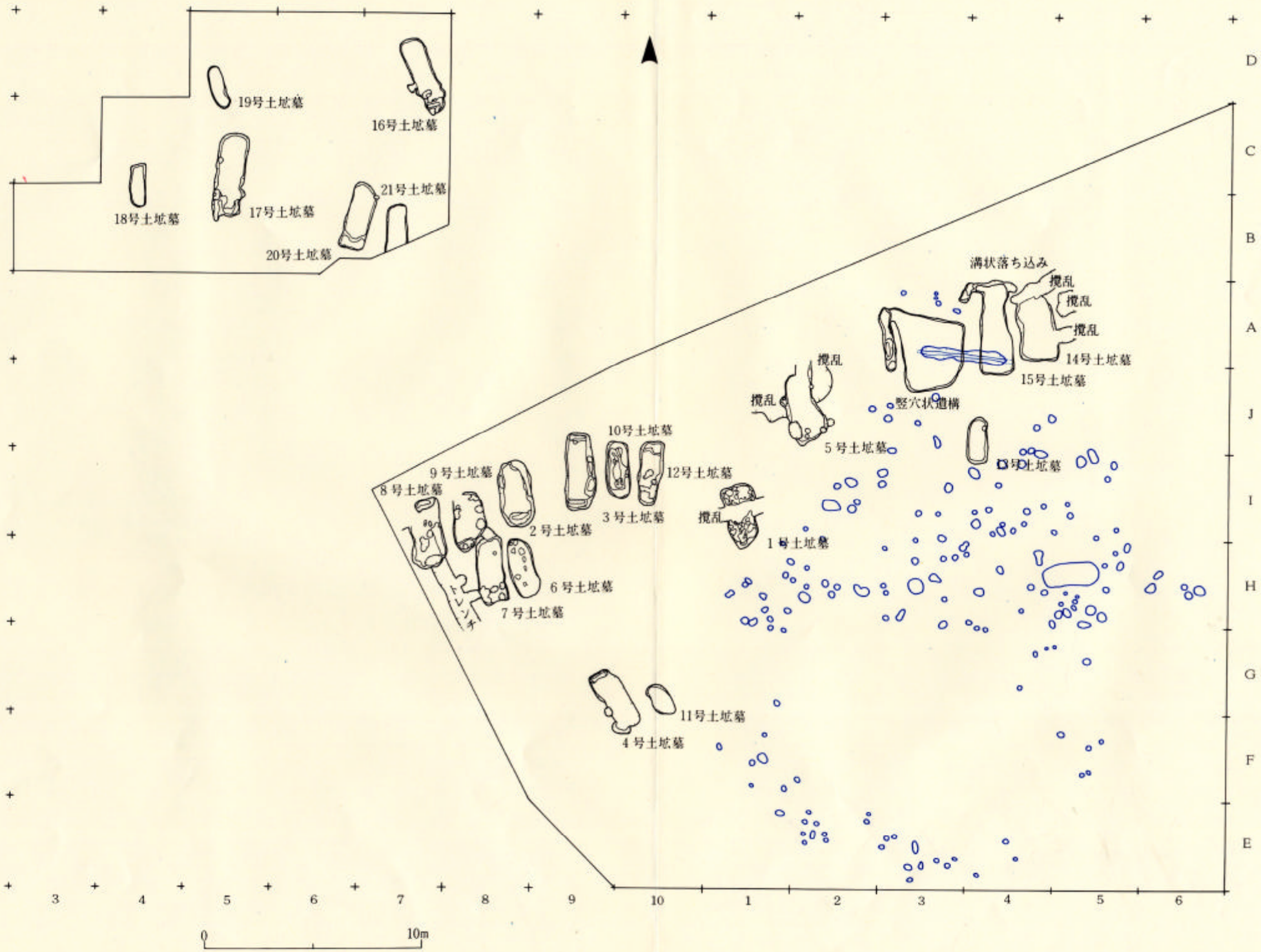
小林行雄：「古代の技術」昭和37年　塙書房

末永雅雄：「日本武器概説」　1971

秋田県教育委員会：「払田柵跡」
昭和49～57年

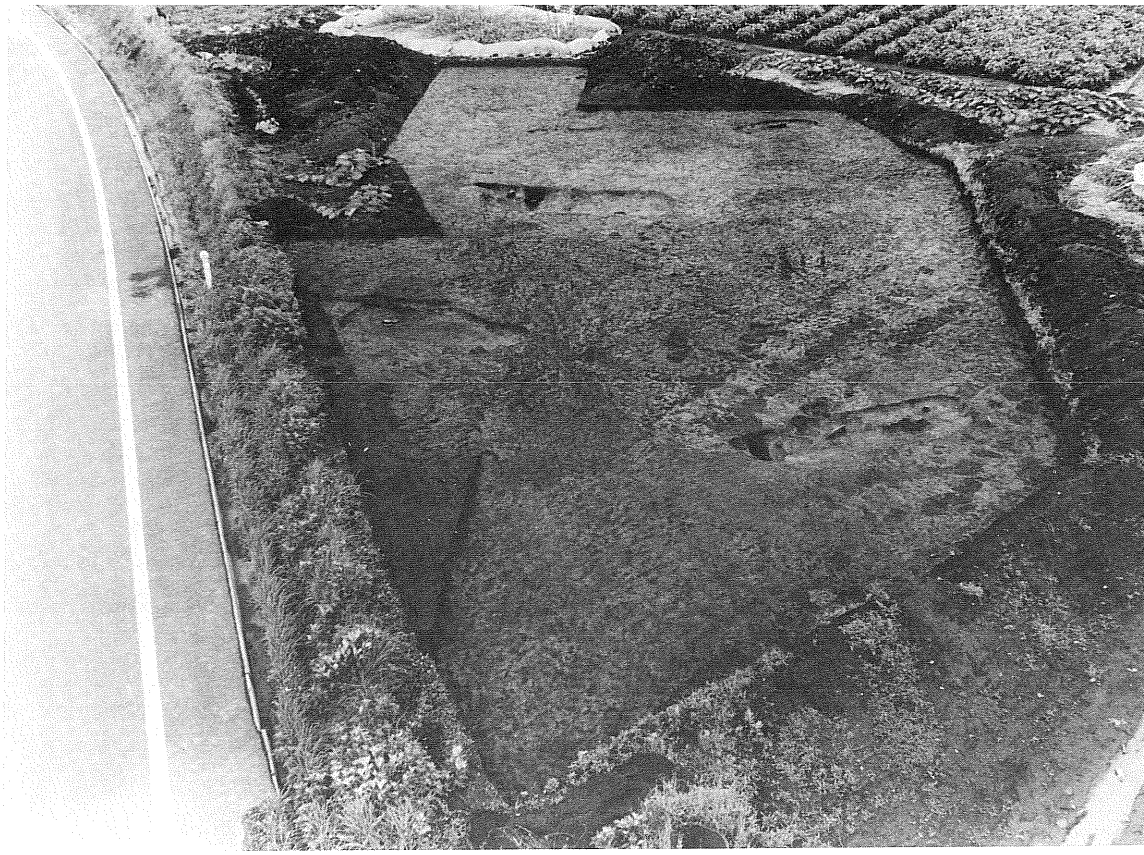
秋田市教育委員会：「秋田城跡」
昭和50年

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　1983



第30図　湯ノ沢F遺跡，遺構配置図

遺跡全景（南東→）



遺跡全景（東→）

図版 1

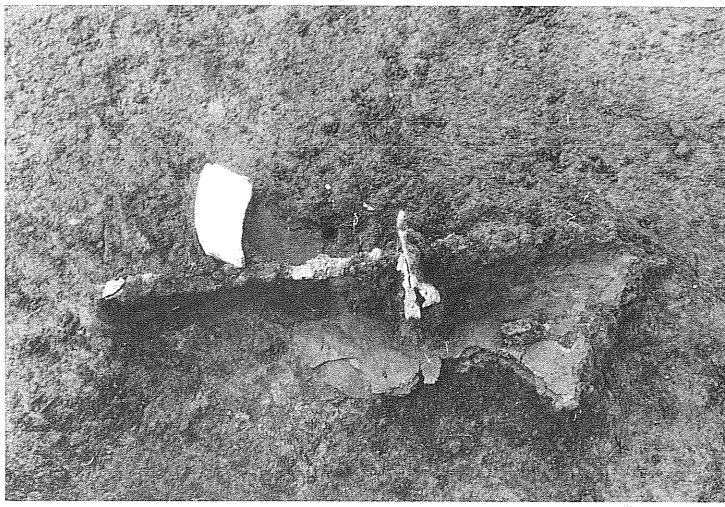
遺跡近景（東→）

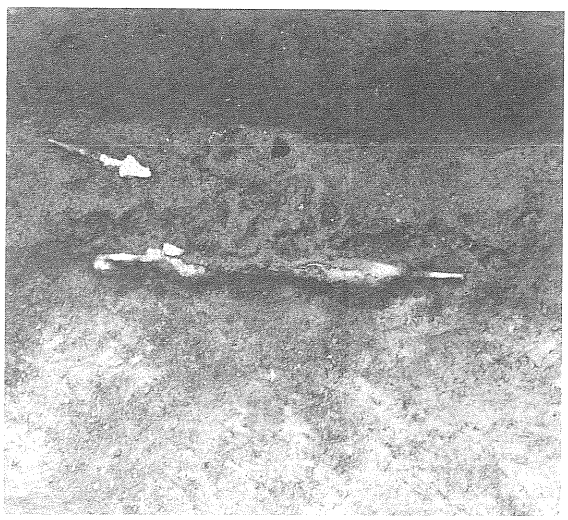
遺跡近景（南→）

図版 2

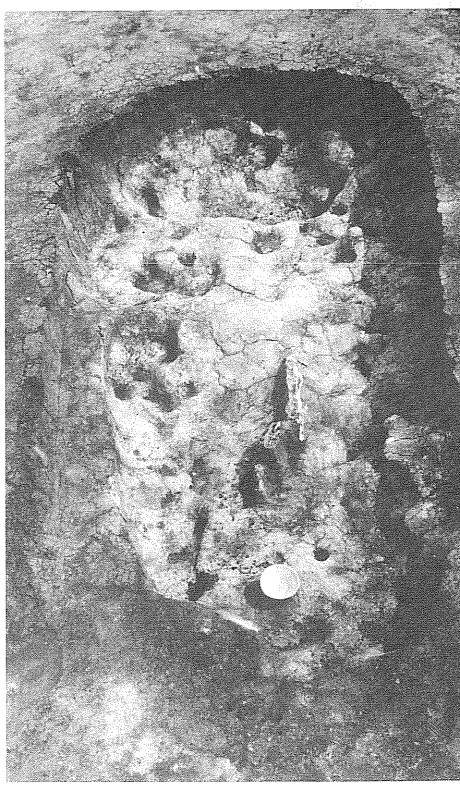
1号土坑墓
（東→）

1号土坑墓遺物
出土状態
（東→）

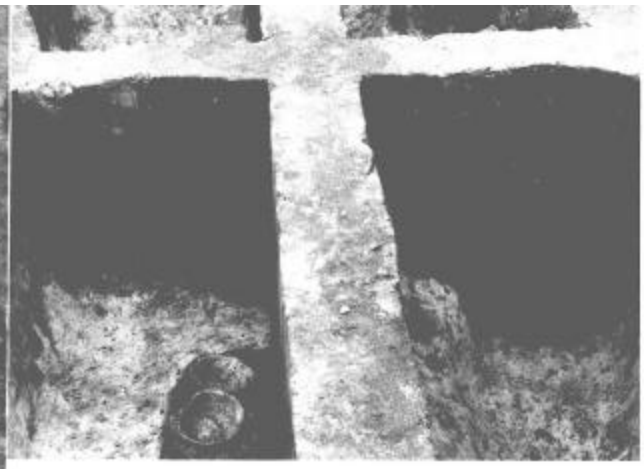




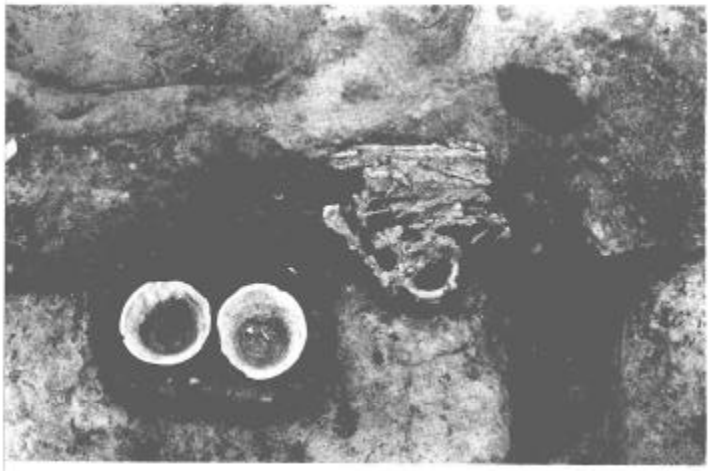
2号土坑墓（北→）



図版3



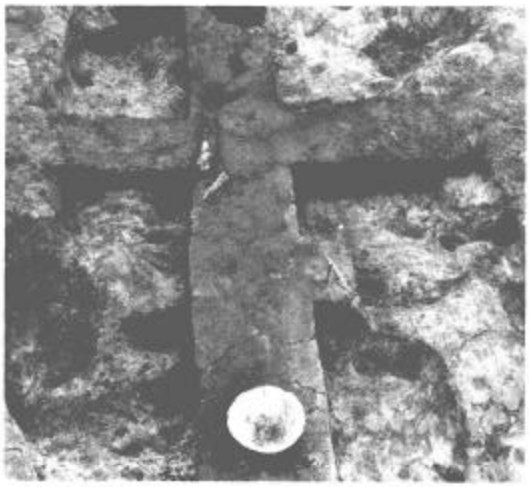
左：3号土坑墓（南→）
上：3号土坑墓土層（南→）



3号土坑墓
遺物出土状態
（西→）

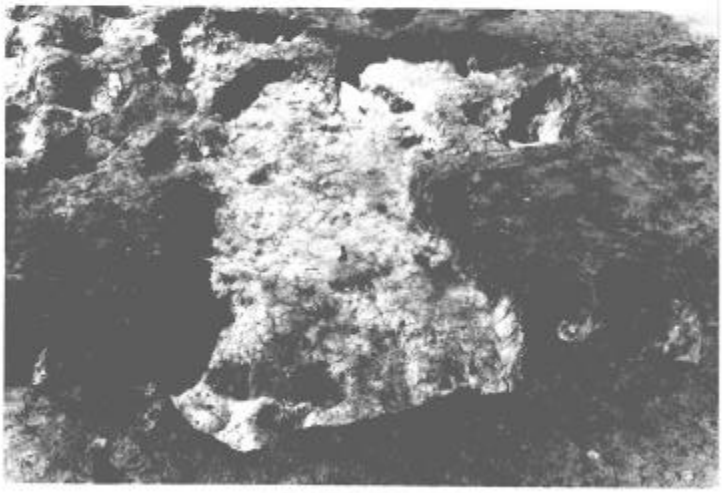
3号土坑墓
遺物出土状態
（西→）

図版 4



右：4号土坑墓（北→）
左：4号土坑墓遺物出土状態（北→）

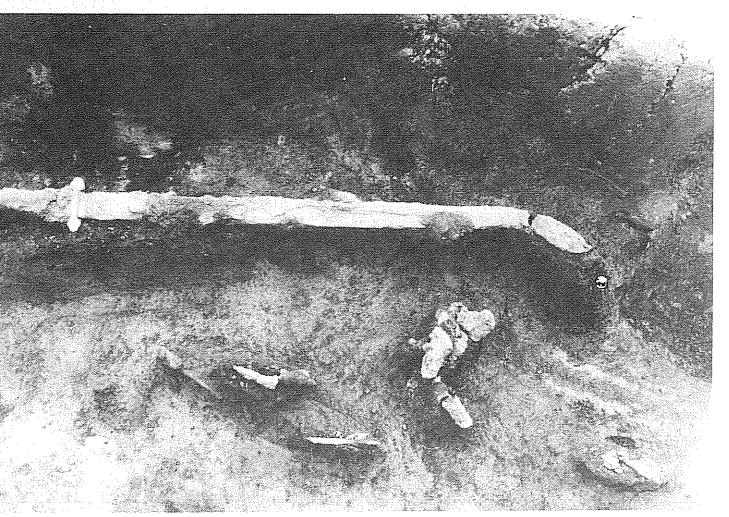
5号土坑墓
（南→）



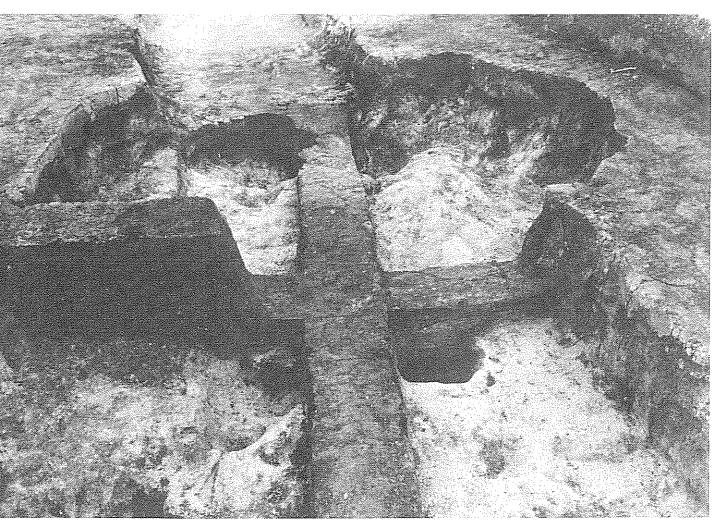
右：6号土坑墓（南→）
左：漆皮箱出土状態（東→）

図版 5

左：７号土坑墓（南→）
右：　　〃　　土層

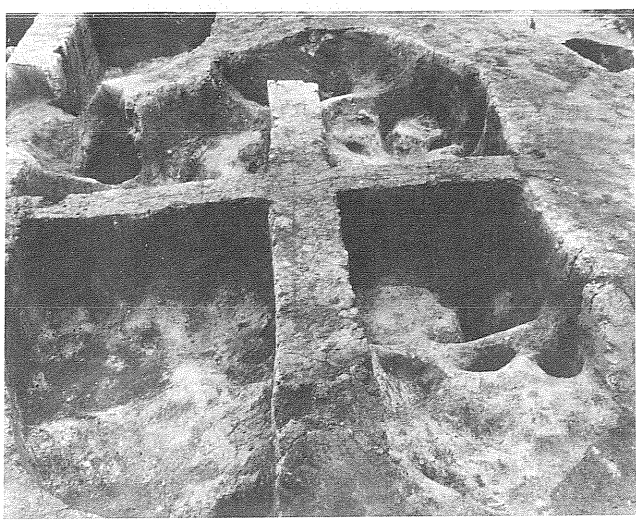


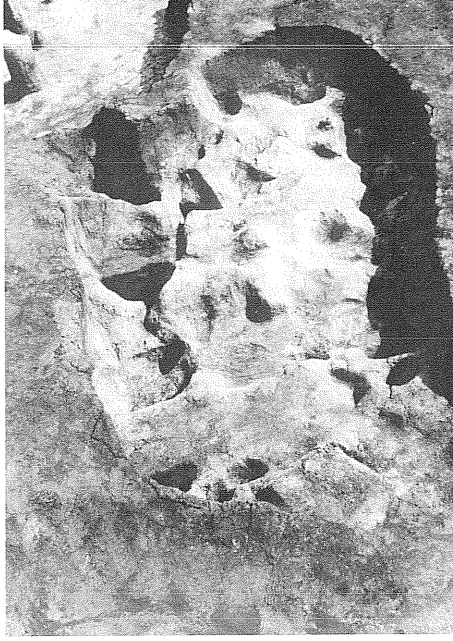
７号土坑墓（西→）
遺物出土状態



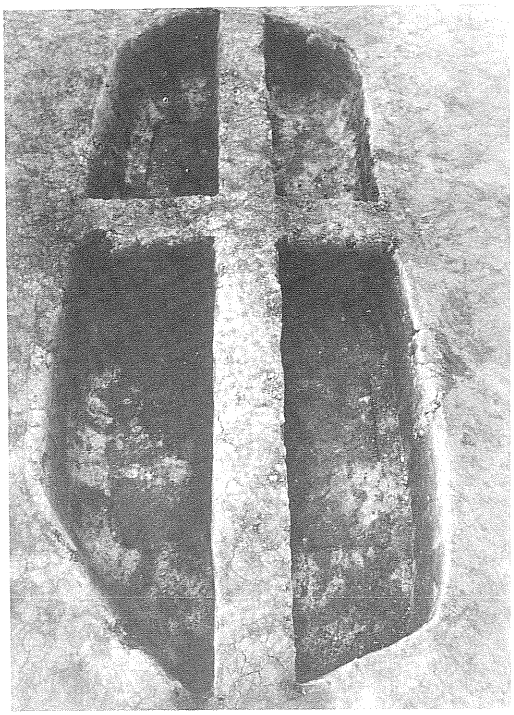
８号土坑墓（北→）

図版６



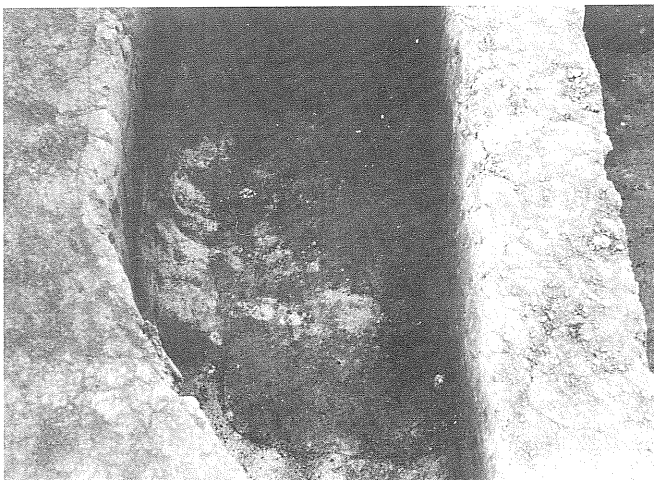


右：９号土坑墓（南→）
左：９号土坑墓土層（南→）

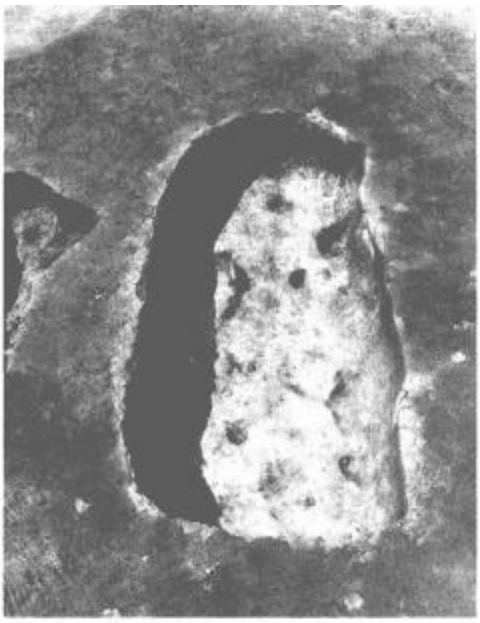


上右：10号土坑墓
（南→）

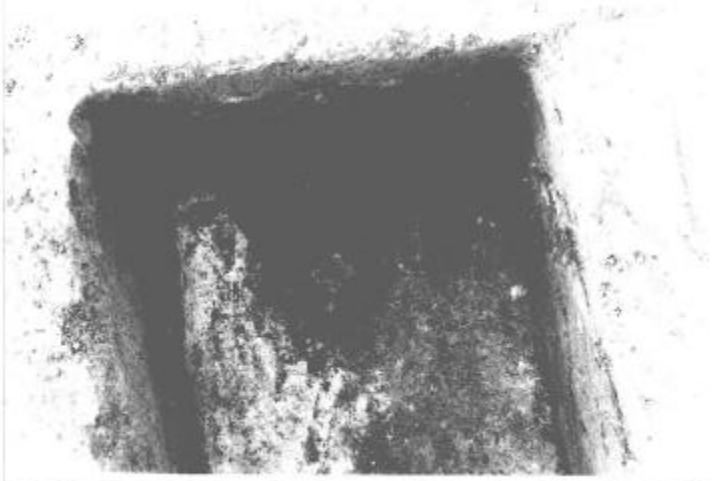
中・左・下：10号土坑墓
木棺痕跡
（南→）



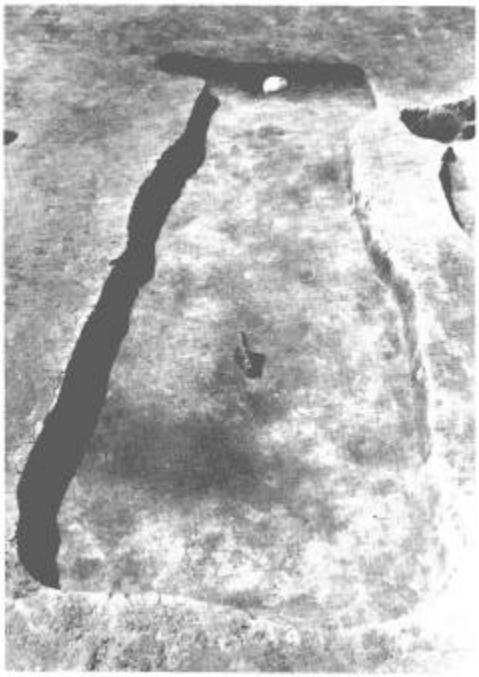
図版７



上左：12号土坑（南→）
上右：13号土坑墓（南→）



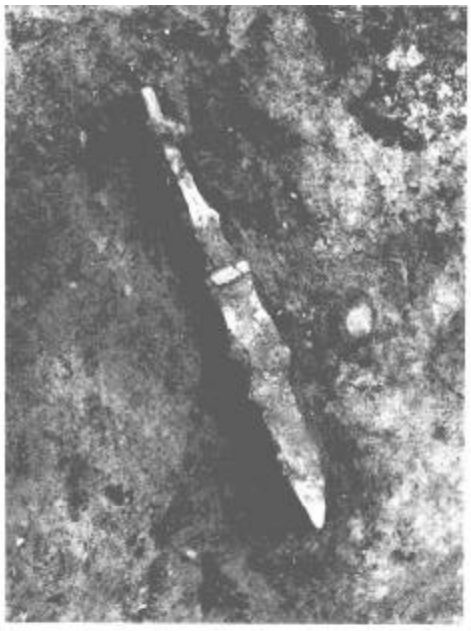
13号土坑墓
紡錘車出土状態
（南→）

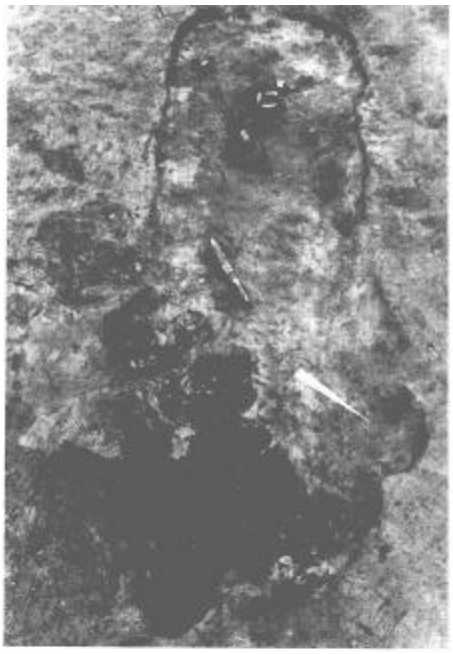


左：14号土坑墓
（南→）

右：15号土坑墓
（南→）

図版 8

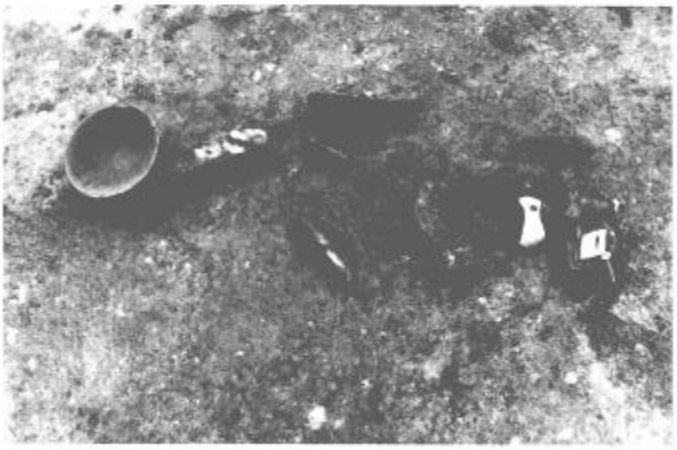




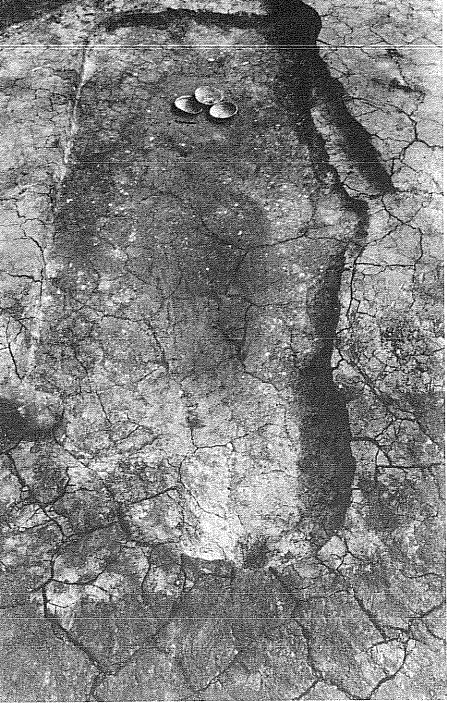
上右：16号土坑墓
（南→）
上左：鉄刀出土状態

中：16号土坑墓
遺物出土状態
（東→）

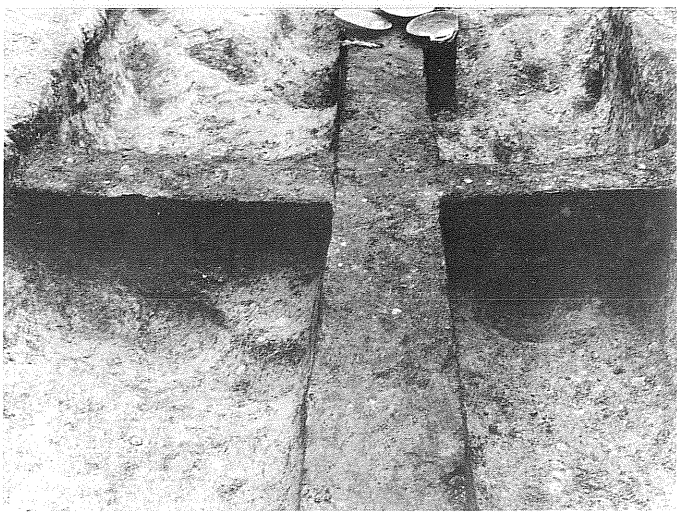
下右：17号土坑墓
（北→）
下左：19号土坑墓
（南→）



図版 9



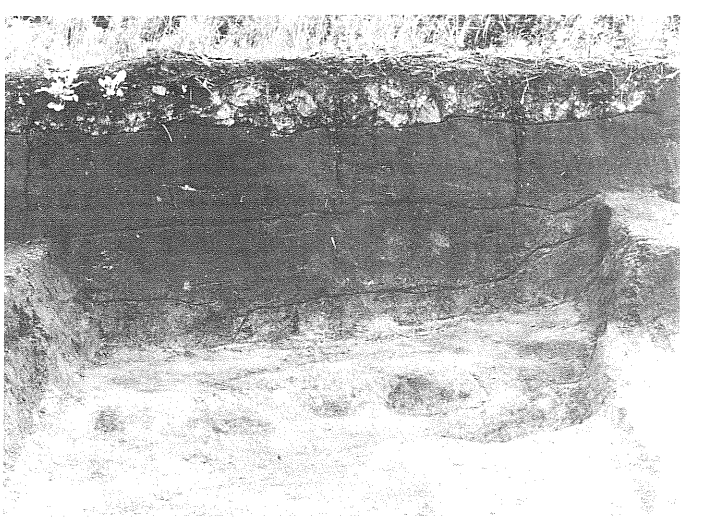
20号土坑墓（北→）



土　　層（北→）

20号土坑墓遺物出土状態
（東→）

21号土坑墓（南→）

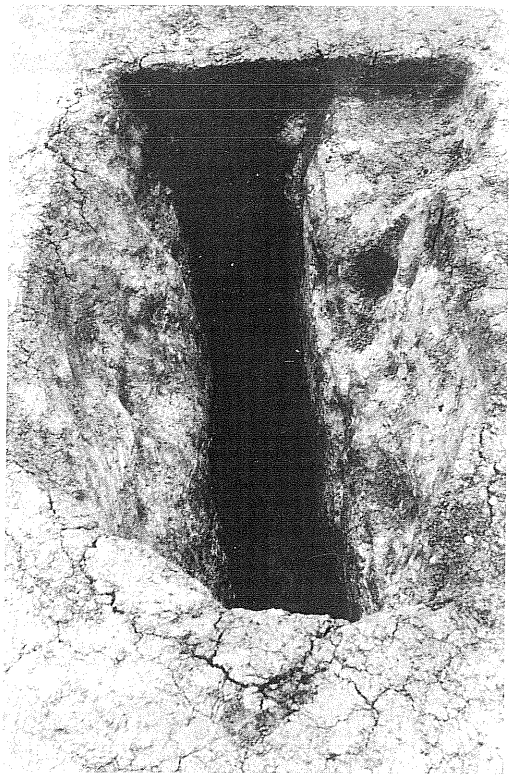


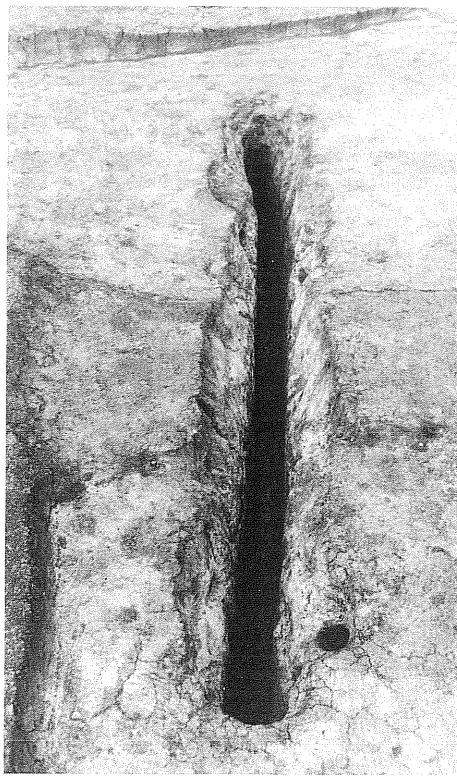
土　　層（南→

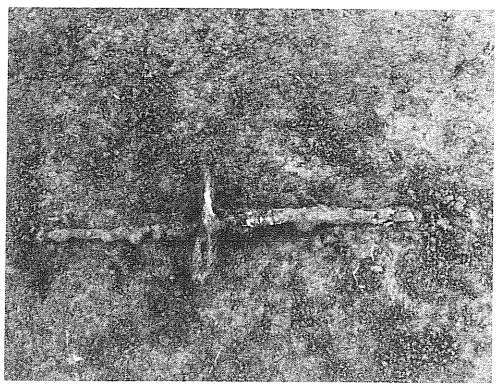
図版10

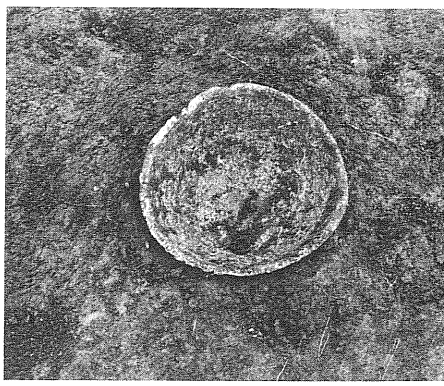
竪穴状遺構
（南→）

中：溝状土坑



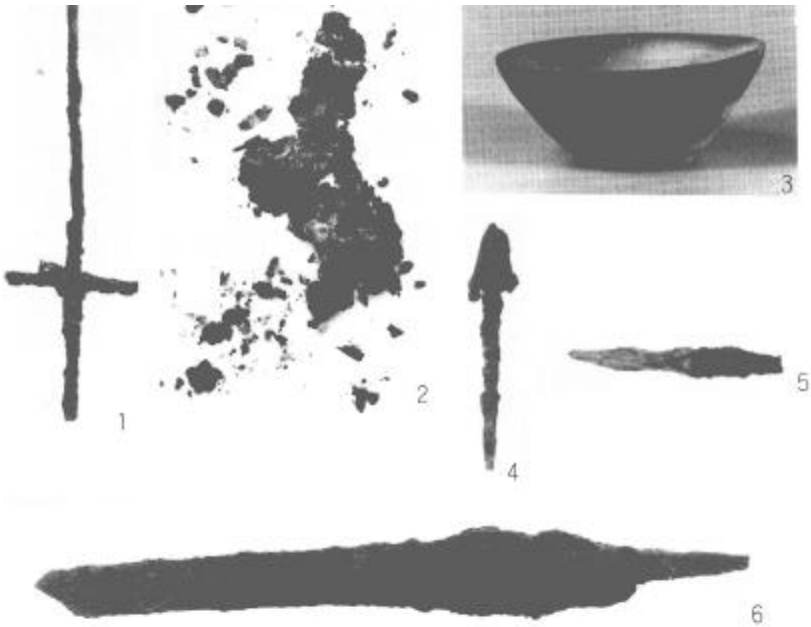






遺構外遺物出土状態

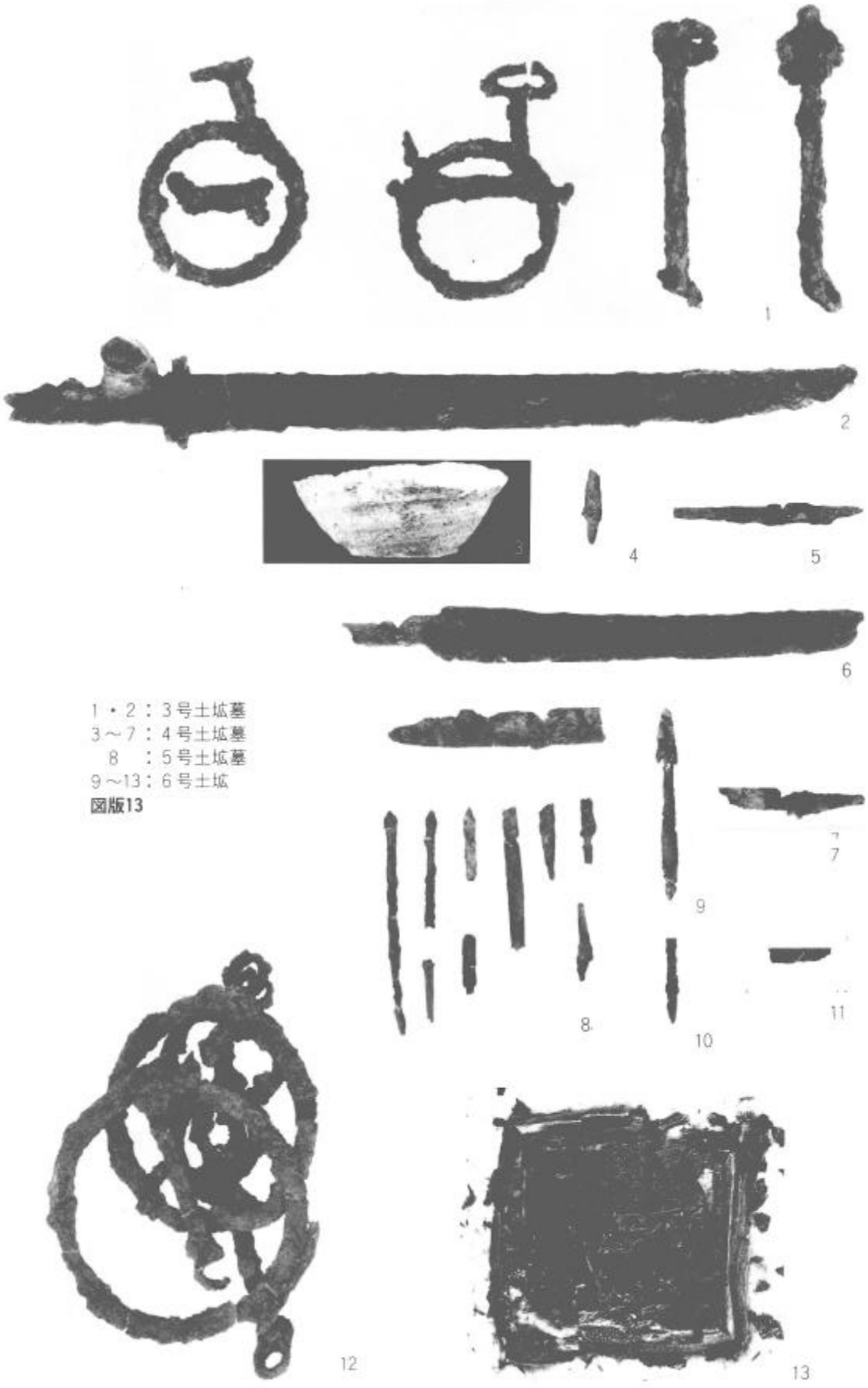
図版11



1・2：1号土壙墓
3～6：2号土壙墓

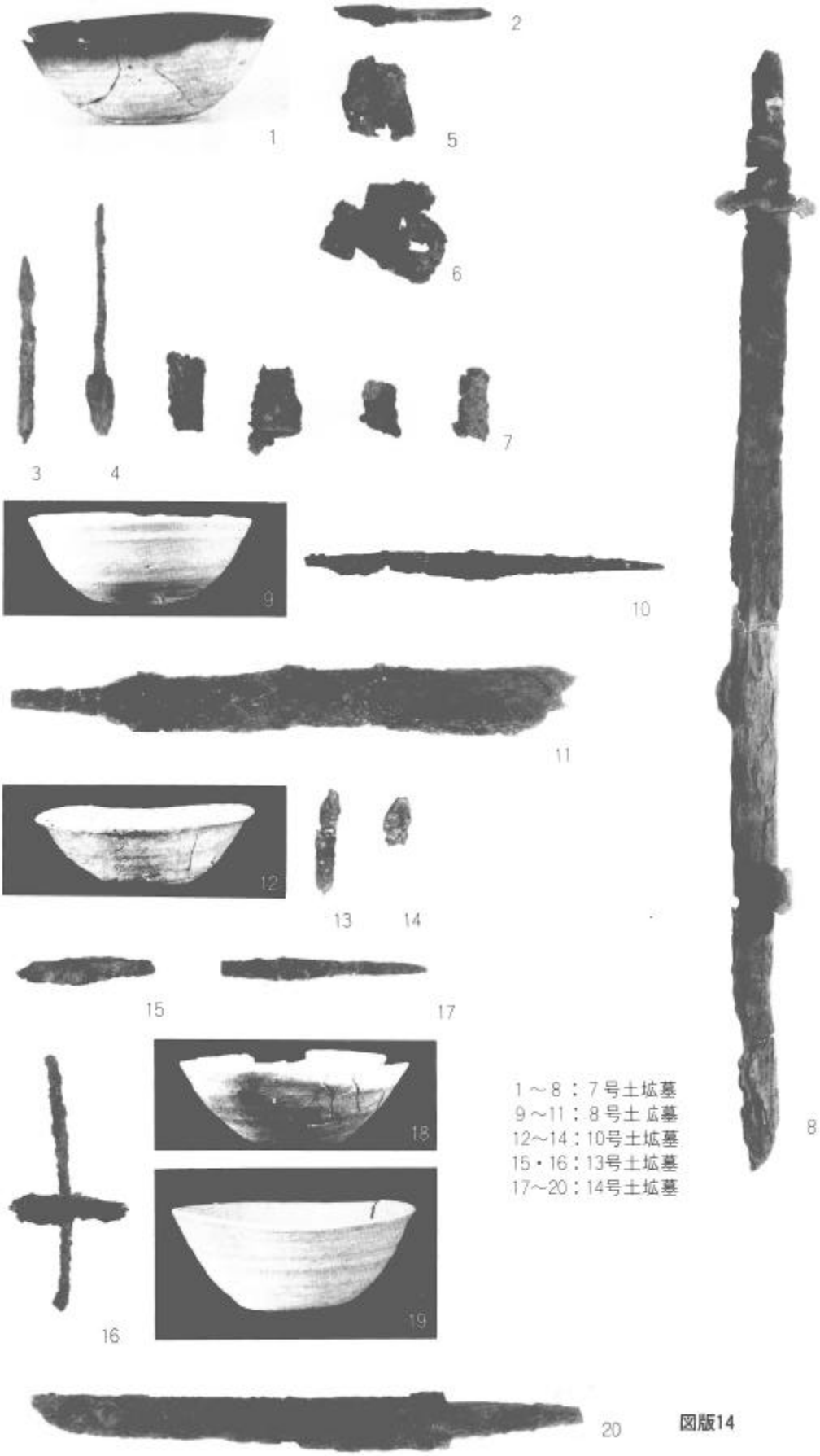
7～9：3号土壙墓

図版12



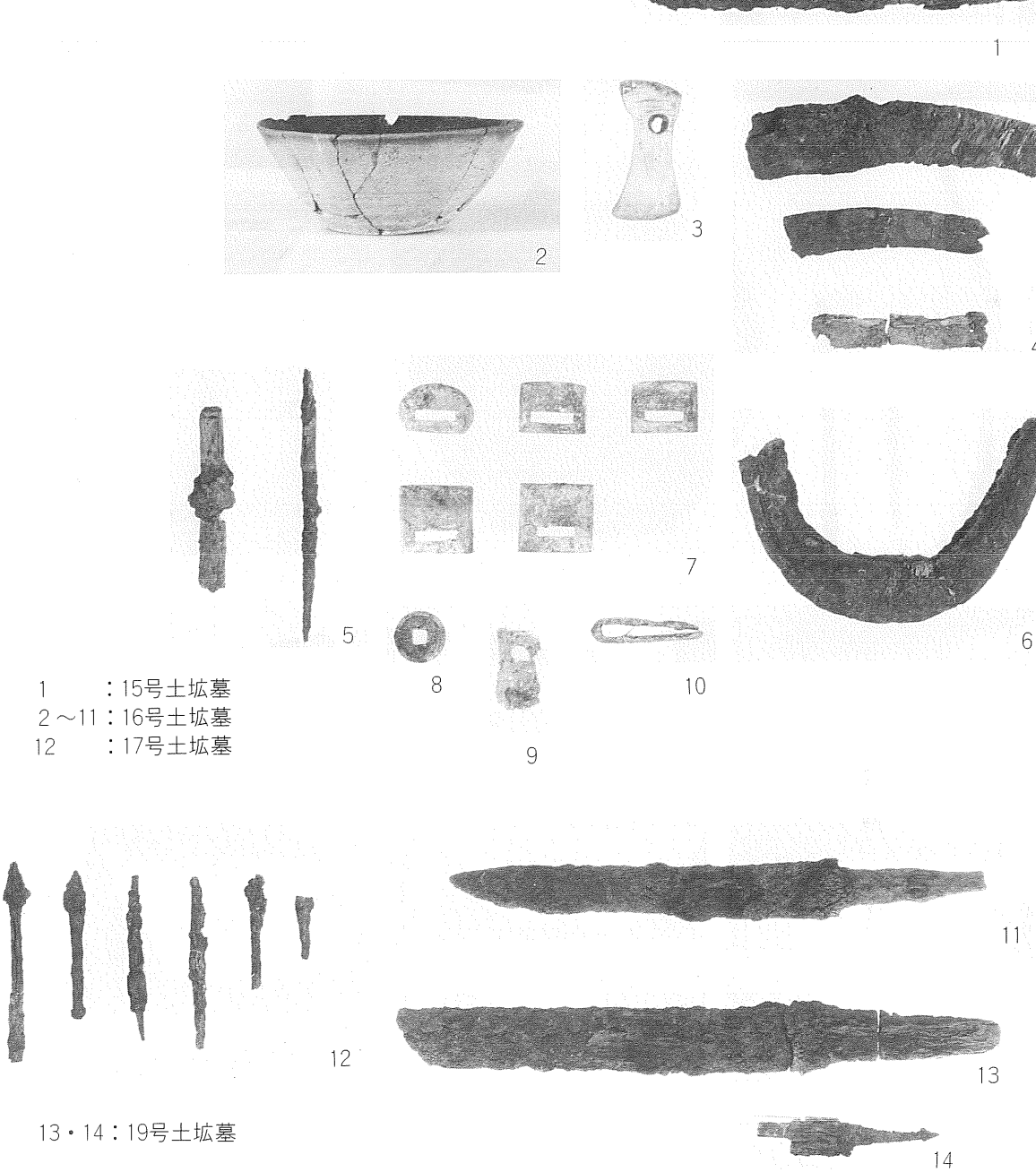
1・2：3号土坑墓
3～7：4号土坑墓
8　：5号土坑墓
9～13：6号土坑

図版13



1～8：7号土坑墓
9～11：8号土坑墓
12～14：10号土坑墓
15・16：13号土坑墓
17～20：14号土坑墓

図版14

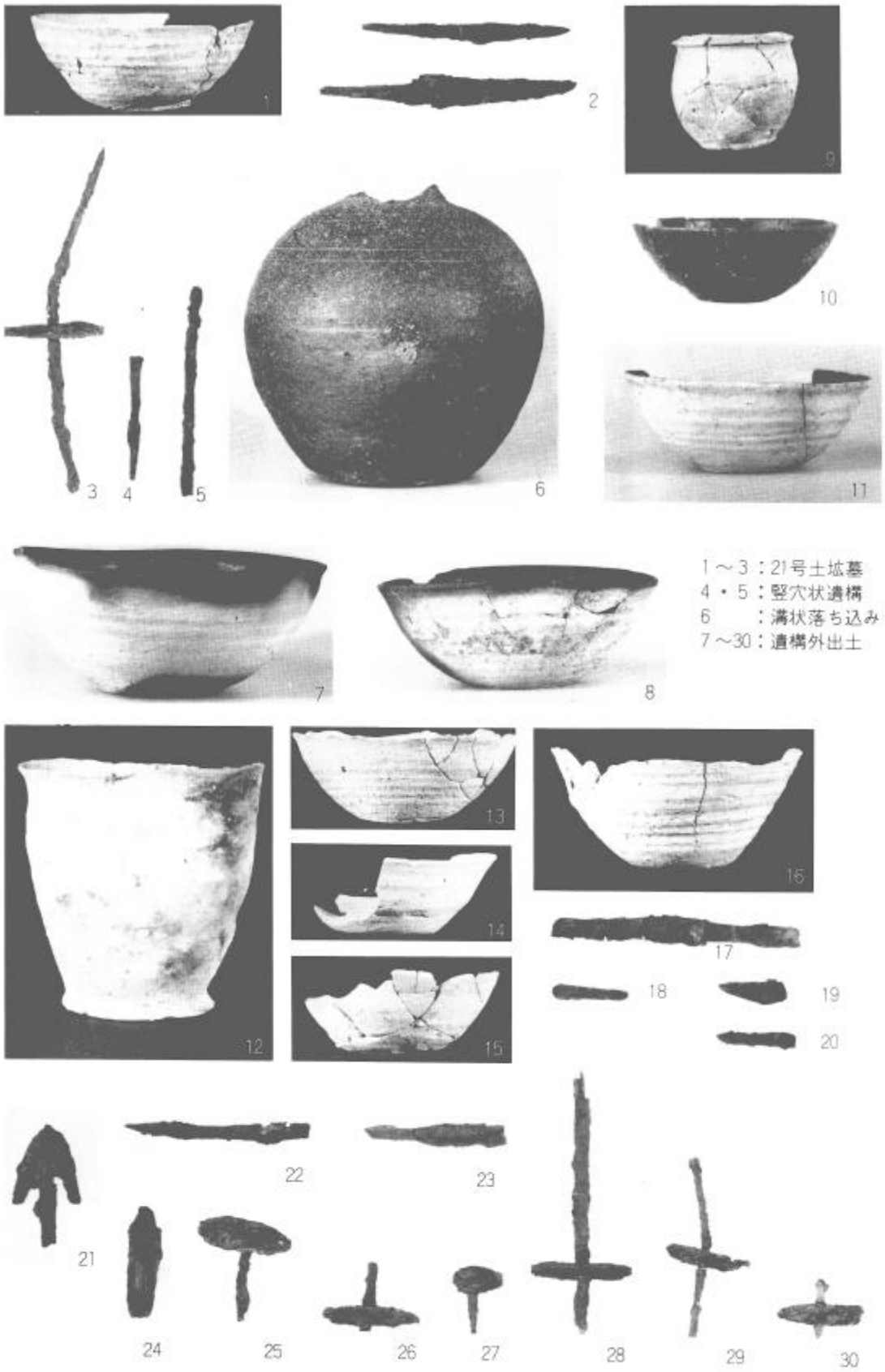


1　　：15号土坑墓
2～11：16号土坑墓
12　　：17号土坑墓

13・14：19号土坑墓

15・19：20号土坑墓

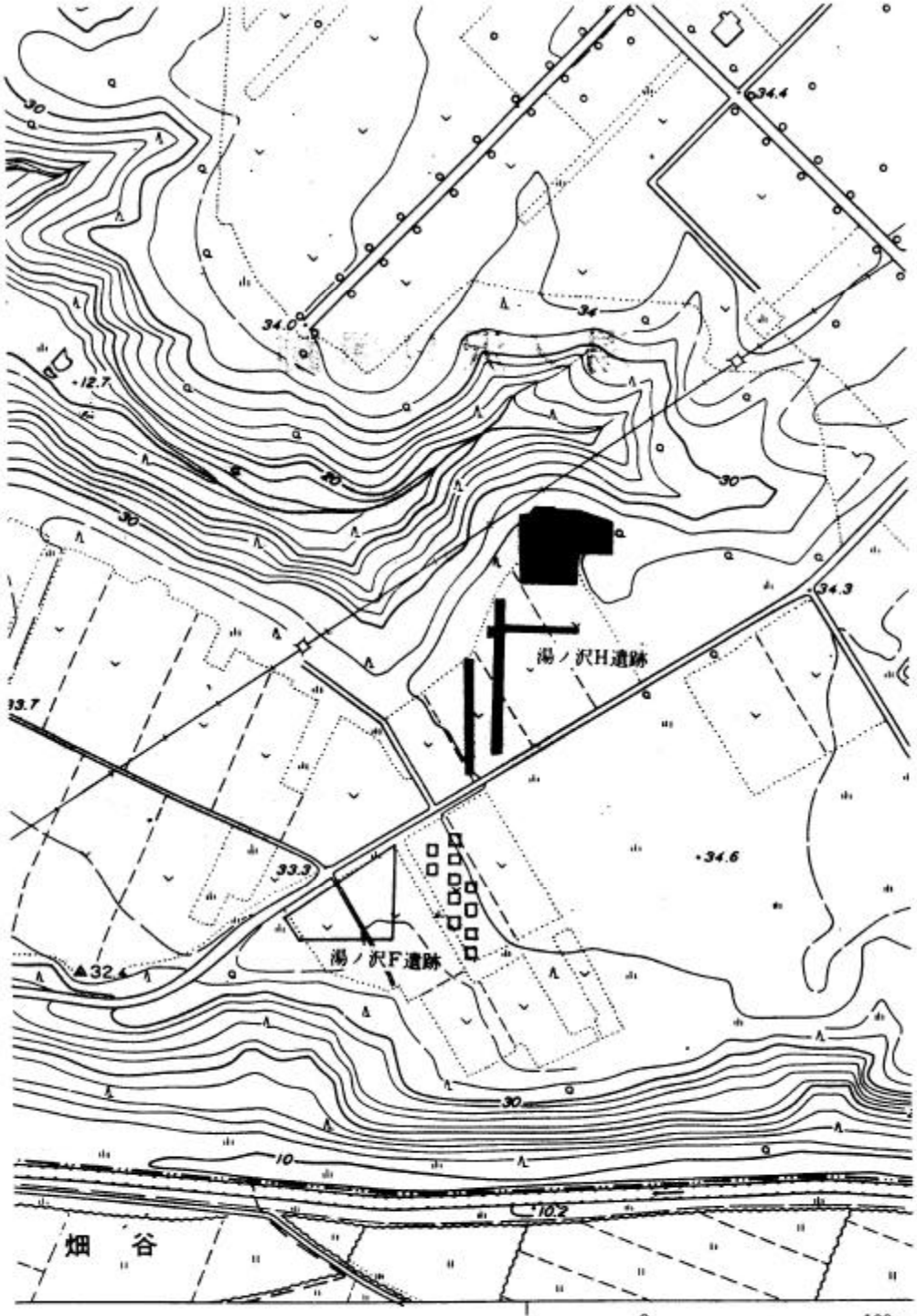
図版15



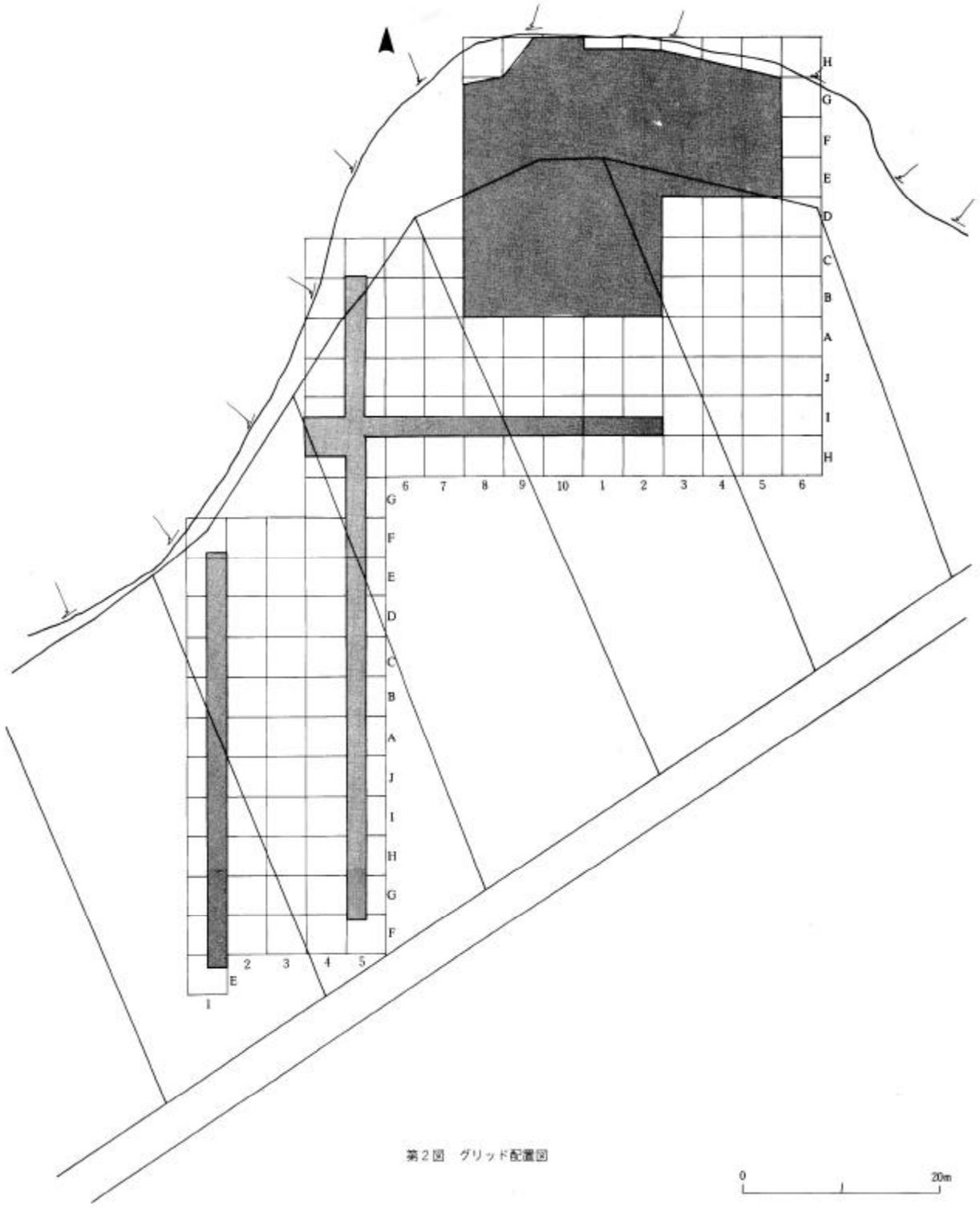
1～3：21号土坑墓
4・5：竪穴状遺構
6　　：溝状落ち込み
7～30：遺構外出土

図版16

湯ノ沢H遺跡


湯ノ沢H遺跡
湯ノ沢F遺跡
畑　谷
34.4
34.0
34
12.7
30
34.3
33.7
33.3
34.6
32
10
10.2
0
100m

第１図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概要

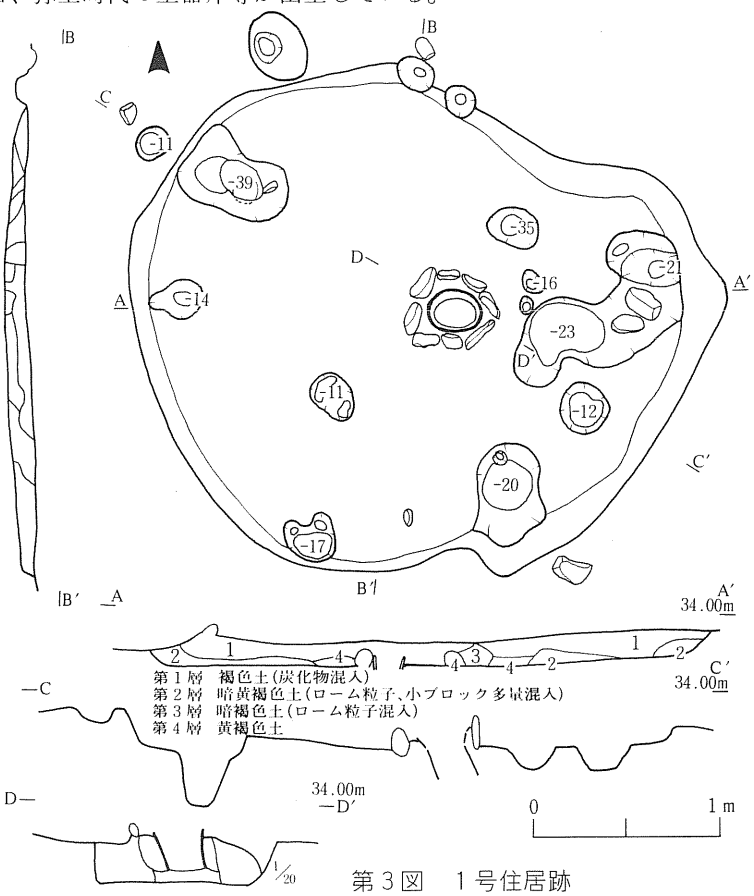
湯ノ沢E遺跡から東へ300mの小さく北に突き出る舌状台地にある。遺跡は、台地の中央部に営まれ、検出された遺構は縄文時代中期の住居跡、土坑、晩期の炉跡、土坑等である。遺物は、縄文時代前期末葉～晩期の土器、石器、弥生時代の土器片等が出土している。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区の東側に位置する。

プランは、径3m程の円形を呈する。壁高約15cmで、わずかに傾斜しながら立ち上がる。覆土は褐色土が主体で、暗い黄褐色土、ブロック状に軟らかい黄褐色土が堆積している。ピットは、壁下に周るように検出されたが、比較的浅く主柱穴と思われるのは不明である。炉は、中央やや東側に15～20cmの扁平な礫で埋設土器を囲む「土器埋設石囲い炉」である。床面は、平坦であるが炉周辺を除くと軟弱である。

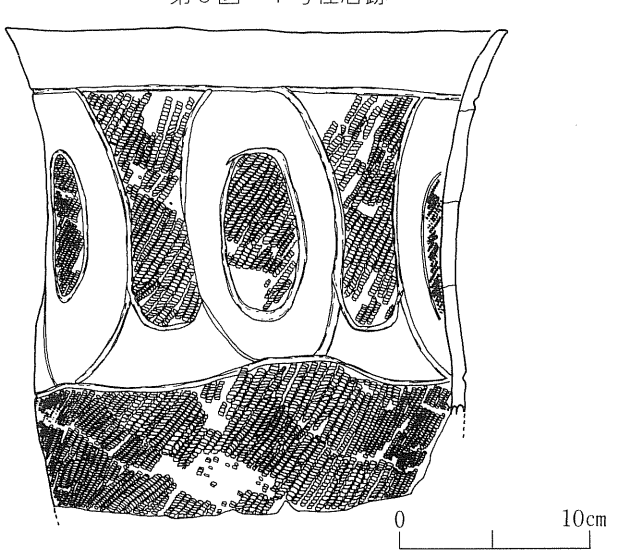


第3図　1号住居跡

出土遺物

土器（第4図）

炉埋設土器である。底部は欠損する。口径26.4cmで胴下半分がゆるく膨む深鉢形土器である。頸部に一条の沈線、胴部にはゆるい波状の沈線がめぐり、その間に沈線により5単位に楕円文が二重に施される。またその間にはU字状の沈線を配し連絡している。沈線間は磨消される。地文の縄文は、RLの縦位回転である。焼成は良好で、口縁部から頸部にかけて二次加熱を受けている。



第4図　1号住居跡、炉埋設土器

２号Ａ・Ｂ住居跡（第７図）

調査区のほぼ中央部に位置する。炉が住居跡の中央部（Ａ炉）と北側（Ｂ炉）の二カ所に検出されたことから２時期が考えられる。

現存するプランは、長軸５ｍ、短軸４ｍの南北に長い楕円形を呈する。壁高は良好なところで約20cmを計る。このプランがどちらの炉に伴うものか不明である。炉は、Ａ・Ｂとも石囲い炉で、Ｂ炉が若干小さくなる。Ａ炉が確認レベルも高く、また貼り床も認められることから、新しい時期と思われる。ピットは壁下に二重に確認され柱穴と考えられる。北西部に径70cm、深さ１ｍの袋状を呈する土坑があり、住居跡に伴うものと考えられる。北西部に径70cm、深さ１ｍの袋状を呈する土坑があり、住居跡に伴うものと考えられる。古いＢ炉の床は軟弱である。

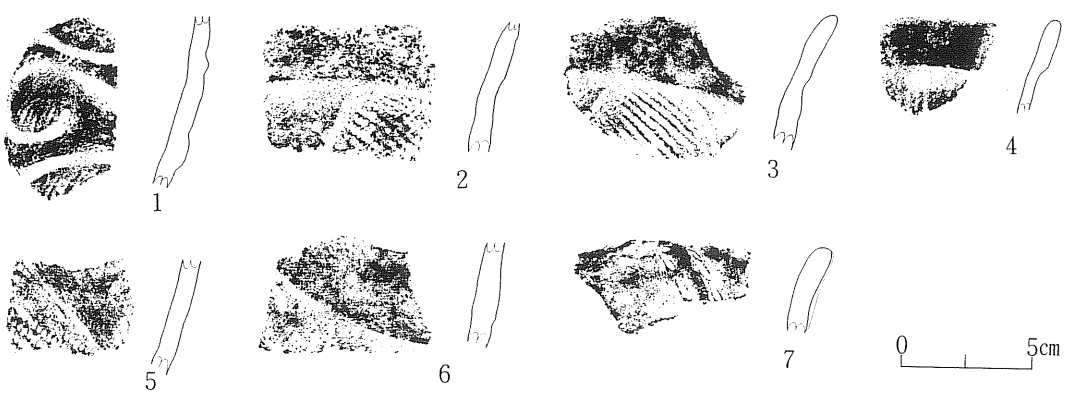
出土遺物

土器（第５図）

１は袋状土坑覆土出土である。沈線で文様を描く。２～７は住居跡覆土から出土した。２～４は口縁部がやや外傾し無文帯である。胴部は沈線と磨消し手法によって縄文帯と無文帯を画する。７は無文部に縦に隆線が付され、その両側に刺突を施すものである。

石器（第16図１・２）

磨製石斧が２点出土した。２は刃部の破片である。二つともきれいに研磨されている。



第５図　２号住居跡出土遺物

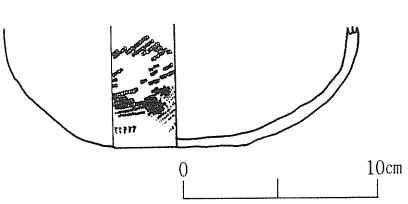
１号炉跡（第７図）

調査区中央部、２号住居跡南壁に隣接して検出された。住居跡の炉と思われるが住居跡のプランは不明で、炉の遺存だけである。炉は、土器埋設石囲い炉である。２号Ａ・Ｂ住居跡の確認面と同レベルにあることや、埋設土器から晩期の時期と思われる。

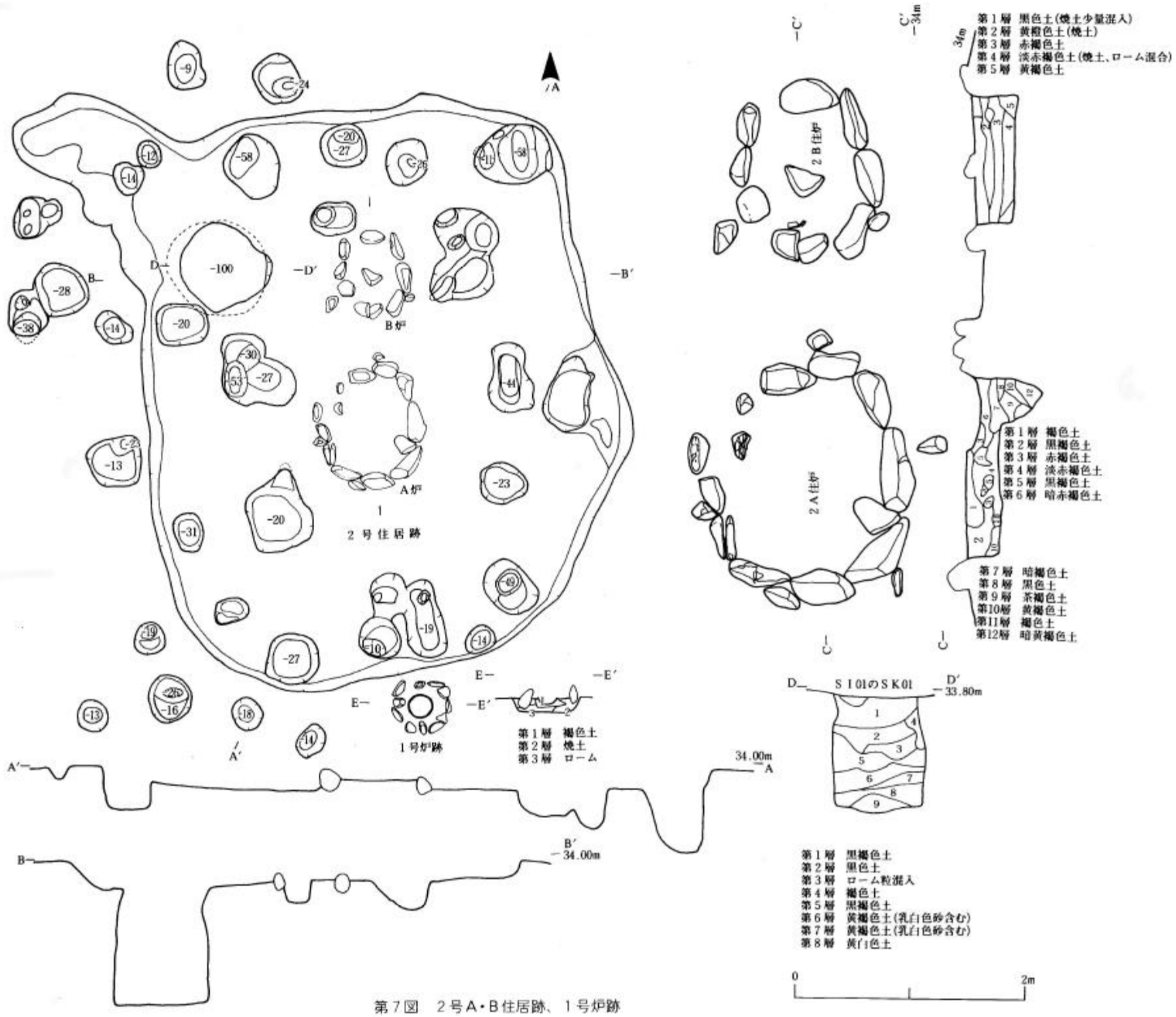
出土遺物

土器（第６図）

炉埋設土器である。上部は欠損している。底径７cmで、内湾しながら立ち上がる鉢形土器である。地文はＬＲの横



第６図　１号炉跡、炉埋設土器



第7図　2号A・B住居跡、1号炉跡

位回転の斜縄文である。

1号竪穴状遺構（第8図）

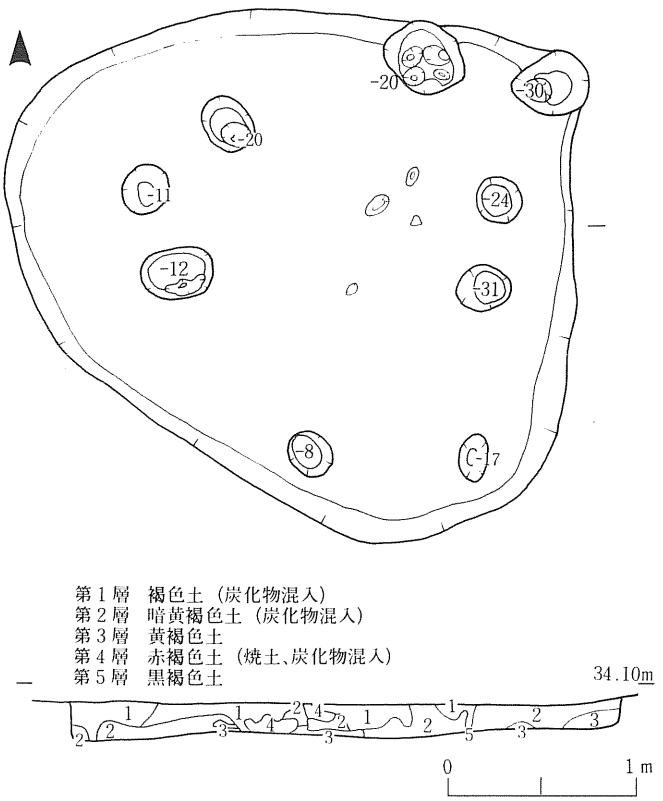
調査区の東側、1号住居跡の南に位置する。

プランは、径約2.5～3mの不整円形を呈する。壁高は約24cmで、ほぼ垂直に立ち上がり良好である。覆土は褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土が堆積し、やわらかくブロック状をなすところもみられる。ピットは壁下に検出されている。床は非常に軟弱である。

2号竪穴状遺構（第9図）

1号住居跡の北東に位置する。

プランは、長軸3.35m、短軸2.6mの楕円形を呈する。壁高約10cmで、若干傾斜しながら立ち上がる。覆土は、炭化物の混入した褐色土、黄褐色土、黒褐色土などが堆積する。中央部に不整形のピットがあるが覆土から攪乱であることが判明した。



第8図　1号竪穴状遺構

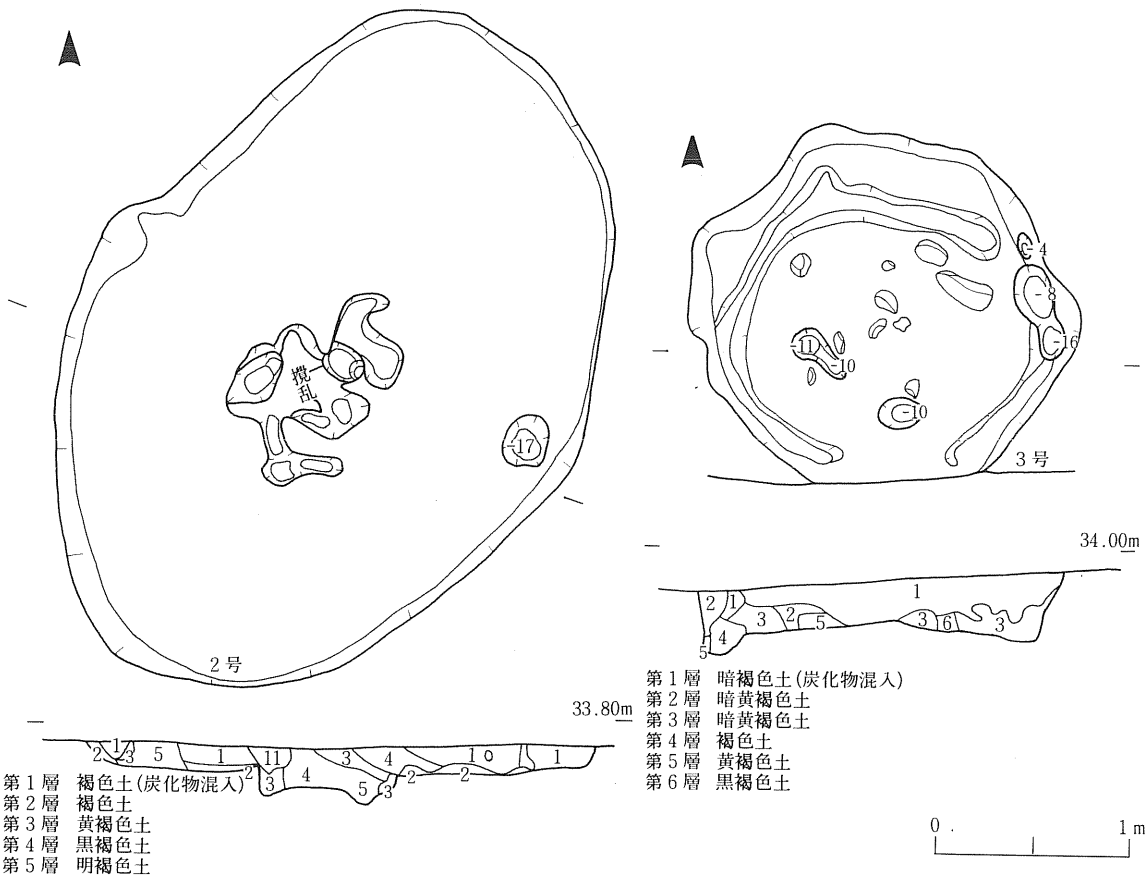
3号竪穴状遺構（第9図）

調査区の東側、1号竪穴状遺構の南側に位置する。

プランは、径約2mの円形を呈する。壁高は約40cmである。壁直下には、深さ約10cmの周構が認められた。床面は平坦で良好である。覆土中には礫が数個含まれていた。

土坑（第11図）

番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1号土坑	径 160		290	円形	フラスコ	縄文中期土器片
2号土坑	径 200		204	円形	フラスコ	〃
3号土坑	135	100	74	円形	袋状	〃
4号土坑	径 67	140		円形	フラスコ	
5号土坑	90	70	88	楕円	フラスコ	
6号土坑	径 90		50	円形	鍋底状	円盤状石製品
7号土坑	径 1.40		50	円形	筒状	縄文中期土器片 石ベラ状石器



第9図　2号・3号竪穴状遺構

出土遺物（第16図）

6号土坑出土遺物（4）

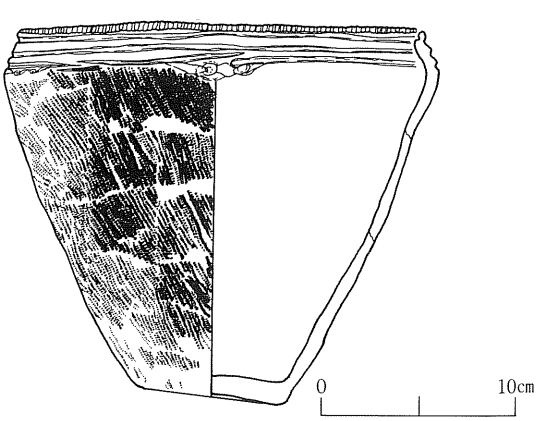
円盤状石製品1点が出土した。礫を丸く打ち欠いて作り、アスファルトが少量付着している。

7号土坑出土遺物（3）

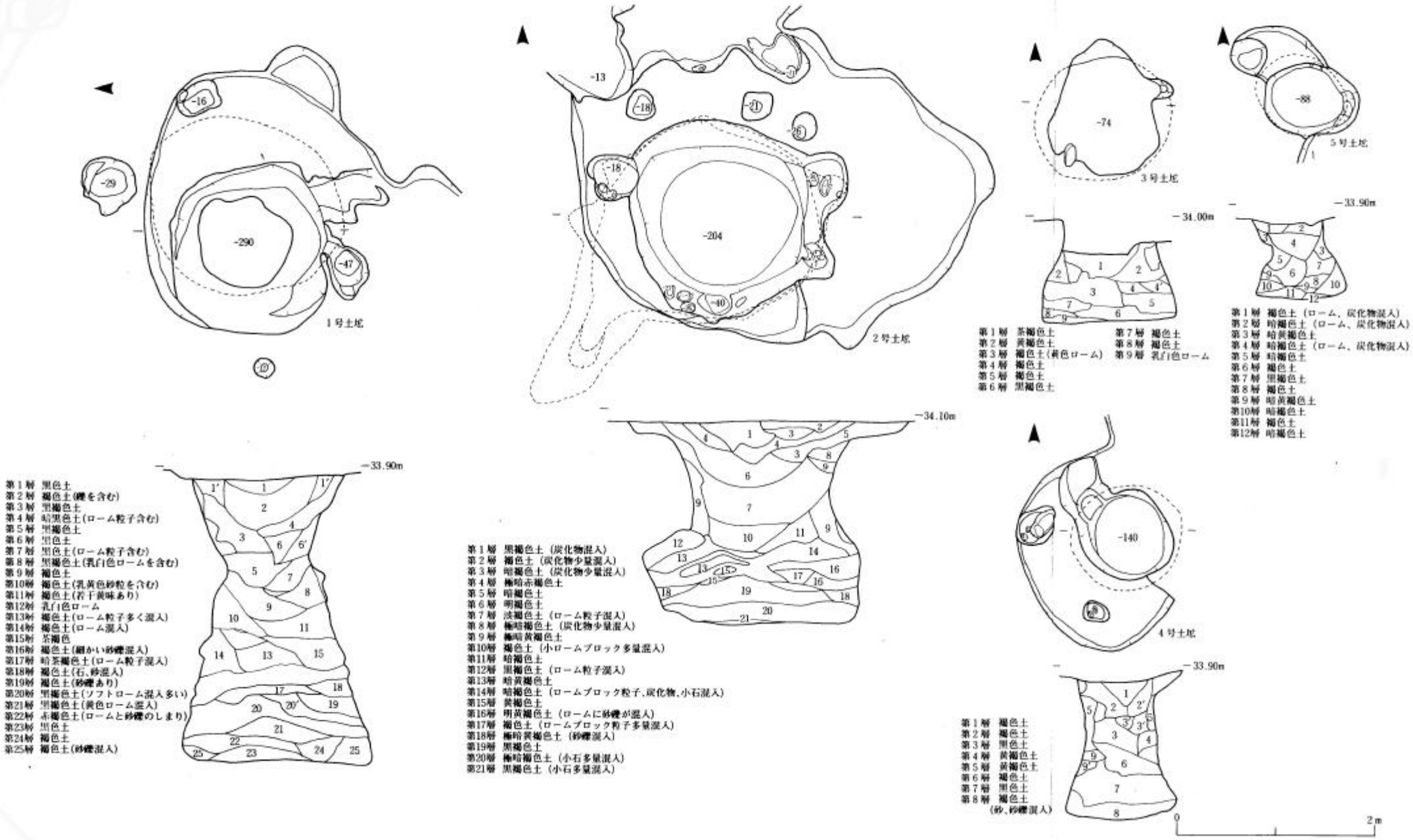
ヘラ状石器1点が出土した。細かく両面剝離を施し刃部を作る。頁岩である。

1号ピット出土遺物（第10図）

ピット内から出土した完形土器である。口径21cm、底径7.5cm、器高19.5cmを計る。口縁部が内傾する深鉢形土器である。口唇部に刻みが施され、下に3条の平行沈線がめぐるが、3本目は途中で切れる。5カ所に二個一対の突起が付される。地文はRLの横位回転の斜縄文である。



第10図　1号ピット内出土土器


1号土坑
2号土坑
3号土坑
5号土坑
4号土坑
-33.90m
-34.00m
-34.10m
第1層 黒色土
第2層 褐色土(礫を含む)
第3層 黒褐色土
第4層 暗黒色土(ローム粒子含む)
第5層 黒褐色土
第6層 黒色土
第7層 黒色土(ローム粒子含む)
第8層 黒褐色土(乳白色ロームを含む)
第9層 褐色土
第10層 褐色土(乳黄色砂粒を含む)
第11層 褐色土(若干黄味あり)
第12層 乳白色ローム
第13層 褐色土(ローム粒子多く混入)
第14層 褐色土(ローム混入)
第15層 茶褐色
第16層 褐色土(細かい砂礫混入)
第17層 暗茶褐色土(ローム粒子混入)
第18層 褐色土(石、砂混入)
第19層 褐色土(砂礫あり)
第20層 黒褐色土(ソフトローム混入多い)
第21層 黒褐色土(黄色ローム混入)
第22層 赤褐色土(ロームと砂礫のしまり)
第23層 黒色土
第24層 褐色土
第25層 褐色土(砂礫混入)
第1層 黒褐色土(炭化物混入)
第2層 褐色土(炭化物少量混入)
第3層 暗褐色土(炭化物少量混入)
第4層 極暗赤褐色土
第5層 暗褐色土
第6層 明褐色土
第7層 淡褐色土(ローム粒子混入)
第8層 極暗褐色土(炭化物少量混入)
第9層 極暗黄褐色土
第10層 褐色土(小ロームブロック多量混入)
第11層 暗褐色土
第12層 黒褐色土(ローム粒子混入)
第13層 暗黄褐色土
第14層 暗褐色土(ロームブロック粒子、炭化物、小石混入)
第15層 黄褐色土
第16層 明黄褐色土(ロームに砂礫が混入)
第17層 褐色土(ロームブロック粒子多量混入)
第18層 極暗黄褐色土(砂礫混入)
第19層 黒褐色土
第20層 極暗褐色土(小石多量混入)
第21層 黒褐色土(小石多量混入)
第1層 褐色土(ローム、炭化物混入)
第2層 暗褐色土(ローム、炭化物混入)
第3層 暗黄褐色土
第4層 暗褐色土(ローム、炭化物混入)
第5層 暗褐色土
第6層 褐色土
第7層 黒褐色土
第8層 褐色土
第9層 暗黄褐色土
第10層 暗褐色土
第11層 褐色土
第12層 暗褐色土
第1層 褐色土
第2層 褐色土
第3層 黒色土
第4層 黄褐色土
第5層 黄褐色土
第6層 褐色土
第7層 黒色土
第8層 褐色土
(砂、砂礫混入)
0
2m

第11図 土　坑

遺構外出土土器（第12・13・14・15図）

遺構外出土の土器を施文様から、時期ごとに群に分け、さらに類別して述べる。

1群土器

1類（第14図1～3）

細い粘土紐を貼付し、半截竹管状工具により擬似爪形文を施す土器で、地文には羽状縄文もみられる。

2類（第14図4）

口唇から口縁部に貼り付けをもち、口縁部には、半截竹管状工具による沈線が山形に付される。頸部には、半隆起線文が施される。

2群土器

1類（第14図5）

口縁、頸部に隆帯を貼付し、さらに縦に連絡する隆帯を施している。間には撚糸圧痕文による擬似爪形文が施される。

2類（第14図6）

山形口縁をもち，それに平行して隆帯、沈線を施している。隆帯上に刻み目を施す。

3類（第14図7）

地文の縄文に細い粘土紐を貼付し文様を展開させる土器である。

4類（第14図8～15）

口縁部がやや外傾し、無文帯となるものや、沈線で磨消し部と縄文帯を画すものがある。また刺突の施されるものもある。

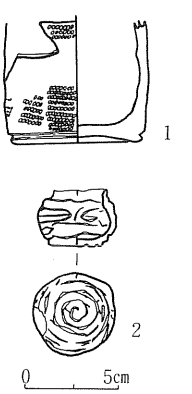
3群土器（第13図1・2、第14図16～24）

沈線を主体に文様を展開させるもので、隆線に刻み、刺突をもったもの、流水状に櫛目文を施すものなどがある。

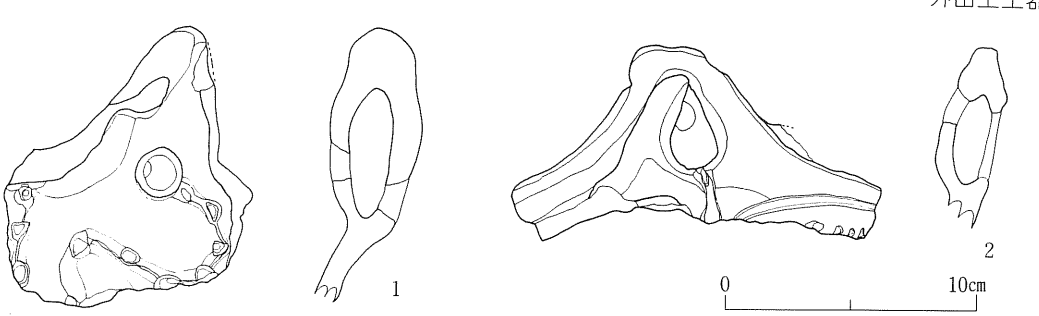
4群土器

1類（第14図25～29、第15図30）

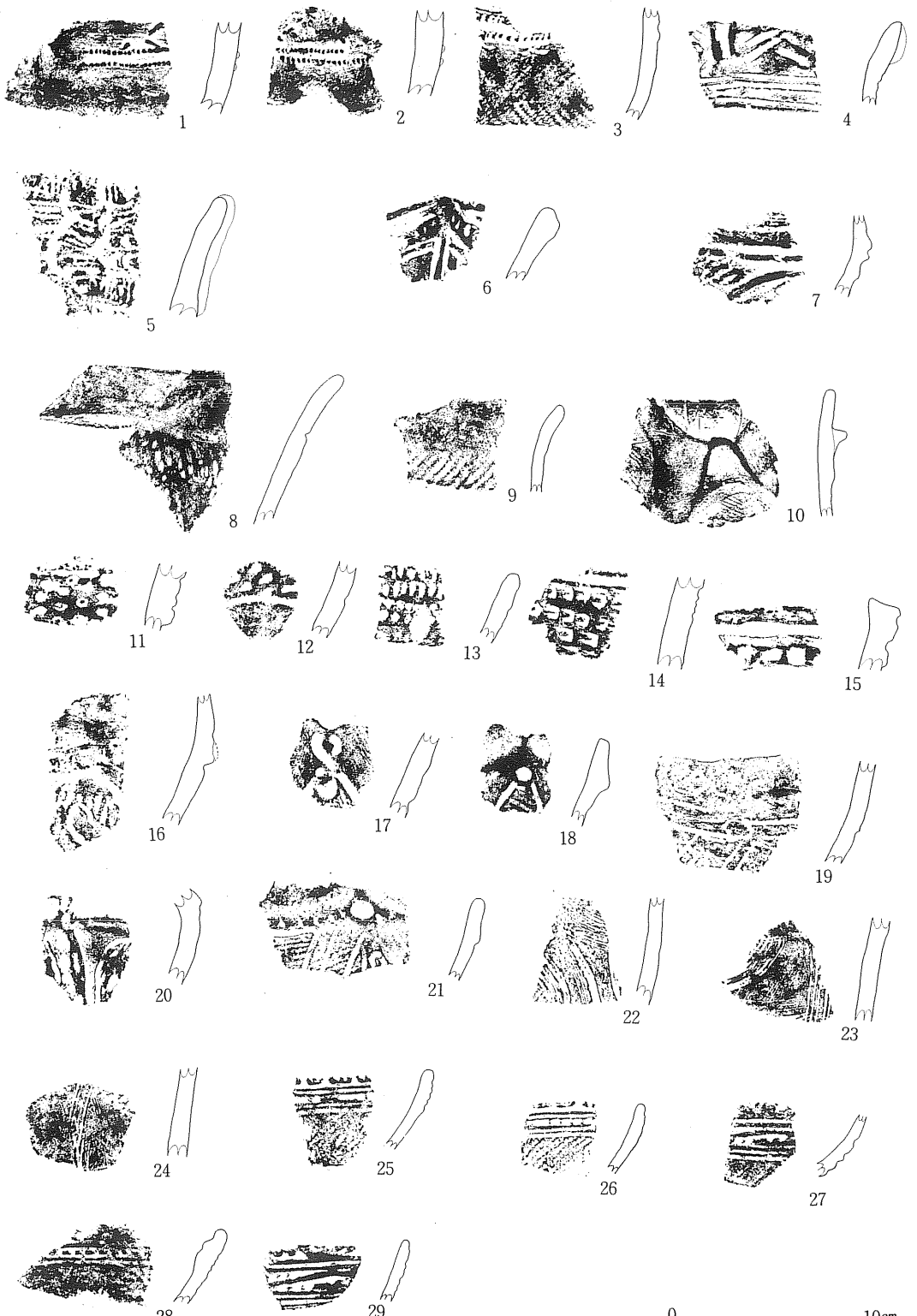
口縁部に羊歯状文をもつ土器である。



第12図　遺構外出土土器



第13図　遺構外出土土器



第14図　遺構外出土土器

第15図　遺構外出土土器

2類（第15図31）

口縁部に平行沈線文を施す土器である。

3類（第12図２、第15図32～34・37～41・43）

工字文を主とする土器群である。沈線で描出するもの、二個一対の突起で連絡させるものなどがある。口唇部に刻みをもつものもある。

4類（第15図35・36・42）

変形工字文を施す土器である。

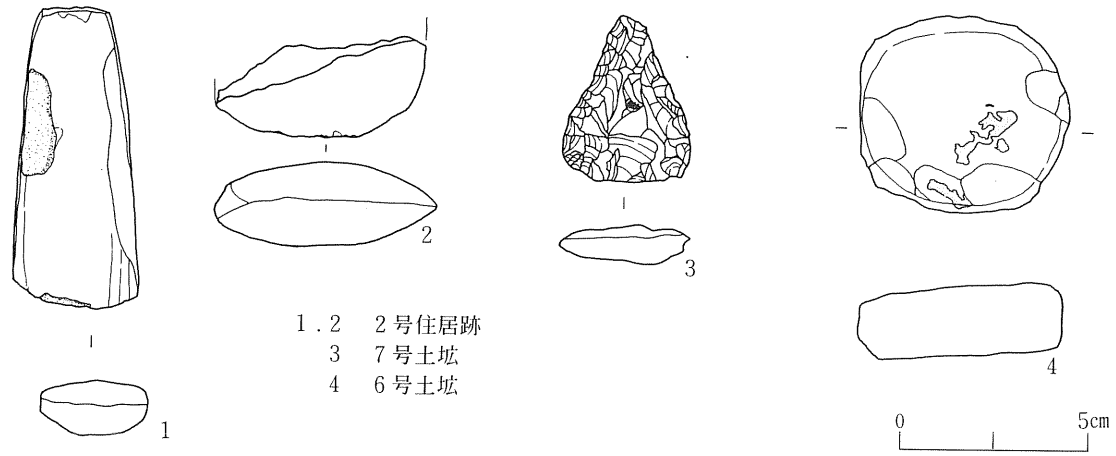
5類（第15図44～50）

広口の甕形土器である。口縁部に縄文を残し、沈線が１～３条口縁下と頸部にめぐり、間は磨消し無文帯となる土器群である。

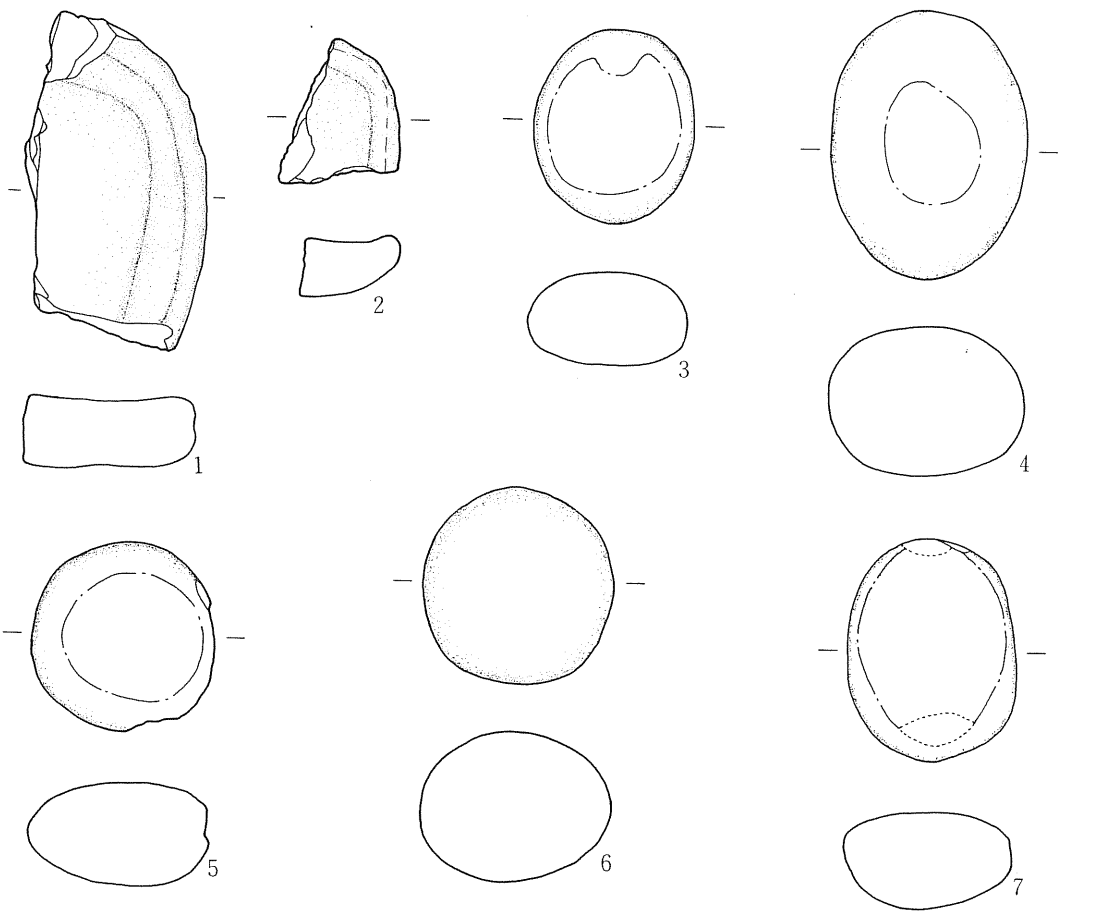
遺構外出土石器（第16～18図）

石鏃は無茎の細長いもので頁岩である（８）。９は石錐で上面に自然面を残している。10～15は石匙である。10～14は横型、15は縦型である。13は片面加工である。すべて頁岩である。９～12・14は両面加工で刃部を作るヘラ状石器である。すべて頁岩である。22・23は比較的大きな剝片を素材として片面剝離で刃部を作り出している掻器で、石質は頁岩である。24は長さ4.6ｍを計る小形磨製石斧である。25～28は磨製石斧で、26は全体に細かい擦痕がみられる。22は石剣の破損品である。表裏に刻線がみられる。31・32は打製石斧である。１・２は石皿で２個とも欠損している。１の凹面はきれいに磨れている。石質は安山岩である。３～７は磨石である。

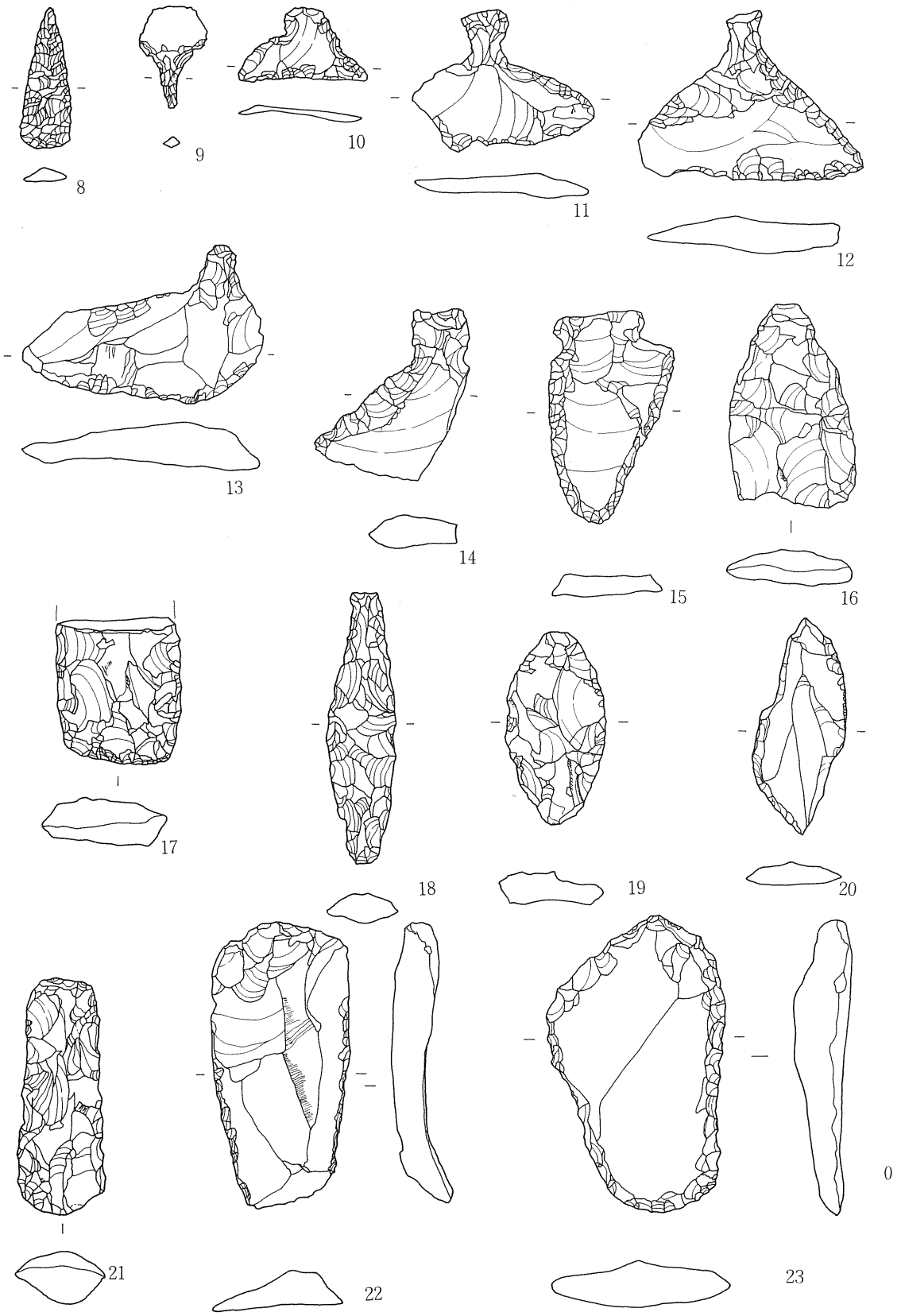
石製品(30)：両端に孔を穿っている。装飾品であろう。



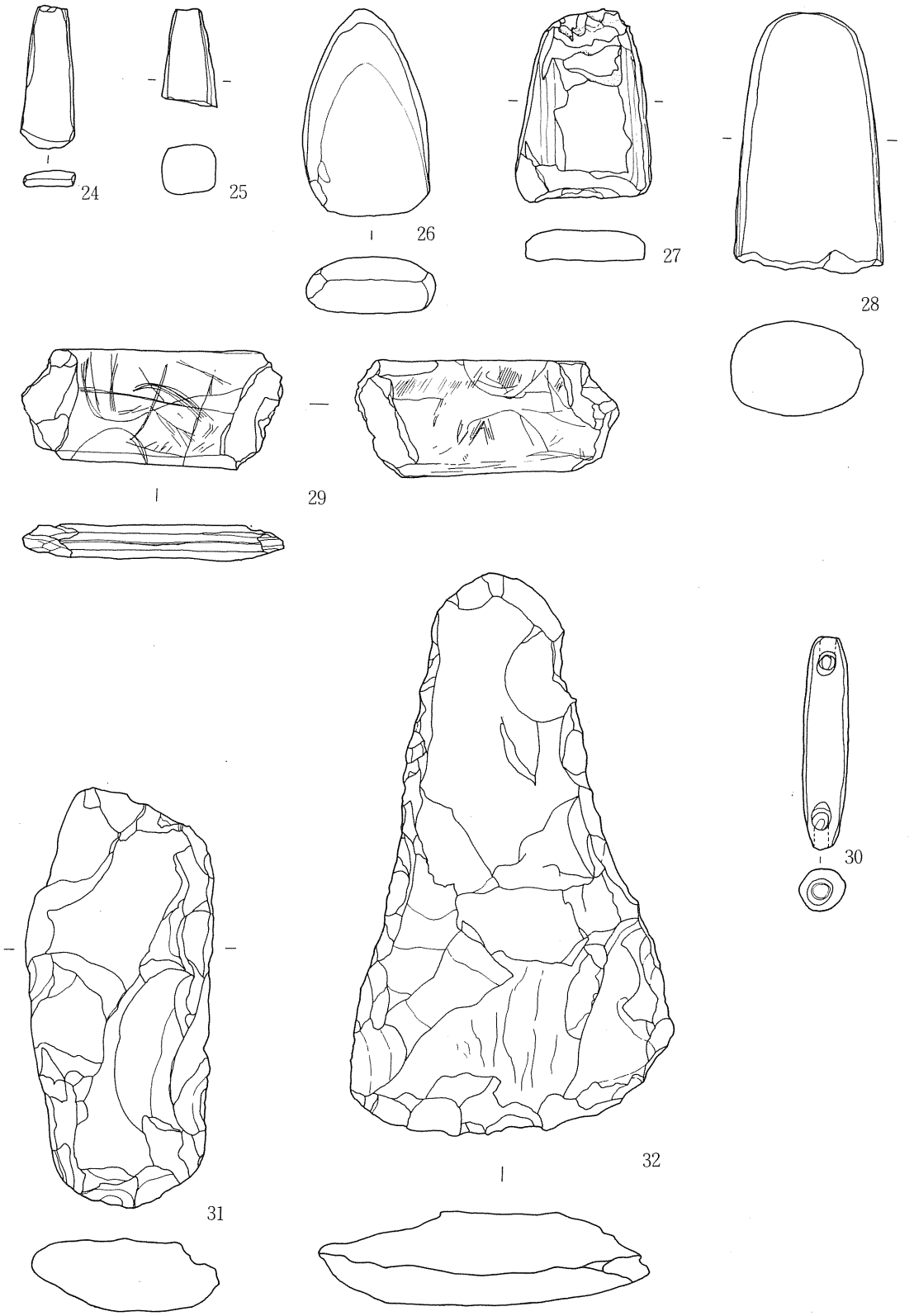
1．2　2号住居跡
3　7号土坑
4　6号土坑



第16図　遺構内外出土石器



第17図　遺構外出土石器



第18図　遺構外出土石器

まとめ

遺構について

湯ノ沢H遺跡は、北に小さく張り出す台地である。今回の調査では中央部、西、南側の畑地にもトレンチを設定して調査を実施したが遺構の確認はできなかった。本遺跡では、台地先端の縁辺部にのみ遺構が検出できた。しかし、非常に小規模である。

遺跡は、縄文時代中期、晩期の複合遺跡である。晩期の遺構は表土下の黒色土から掘り込まれており、表土除去作業の際に一部壊された可能性がある。発見した遺構は前述した通り、縄文時代中期の竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、晩期の炉跡、土坑等である。台地の形状などから他に遺構が広がる可能性はきわめてうすく小規模集落のようである。

縄文時代中期住居跡の時期は、１号住居跡炉埋設土器、２号住居跡床面出土土器から中期末葉大木10式期に位置づけられる。

遺物について

遺構内外出土の土器は出土量が少なく、拓影図として図示し得たものも非常に少ない。

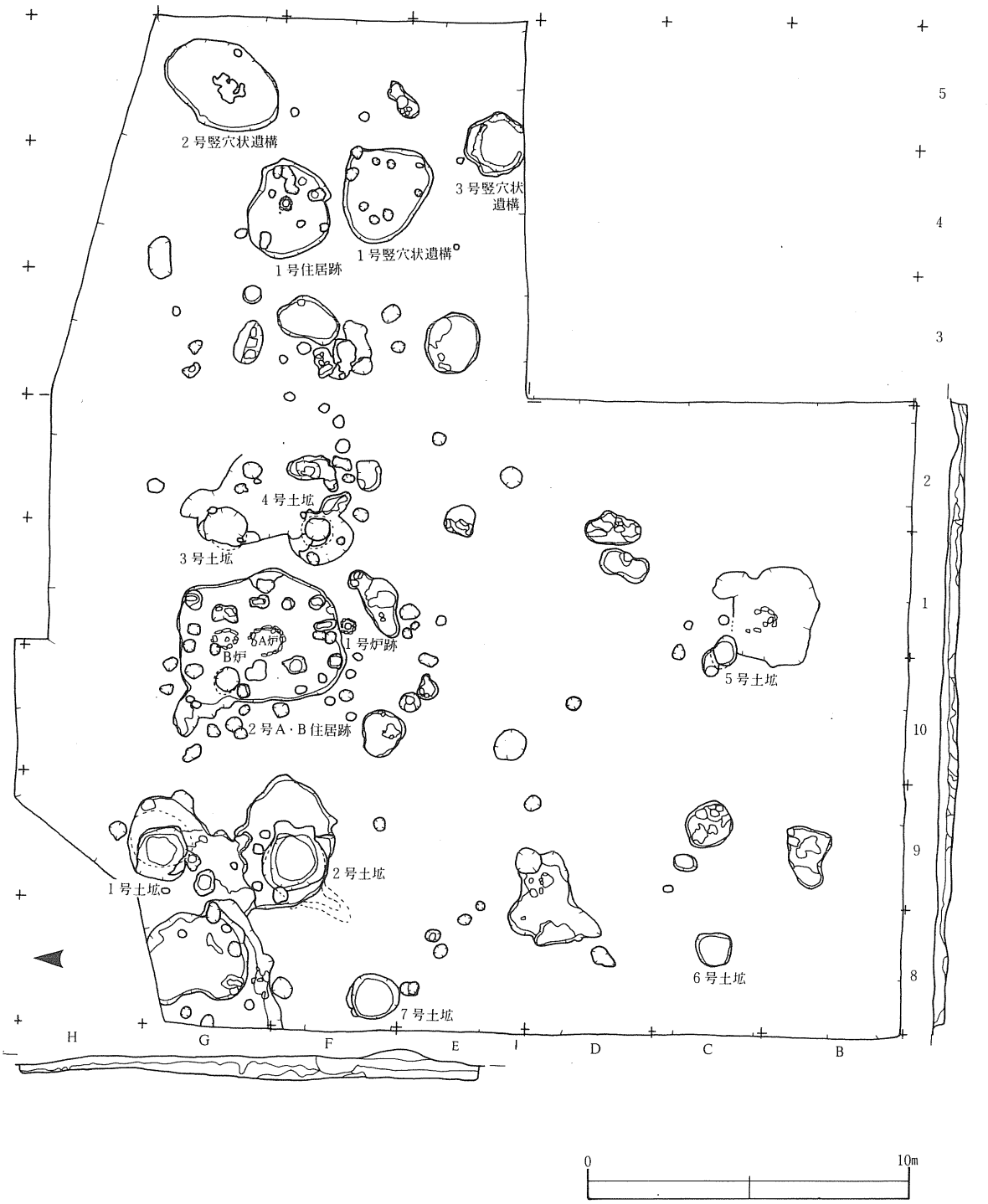
出土遺物は、先に１群から４群土器まで大きく分け、さらに類別して述べた。ここではそれらを編年的に位置づけてみたい。１群土器としたものは縄文時代前期末葉の土器であり、１・２類とも大木６式に比定できるものであろう。２群土器は大きく縄文時代中期の土器である。１類は円筒上層Ｂ式、３類は大木８ａ式、４類８～12は大木10式に比定できると思われる。３群土器は縄文時代後期初頭の土器群を一括した。第13図１・２は門前式に併行するものと思われる。４群土器としたものは縄文時代晩期の土器である。１類は大洞ＢＣ式、２類は大洞Ｃ$_2$式、３類大洞Ａ式、４類は大洞Ａ′式にそれぞれ比定されるものであろう。５類とした、口唇部に縄文を残し、頸部に磨消し無文帯をもち、下部に数条の沈線がめぐる甕形の土器はあるいは弥生時代に位置づけられる可能性がある。

参　考　文　献

芹沢長介、坪井清足他：「縄文土器大成、第２巻中期」講談社　1981

秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書、駒坂袋Ｉ遺跡」秋田県文化財調査報告書第92集　1982

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　1983


2号竪穴状遺構
3号竪穴状遺構
1号住居跡
1号竪穴状遺構
4号土坑
3号土坑
A炉
B炉
1号炉跡
2号A・B住居跡
5号土坑
1号土坑
2号土坑
6号土坑
7号土坑
H
G
F
E
I
D
C
B
5
4
3
2
1
10
9
8
0
10m

第19図　遺構配置図